



明治四十年八月發行

# 校友會雜誌

第六號

山口縣立萩中學校校友會



山口縣立  
萩中學校  
校友會雜誌第六號目次

論說

- 人格修養と偉人模倣……………一頁
- 如何にせば文の上手とならるべきか
- 學生と元氣
- 音樂と精神
- 學生の前途
- 特色
- 堅固なる自信をもて
- 形式の偏重

雜錄

- ほととぎす……………一頁
- 遊言錄……………二頁
- 旅行中の所感……………三頁
- 一種の史傳を紹介す……………四頁
- 沙翁傳……………五頁
- 思ひ出せば……………六頁
- 漫筆……………七頁
- 錦囊……………八頁
- 俳人の逸話……………九頁

英文

A Retrospect.

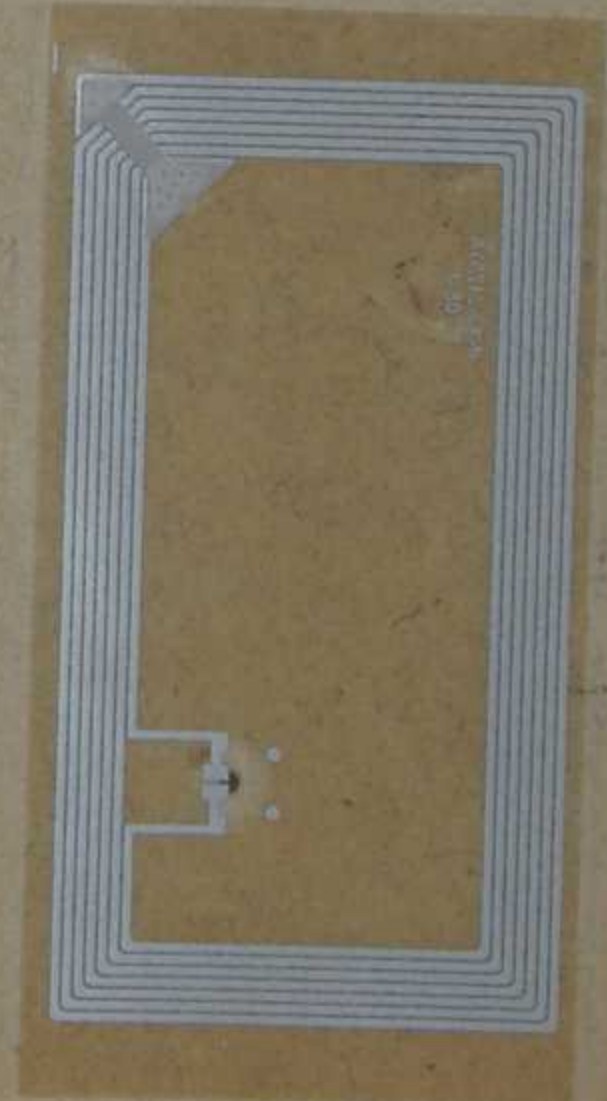
H. Iwata.

目次

The Brave Young Soldier.  
Shichihai Hamaya, 5th year.  
The Two Filial and Affectionate Sons  
at Kagawazu. Hideo Tanabe, 3rd year.  
Scrap-Book. F. Tomno.

詞藻

- 半風子辭……………四十八頁
- 夏の初め……………四十九頁
- 冬旅の一日……………五十頁
- 寄宿舎の朝……………五十一頁
- 浩然の氣を養ふべし……………五十二頁
- 風の辭……………五十三頁
- 回想……………五十四頁
- 春と秋……………五十五頁
- 月鈴子……………五十六頁
- 五月雨……………五十七頁
- 四季の月……………五十八頁
- 眞の樂……………五十九頁
- 我等の前途……………六十頁
- 將來に於ける我故郷……………六十一頁
- 綠蔭の悲劇……………六十二頁
- 余が渡滿紀行の一節……………六十三頁
- 指月巖頭に立ちて……………六十四頁
- 夏の趣味……………六十五頁
- 讀書の樂……………六十六頁





- 立志
- 落花を弔ふ
- 大和魂
- 名なし草
- 秋の山里○亡き人
- 首夏雜詠
- 桐一葉
- 折にふれて
- 花の波○初雪
- 野邊の春
- 別れし友に
- 暮れゆく海邊
- 舊城址に立ちて
- 富士山
- 海原

會友通信

- 廣島より
- 三池炭坑より
- 熊本縣より
- 札幌より
- 慶應義塾
- 慶應義塾の體育會について
- 俵瀨

- 原田 正三
- 松井 隆美
- 片山 平作
- 彌政 南葉
- 大草 露芳
- 頓野 指月
- 小林直三郎
- 富田 流葉
- 桑原 雅亮
- 木原 直孝
- 安藤 茂作
- 王藤 峻
- 野北 重利
- 栗栖 北洋
- 上野 北洋

- 恩師の送迎
- 有地中將の來校
- 滿韓修學旅行
- 瀧口代議士の視察談
- 第七周紀念式
- 父兄保證人會
- 加村大尉の海戰談
- 學友の計
- 第七回卒業式
- 修學旅行
- 羽賀臺遠足
- 下關商業學生の來校
- 河内少佐の寄贈品
- 戰役紀念品
- 萩原總事及卒業生の寄贈品
- 日誌本校

校友會記事

- 本會役員
- 琵琶演奏
- 希望の光
- 劍道部
- 柔道部
- 球術部
- 端艇水泳部
- 文藝部
- 寄贈書目
- 文藝部第十二例會
- 本會々計報告

附錄

- 本校の沿革略
- 現在職員表
- 學級數及生徒數
- 生徒郷貫別表
- 生徒年齡調查表
- 入學前の成業別
- 武學貸費生
- 卒業生一覽

彙報

八十八頁

目次終

山口縣立 中學校 校友會雜誌第六號

(明治四十年八月)



人格修養と偉人摸倣

羽石重雄

人格修養或は單に修養といふ語は近來盛に使用せられて殆んど一種の流行語となれるが如き觀あるも其實は時世の進歩に伴ひ修養といふ事柄の吾人に取りて益々必要となりたる結果斯語の今日斯くも頻繁に唱道せらるゝに至りたるに外ならぬのである則ち將來に於て苟も社會國家に有用の人物と謂はるべきにつきては人格の高尙なるといふことが從來に比しては層一層必要の條件となつて來たのである(茲に一言述べ置くべきことは人格の意義を未だ十分に解せざるものあるべしと思ふ元來人格と云ふ語は其意義極めて汎きが故に詳しく説明は今之を略す只單に人格の高尙なるといふことは品位の高きこと、品性の立派なること、或は高尙なる理想を有し而して日常の行爲が其理想に背戻せざることをいふのであると思つて居れば先づ夫れて宜しい)而して修養といふことは人の職業、年齢、地位境遇等の如何に拘はらず誰にも齊しく必要なものである而してまた人の品性は修養すればするほど無限に發展するものにして随つて人格は益々高くなるものである



るから修養は何人も片時たりとも怠りてはならぬものである然し修養上最も大切なる時期はと問へば矢張り學生時代である何となれば此時代は智識の發達が最も盛である隨て智識を將來正當なる道に活用すべき精神上の根據を養ひ置くことは亦最も必要なことである若し智識のみ發達して意志の訓練が足らざるときは所謂片輪ものとなりて社會、國家に有用の人物たることは到底出來ない否智識ばかり進んで修養の欠けたるものほど世に危険なものはない又有害なものはないのである往々學生間に學科は實に能く出來て品性の下劣なものがあるが彼等の將來は頗る懸念に堪えぬと思ふ故に學生は平素學科に勤勉なるべきは勿論のことであるが又修養と云ふことを一日も念頭より離してはならぬ。

さて修養の道は種々有るべしといへど茲に述ふるは偉人摸倣と云ふことである或は偉人崇拜と謂つても宜しからん詳しく言へば古今の英雄豪傑と謂はるゝ人物中其人格に於て己れの最も渴仰する所のものを選びて之に私淑することをいふのである則ち彼の傳記を讀みては其面目を彷彿たらしめ或は彼の著書を繕きては其人物を想像して彼の思想抱負に自から恍惚たるが如き或は彼の肖像を机頭に掲げて日夕崇拜し或は彼の遺物墨蹟を愛玩珍重して絶へず之に接觸するが如き斯の如きことは彼に對する景慕の念をして層一層深厚ならしめ隨つて自然に彼を摸倣するの傾向を生じ來りて我が品性はいつとなく陶冶せらるゝに至るものである。

然らば摸倣人物としては如何なる人物を選択すべきかといふに苟も人格高き人ならば如何なる種類の人物にても宜しい政治家、武人、學者、宗教家、乃至實業家にも宜しい又古今東西の別を立つるを要せず摸倣すべきは人物其のものにありて必しも其事業にはない故に人格に於て欠くる所あるものは如何なる著名の人物と雖も崇拜するに足らず否摸倣すべき價值なきものと云ふべきである而して人格の高き人物とは如何なる人

物かといへば種々の要件を備へたるものでなければならぬと思ふが先づ古今の大人物につき其人を選択せんとするには次の二要件に注意することが肝要であると思ふ。

第一至誠の人たるべきこと 古來偉人物として長く後世より尊崇せられつゝある人は多くは至誠の人である功名心に驅られ又は自家の利得の爲めに大事業を爲し名聲を博したるものゝ如き或は權謀術數を自家の本領として大成功を遂げたるものゝ如きは所謂人傑には相違なかるべきも決して人格高き人物ではない又決して後世より崇拜せらるべき價值ある人物ではないのである吉田松陰は偉人物である、崇拜すべき人物である而して彼の雄偉は主として彼れの至忠至誠なるに存してをる平重盛然り菅原道真亦然りである故に至誠の人格に離すべからざる關係あること大抵推して知るに難からざらん。

第二意志の鞏固なること 換言すれば艱難を排して飽くまで自己の主張を貫行する勇氣あるを云ふのである人の世に立つや必ず幾多の艱難に遭遇す若し夫れ所謂堅忍不拔の精神なきものに於ては一大困厄に遭遇するときは忽ち意氣銷沈するに至る斯の如きものは假ひ學識材幹ありと雖も決して社會國家に其用を爲すことは出來ない古來世に多大の貢獻を爲したる諸般の大事業はすべて鞏固なる意志の實現であると云ふことは決して忘るべからざることである而して意志の鞏固は前に述べたる至誠も密接の關係を有す即ち人は至誠にして始めて眞の勇者たることを得るものである所謂俯仰天地に愧ぢざるものにあらざれば百難を排して勇邁前進する勇氣は出ないものである孟子に「自ら反つて縮ちぢからざれば褐あは寛博と雖も吾わが慌あわれざらんや自ら反つて縮ちぢくれば千萬人と雖吾往かん」とあるは即ちこの謂である吉田松陰は所謂意的人である即ち自己の意志を貫徹せんが爲めには如何なる艱苦をも顧慮せざる人である實に彼れは死をも少しも恐れなかつたのである而し



て彼の一念は全く國家にありて胸中一片の私もなかつた即ち至誠であつたこの故に斯く大膽であることが出来たのである彼れは己れの至誠を以てすれば何人たりとも決して動かざるものはなしと最後に至るまで堅く信じて居つたのである然しながら「人多ければ天に勝ち天定まつて人に勝つ」の理にや彼は遂に斷頭場裏の露と消ゆるに至りたるが今日に於ては世人一般に彼れの人格を認めて神として拜祀するに至つたのである要するに彼れは至誠であると同時に意思が非常に鞏固であつたが爲めに長く不滅の生命を身後に留むることが出来たのである其他後世より人格上景仰せらるゝ歴史上の人物は勿論のこと今日現存せる人傑の中にも世人に欽慕せらるゝ人物は多く右の二要件を具備したる人である現今の阿米利加合衆國の大統領ルーズベルトは世人が偉人と看做してをる人物であるが少しく彼れの行動に就きて注意すれば彼が赤誠の人であると共に彼れが如何なる困苦に出會ひても主張を枉げざる勇氣を有すること即ち彼れの生活が常に奮闘的であることは能く認めらるゝことである若し又現今我國に於て其人を求めば乃木大將の如きは蓋し此條件を具備したる人であると思はる。

以上述べたる二要件は模範人物を選択するに先づ標準と心得ふべきことである徒に其事業に眩惑せられて直に其人を欽慕し模倣せんとするは頗る危険である元來偉人の傳記等を讀むことは學生に取りては最も趣味ある且修養上極めて有益のことであるから可成好んで讀むことを奨励したのであるが同時に茲に述べたる事柄につきては十分注意せんことを希望するのである。

### 如何にせば文の上手とならるべきか

安 藤 紀 一

「如何にせば文の上手とならるべきか。」の問題は、學生諸子の、往往、解決に苦む所なるべし、故に、余が今説述することは、諸子の多大なる注意を惹くらむと信ず。

文は、思想奇抜にして、これを發表せる文句の巧なるを要す。但、人の思想は、年齢、境遇などによりて、その構成種々なるものなれば、一概に、多數人に、その奇抜を望むべからず。されば、初學の人は、暫く、その思想の秀逸と平凡とを論せずして、先、思想發表の法を講ずべし。

思想の發表は、其に定まれる法式あり。正成が忠臣なることを説定せむには、「正成は忠臣なり」と書くべく、雨の降る理由を問ふには、「雨は何故に降るか」と書くべきなどは、諸子のよく知る所。これ法式なり。さて、諸子は、何を以て、これを知り得たるか。無論、國語讀本及これに類する國文をよみたる結果なるべし。實に、讀書と作文とは、かやうに、密接の關係ありて、作文の技能は、即、讀書の時に養はるるなり。余は、こゝに於て、作文法の説述の爲に、讀書法に論及せざるを得ず。

國語讀本は、もとより、事物の狀理を、文章によりて會得することを學ぶための物なり。故に、いかなる國語讀本に遇ひても容易くその意義を解くことを、惟一の目的とすべきがごとし。然れども、讀書は、作文の力を養ふ素地なること疑なれば、讀本に對しては、思想發表法の研究にまで進まざるべからず。委しく言へば、「この文は、何といふ意義」といふ態度に止らずして、「その意義を、いか様に、發表してあるか。」と注



意する態度に進むことなり。更に言へば、文字より意義に入るのみならず、意義より文字出づる研究を爲さざるべからず。是、諸子が大に注意すべき事なり。

文字と思想との統一より言へば、右の二様の研究態度は、皆、同一の價值ありといふべしと雖、文字先現はれたる時にこれに適する思想を考ふると、思想先浮ひたる時にこれを發表するに足るべき文字を考へ出すとは、これを實地に應用する場合、相同しからず、作文に於ては、先づ發生する意義に伴ふべき文字を考出するに敏捷なるを要するものなれば、彼の讀本に對して、「その意義を、いか様に、發表したるか。」の研究が、作文の技能の素地なるべきこと、亦明ならずや。

世に、書籍の讀解に巧なる人あり。この種の人、必しも、悉く能文家なるにもあらず、或は、不思議に文の綴られざるものを其種の中より見出すこと多し。これは、唯、讀まむとして讀みたるものにて、作らむとして讀みたるものにあらず。讀書の道に於て其大半を缺きたる者といふべし。如何なる思想が湧き出でて、容易く發表し得る程に、適當の文句が浮び出てなば、其人、縱令、難文句を解することを得ずとも、余は、これを、讀書の要道を盡したりといはむとす。

然るに、諸子の爲に危言する門外漢あり。曰はく、「中學生の學ぶなる普通文の指導者たるべき國語讀本は、上級に進むに従ひ、文體、漸く古體に近づきて、普通文體減少し、第五學年用の本に至れば、其數晨星管ならず。されば、讀本を以て作文の力、特に思想發表の能を養はむとすとも、上級生は、普通文の材料を多く得むこと難きにあらずや」と、あ、門外漢ならば、猶恕すべし。諸子に、この考をなすものあらば、そは、決して恕すべからず。それ、國語讀本が、その學科本來の目的を以て、古今の文體を五年間に提出すべき必

要を有し、乃ち、易より難に入る順序により、上級用書に、難澁なる古體を多せざるを得ざる事は、今更に詳言するの要なし。さて、上級生は、この理由を以て、「己の用書より取らるる文の材料が僅少なりといふことを得ず。何となれば、作文の指導者たる讀本は、決して、一箇年にて用を終ふるものにあらず。第二學年の作文には、第一學年用の書をも其指導者となすべく、第三學年の作文には、前兩年の分を併せて、其指導者となすべし。推して第五學年の作文を想へ。其指導は、誠に多きに堪へざるべし。しかるに、諸子は、前學年の讀本を何如なる場合にも、度外に置きて、高閣に束ね、或は、他人に賣渡して、再び手に取るべき便なきに至らしむる者あり。かくしつゝも、動もすれば、余に向ひて、作文書の良きものは無きかと問ふ。是、自ら飲食物を遠ざけて飢渴を致せるが如し。何等の愚行ぞ。故に、余は、かの門外漢の言を聞きて、諸子も必ずこの誤見を有し、この愚行を改めざるならむと想及して、慨歎措く能はざるなり。

蓋、前學年の讀本をかくも急に遠くるは、讓受兩者間に、經濟上の考を加へたるにも由るべけれども、其外に、理由あるべし。念ふに、多數の學科を荷ひたる身の、少し難澁の事柄は、短時間に咀嚼するを得ざれば、唯、その苦しきを感じて、その趣味を知るに及ばず、讀本も、一年間、咀嚼の足らざるままに過ぎ去り、一旦、學年改まれば、厄介物として、これを遠くるに至るにはあらずるか。もし、余が言を信ならずといはば、試に、諸子をして、前學年中の讀本の或文を讀ましめむ。其時は、皆、其文を滞りなく朗讀し、其文想を、己の音聲上に發揮せしめて、傍聽者を感動せしむるを得むか。否、百人中、一人も、かゝる人を得ざるべし。是蓋、讀本の各章を熟讀せず、豫修と、教室にての輪讀と、試験準備との外には讀みたることなく、特に、發音讀のごときは、教室にて教師より命ぜらるゝ外は、一文をも、全篇を通讀せしこと、一回もなきに由る



ならむ。それ、發音讀は、書中の文字、文章を我口の上すことを練習する所以の法なり。而して、筆を取り文を作るに當りては、その思想の要求に應じて、文語を口より發し、然る後に、之を、文字に寫すが順序なるべく、即、思想を文字に轉寫するの巧拙は、一に、その媒介たる口頭誦述の敏滑と否とに本づくものなれば、平生、文章を我口の上せて他の談話用の語のごとく必要に應じて容易く誦出する技能を養ふこと、豈必要ならずや。且、凡そ、古今の名作と呼ばれる文のごときは、思想奇抜にして發表巧緻なるは勿論、語氣の暢達、節奏の雅正なる、一たび朗誦すれば、洋洋として、音樂のごとく、琅々として、歌謠のごとく、これによりて、文の意義の外に、言ふべからざる美感を人に與ふるものあり、人心をして、浩然として天地の間に充塞するがごとくならしむる者あり。推して考ふれば、作文の想を奇抜にする法も、また、ここにあるべし。發音讀の必要、豈獨文字の排列のためならむや。あゝ、この必要なる朗讀、咀嚼を務めず。その善く讀むものなくして却てこれを厄介視する、亦宜ならずや。それ、諸子の智力は、不斷進歩して、昨年苦しと覺えし事も、今年は、さまでには感ぜず、まして、一昨年に難物とせしものは、はや、何の苦もなきに至るべし。讀本も、當時こそは、讀解に苦しけれども、一學期と限らず、一年と定めず、歲月久しく反覆朗讀咀嚼せば、啻に、苦難の平易に變ずるのみならず、平易は、また進みて、趣味を生じ、趣味極りては、復、これを遠ざくること能はじ。これ余が、幼年以來の實歴に徴して、證言する所なり。要するに、課業書として用ゐたる讀本は勿論、これに類する國文の書は、思想發表上に於ける永久の指導者なり。故に、余は、諸子が平時屢朗讀して、文の趣味を感得し、一時の感情に驅らるること無くして、永く坐右の珍とし、作文技能の指導者たる用を盡さむことを勸む。

以上述べたるは、作文方面より見たる讀書の法なり。今これを約言すれば、左の五則に出でず。

- 一 作文の技能の素地は、讀書にあり。
- 二 讀本は、作らむが爲に讀むべし。
- 三 讀本は、平時、熟讀して咀嚼すべし。
- 四 前學年の讀本を度外に置かず、反覆して讀むべし。
- 五 發音讀を忽にすべからず。

果して、かかる注意を以て讀本に對するならば、作文初學の先務たる思想發表上、知らず識らず、多大の養を得て、一旦作文に際しては、意の命ずる所に、筆よく隨ひ、千言響のごとく應じて、立どころに、數葉の紙を書き塞ぐの好成績を得むこと必せり。これ、諸子が作文の上手たる境に入るべき第一進程なり。諸子にして、幸に、この地位に進まば、それより堂に上り室に入る方法は、諸子自ら、發明解決するを得べし。何ぞ、余の言を待たむ。

## 學生と元氣

第五學年 濱 屋 七 平

夫れ、一國の興亡は、青年否な學生の元氣の如何によるものなり。興國の學生には、元氣活動し、亡國の民には、意氣消沈して、眠れるが如し。かのスバルタの武斷的教育は、青年をして、活氣あらしめ、歐洲中にて、かく武威を輝かせしなり。されど、一度柔弱なる氣風が、宗教と共に、その國民の腦裏に投じてより、青



年の活氣は何時しか消えうせ、遂に、北敵蕃人の蹂躪する處となり、滅亡の止むなきに至りぬ。これよりしても、一國學生元氣の存否は、その國の盛衰に關係する事を知るべし。然るに我が國學生を見れば、維新以後、歐洲文明の我國に輸入せらるゝと共に、柔弱なる風俗は、國民の間に行はれ、往古より、東海の表に孤立せる我が帝國固有の美德とも稱せられたる武士道は、滔々として、地を掃ひたるが如く、安閑として自ら甘ず。現今の學生亦然り。國家の基礎ともなるべき學生にして、顔色青く、一見肺病患者の如きものあり。而して、彼等自ら得々たるなり。嗚呼彼等は、眞に肺病患者なるか、否管に肺病患者たるのみならずして、その精神の病死せむとするものなり。見よ、當代の名士と呼ばれ、俊傑と稱せらるゝ人を。彼等は其の青年時代に於て、如何なる状態にありしか、彼等は、リボンを以て、襦袢のボタンに代りに用ひし事なく、高襟天を仰ぎし事なし。彼等天を仰ぐ時には、社會の状态に慷慨して、悲憤の涙をそぐのみなり。然るに、今の學生は、ハイカラを氣取り、女らしきを好みて怪まず。あゝ所謂青年の語は、偶々色青き輩の意と誤解し易きに至らむとす。

それ人生を四季に譬ふれば、幼年は春なり、青年は夏なり、壯年老年は、秋なり、冬なり。しかして、幼年は、元氣發動するも、大になすこと能はず。壯年亦なす事能はず、況や老年をや。然らば則ち、元氣を大成して、大に爲すことあらんとすべきは、唯青年なるのみ。かの新緑滴らむとする喬木を見よ、春風中果してこの觀あるか。秋氣催すとき果して此の景あるか。吾人青年の氣力は、朝日に匂ふ花よりもむしろ、この夏の喬木に譬ふべし。吾人が胸の熱涙の熱は、夏日の熱の熱さよりも熱さのものなるべきなり。近頃學生間に、控處勉強廢止の聲起り、少しは、元氣回復して、控處勉強連中もなく、寂寞たりし運動場

に、漸く人聲を聞くに至りしは、聊か余輩の心を慰むるに至りたるが、もしこの事龍頭蛇尾に終らしめは、狂者の行のみなり。輕薄者の爲のみ。

暗澹たりし雲の、滿洲の野に滿ちたるも、今は、霽れ渡りて、平和の光、四方に輝けり。されど、平和の闘争は、刻々、他國と開かれつゝあり。しかしてこの奮闘に勝を制するは、精力の強壯と、その氣力の活潑なるとによる。嗚呼青年精力、氣力の修養は、それ今の時なるか。

### 音樂と精神

第三學年 杉 本 基 良

空に轉る鳥の聲、巖に碎くる波の音、松に叫ぶ風の聲、遠音に響く絃歌の音、風に聞ゆる笛の聲、皆、一として、吾人が精神に作用せざるはなく、一として吾人が精神に感動を與へざるはなし。然して、音樂には自ら、勇壯、艷麗、悲哀の別ありて、前者は、元氣を活動せしめ、中者は、人をして、沈重従容せしめ、後者は、同情憐憫の情を起さしむ。何れも皆、吾人精神教育上に、多大の影響を及ぼすものなり。されば軍隊に、學校に、其他、大小、何れの所に於ても、殆ど、音樂の備へなきはあらざるなり。それ、人の喜怒哀樂は、音樂によりて生じ、音樂は、人の喜怒哀樂によりて、始めて、その、價値の生ずるものなり。實に、音樂は、吾人精神の主動本源にして、一日もこれなからむか、世は、無味無色にして、身は、彼の、寂寞荒涼なる砂漠に、浮べるが如し。故に、宜しく、高雅勇麗の音樂思想を養ひ、以て、吾人が閑日月を求め、徒然の友とすべし。忿怒、髮、冠を衝き、目眦裂く時に當り、唳々たる絃歌、嬌々の音、春風に送られて來ら



むか、不知不覺、怒恨の念、頭を脱し、激浪、崖巖に碎けて、轟々たる巨音を發するを聞けば、神胸、頓に開けて、精神爽快、宏大無限の感を來し、我が海國男子の真相を味はしむ。幽鬱悲慘の感、胸に迫るとき、かの可憐なる鳥韻を聞きては、心、恍惚として、自ら、厭世の情を散ぜしむ。尙、眼を洗ひ、耳を敬て、音樂界を達觀すれば、音樂の精神に纏綿すること、實に、驚くの外なし。それ、旭日、雲影を破り、光芒、將に、東天に漲らむとする一刹那、唳々たる起床喇叭の音、曉の夢を破りて、四方に響き渡れば、人をして進取發展、一躍萬里の英氣を感ぜしむ。又、更闌け、夜静まりて、人の將に眠らむとする比、淫猥卑俗の絃歌喧然として、樓外に溢るゝを耳にせば、實に、醜女、權を擅にして、世は、暗澹たる地下の如く、身は、亡國の暗に迷ふが如し。尙ほ、淡雲月を孕み、浚風楊柳を誘ふ春宵、亂歩逍遙すれば、絃歌の聲、或は高く、或は低く、或は近く、或は遠く、和氣洋洋として、世界の平和を唱ふが如く、九夏三伏の暑熱に苦んで、扇を携へて端居すれば、蚊軍猛勢、鬨を成して般々轟々、天柱ために拆け、地軸ために崩づるゝ活修羅の巷の感あらしむ。天高うして、馬肥へ、秋月明らかにして、露繁き夜、垣根にすだく虫の音の、唧々として、空吹く風の肌寒く、悲雁、泣いて西に飛び、梵鐘、無常を告げて鳴り出せば、坐ろに、悲哀の念に打たれ、無量無邊の思ひに沈み、轉た、無常厭世の感に堪へざらしむ。斷雲空に迷ひ、寒風天に吼へ、寒月刃の如く、白雪、矢の如き嚴冬の夜に、高聲、月に向ひて吟咏すれば、玉兔、ために躍り、嚴風、ために静まりて、滿身淋漓、かの、身骨凍る滿洲の野に、世界の大敵と戦ひ、互寒の敵と争ひし、帝國軍人の苦心慘憺の程を思ひ浮ばるゝ。斯く、逐一、これを説き來たれば、吾人は、只に、音樂は、人工の樂器によりてのみ生ずるものならずして、かの造化自然の音樂に於て、言ふべからざる感情の存するを知るなり。然り、この兩者の音樂

は、客觀に、主觀に、これを聞き、これを考ふる吾人が精神の如何によりて、その、喜怒哀樂の差こそ生ずれ。古人、杜鵑の音を聞きて、獨り斷腸の感をなし、今人、喇叭の音を聞きて、勇奮の氣を發するも其の理一なり。さて淫俗なる音樂は、社會國家の風紀を亂し、悲哀なる音樂は、人をして、悲觀厭世の民たらしめ、勇壯なる音樂は、吾人國民をして、快活發進の民たらしむること、何ぞ、余が喋々を待たむや。現今、音樂思潮の發展するや、これに伴ふ弊として、吾人、往々、華美浮薄に流れ、造化音樂を無視し、外觀の美を競ひて、高價の樂器に戀々し、金錢を塵芥と捨て、以て、音樂こゝにありと誇言する者あるに至る。斯くの如き輩の皆、その音樂の音樂たる理を、解せるものゝ、少きを如何んせむ。かの、世界海戰史上に英名を博したる日本海々戰に於て、我が八代海軍大佐の成したる一事を見よ。國家の興亡、一に、此の一舉にありと呼びたりたる、間、髪を入れざる危機に於て、大佐は、平然自若、側らに敵なきが如く、尺八を吹奏し以て、自ら、その英武の精神を激發す。その音、鳴々然として、怨むが如く、怒るが如く、訴ふるが如く、餘音嫋々として、絶々ざること縷の如く、滿艦寂として、人なきが如く、或は、海波をして泣かしめ、或は、敵艦を何によりて、感動せられ、又、作用せらるゝものにあらざるなり。聞く、文化の民は音樂を愛すと、實に然り。音樂は、文化の看板にして、精神の本源なり。されば、東西の洋を分たず、何れの國に於ても、音樂を以て、最一の友となし、これを無上の慰藉となす所以なり。これを要するに、樂音は、吾の精神と、水魚の關係あるものなれば、これを愛し、これを弄ぶと共に、これが、發展改正を促し、品を撰ばず、高尚に走らず、卑俗に流れずして、以て、音樂の真相を味ふべし。然れば、如何に音樂が、吾人精神上に纏綿し、如何



に精神教育上大効果あるを知るならむ。

## 學生の前途

第五學年 佐々木 四郎

抑學生の前途たる、決して坦然砥の如きものにあらず。巍々たる峻山前に横たはり、千丈の岩石左右に屏立し、茫々たる大海大波を漲らし、慘憺たる風雲天地を蔽ふ。而して之を越え、之を航し、之を凌ぎ、之を衝くもの、唯學生なるか。豈固難ならずや。然りと雖も、決して失望すること勿れ。落膽すること勿れ。諺に「苦は樂の種と」あり。實に至言といはざるべからず。見よ。蓋世の英雄倒海の豪傑を。彼の豊太閤の如き、豈吾人と同一の人物にあらずや。而して、彼の如き事業をなしたるは、これ畢竟刻苦の致す所ならずや。さて、人如何に、志を立つと雖も、直に青雲に達せんとせば、却て其目的を達する能はざるのみならず空しく一生を終るに至るべし。之れに反して、長日月の間、千辛萬苦し、忍耐の功を積み、孜孜勉勵せば、其功を以て一大事業を成就し、樂しく一生を終るを得べし。譬へば登山するに一躍一瞬間にして頂上に達せんと欲するも到底其の目的を達し得ず、之に反して麓より一步一步登攀すれば暫時にして頂上に達することを得るが如し。彼の豊臣氏が、身を、微賤より起し、位人臣を極め、遂に朝鮮支那までも名を轟きたるは、乃ち、巍々たる險山を越え、慘憺たる風雨を衝き、非常の忍耐を以てしたる結果なり。凡そ學生の前途の實を得んには、或は、切齒扼腕慨然たることもあらん。或は、前途百折千挫踵を接して來り、失望落膽の悲境に沈むことあらん。或は前途萬里、而して其の道、又甚險難にして行くべからざることもあらん。而して遂に之を

凌ぎ、之を成さば、果して富を得、榮譽を致し、以て赫々たる芳名を輝かすべし。それ我か大日本帝國國民は、今や、東洋の此の孤島に屏居安眠すべき時にあらず。當に優勝劣敗の現世界に對し、強食弱肉の時に處すべき際なり。雄腸窄膽なる日本男兒が大手腕を奮ふべき時なり。嗚呼吾等同胞の友よ。確乎不拔の志氣を養ひて、勇往奮進せよ。然らば、前途の巍々たる山は、忽ちにして榮の山となり、茫々たる大海は、忽ちにして譽の洋となり、慘憺たる風雨は、忽ちにして褒稱の聲となり、一つとして、幸福ならざるものなきに至るべし。然れども、これを行ふこと甚難しとするもの世に其の人少なからず。されども古語に曰く「精神一到何事不成」と、人苟も迷霧の中に彷徨せず、時に世の風潮外に立ちてその自信する所を決行する心あらば、何の難き事かこれあらん。

## 特色

第三學年 田中 貢

旭に匂ふ山櫻の優美にして而も潔白なる、之れその花の特色なり。芙蓉の峯の泰然として雲をぬき戴く雪に朝日にかゞやきて壯麗なる、之れその峰の特色なり。今若し山櫻にして此の特色無からむか、いづこが雑花と擇ぶべき。而して「旭日に匂ふ山櫻花」を誦する人はあらざらむなり。若し芙蓉の峯にして此の特色無からむか、いづこが常山と擇ぶべき。而して「白扇倒懸東海天」を吟ずる人はあらざらむなり。げにや彼の特色こそ山櫻の生命にして、此の特色こそ芙蓉の生命なれ。

天孫の一度此土に降臨ましましてより皇統連綿として窮りなく、臣民は忠勇義烈の美を濟せる、之れ我が國



の特色なり。之れ我が國の健全なる生命なり。當今我が國が世界の強國として先づ指を屈せらるゝは此の特色の賜ならずや。英國は海事思想の發達せるによりてよく其の強盛を致し、米國は實業の進歩につれてよく其の富強を致し、露國亦國土の廣大なると陸軍の完備とによりて強國に列したり。一夜案上燈火のもとに東西の史を繙かむか、いづれの時代いづれの國に於ても其の特色因となり果となりて、盛衰興亡の幕を展開したるにあらずや。羅馬は羅馬の特色によりて、希臘は希臘の特色によりて榮えたるなり。大聖の生れし印度は其特色を失ひて英國に占領せられ、ビラミットいかめしき埃及は其の特色を失ひて土耳其、英國に蹂躪せられたるなり。翻つて之れを我が史上に見よ。平氏は如何にして倒れしか。源氏は如何にして滅びしか。北條氏は如何に。足利氏は如何に。之れ皆武士にして、武士の特色を忘れたるに由らずんばあるべからず。嗚呼重く貴ぶべきは特色なる哉。此の偉大なる特色は、何れの國何れの人も之れを有せざるはなし。されど玉も磨かざれば光無く特色も亦琢磨せざれば其の光澤を發輝せず。花に開落ありと雖も芙蓉の峯は常に其特色を失はず。吾人は吾人の特色を、此の花の如く此の山の如く永久に持續し、猶進んで之れが發達を計り、以て我が帝國の美を、萬古に發揚せざるべからざるなり。

## 堅固なる自信をもて

第三學年 戸 田 剛 三

大義の、君に盡し、國に盡し社會に盡し、人道の爲めに盡さざる可らざる事は、人皆之を知ると雖、一旦死地に臨みては、忽ち躊躇し、利害得喪の際に忽ち節を變ずるは、平生の所信堅からざるによるなり。苟も所

信だに堅ければ、萬死且つ辭せず、財産、生命、名譽、妻子に戀々たらず。白刃頭上に臨むも、泰山後に崩るゝも、毫も動かざる可し。

宗教は所信を堅むるに適す、心に深く神を信じ、佛を信すれば、勇往無前、一身をば神佛にさへげて悔いず。古來宗教上の所信に基づける戦争及び種々の事業の非常に猛烈にして、奇功を奏せるも、亦怪むに足らず。宗教なき國民にても、宗教上の神佛に代ふべきものなきに非ず、單に道理の爲に動くといふ事は、聖人、賢人ならばいざ知らず、凡夫は更なり。英雄豪傑にも望み難し。元來人は情の爲めに動く者にて、智力よりいてたる道理は、人の所爲を左右するの力乏しきものなり。空しき道理は、所信の方針を示せど、之を鞏固にするには、道理以外、更に人間自然の情に基づきたるもの無かる可らず。先哲の所爲即ち其一なり。宜なるかな、古の賢者は、宗教上の神佛に代ふるに志士仁人を以てせり、抑も人は其棲的動物たり。世に孤獨なる事程、人に在て、苦しさものはなし、旅は路づれとて、苦しさ中にも同僚の慰藉あり、馳走も親しき友と共にしてこそ味よけれ、同情を表して呉るる人あれば、艱難もさまでつらからず、されど女は己れを愛する者の爲めに粧ひ、士は己れを知るものゝ爲めに死すと云へり。

萬事、伴侶若しくは知己を求むるは、人間自然の至情なり。而して、これ順境に在ては、希望を與へ、逆境に在ては、憂を分つものなり。人は之れが爲めに勇み、また慰藉せらる。況んや其非凡にして聲譽大なるものをや。此伴侶知己は、生きたる人にも求めたけれど、容易に得がたし、即ち人の所信に力あるものは古の偉人なり。古の偉人は、實に崇拜者の眼中には神佛なり。

宗教以外所信を堅むるに、知己を古人に求むる事は尤も人情に適合したるものなり。吾人はこの點よりし



て、少年の讀物には傳記が最も適當なりと斷言す、諺子願くは、宗教上の神佛を古人の傳記に求めよ。而して所信を堅くせよ、大節に臨んで動く事勿れ、氣骨ある男子となれ。

## 形式の偏重

上原勝之進

〔一〕

薄いもの、譬喩に引かれる紙すらも表と裏とはきつとある、世にあらゆる物といふ物、事といふ事皆表裏を有しないものは無い。疑はしいなら諸君日常接近し實驗せられる事と物に就いて考へて見給へ。諸君が坐してゐる疊、凭れて居る机、披見する書物、頭に戴く帽子、悉く表裏の二面を有して居る。否々それに止らない、角力にも裏表四十八手があり、柔道にも裏の手がある。

文にも亦表と裏とが有らねばならぬ。文の表面は之が外形たるべき文章で、裏面とは之が内容たるべき想である。文の種類からいへば漢詩あり和歌あり俳句あり新體詩あり戯曲あり小説あり、借用證文もあり願届の公用文もある。併しながら要は想と文章との二者から成立つて居るに相違ない。たとへば皺多き老人が鏡に對すれば、鏡面に映出せられるものは老人の姿であるし、血氣旺盛な少年が鏡に對すれば、少年のいき／＼した状態が現れるやうに、形と影とはどうしても離れ得ない。文に於いても其通り、内容の美なるものは形式上にも美となり、醜なるものはやがて醜となる。故に文の内容は想即思想感情であるし、外形は即文章である。

つまり此は一物を両面から觀たる名稱で、個々別々に存在したるものでは決してない。

〔二〕

けれども、頭髮を分けてよく撫てつけ、仙臺平に羽二重の五紋でも羽織つて居る人は、人格の低い者でも一見紳士として待遇せられる。又人格の高い人でも身に襤褸を纏うて、髯が蓬の様では容易に尊敬せられない。文も亦かくの如く、いかに内容の想がよくとも、形式が拙くては文としての價値が怪しくなる。想は取るに足らずとも、形式たる文章がよければ幾分か取り所が出来てくる。それ故文を解せんとする者、之を綴らんとする人は、此両面に涉りて深く觀察を下さねばならぬ。

此處に一の注意すべきことは、人格高い人の惡裝と、さらぬ者の美裝との比較である。固より人格高い人に美裝させれば此上も無い事だが、上例の如く、何か一方の缺けてゐる場合には、どちらを取るか、人格低い人でも美裝して居れば幾らか美化せられるけれども、それは幾らか美化せらるるといふ迄のことで、本來の人格が服裝の爲に高くなるといふ譯ではない。況や時としては噴飯に價するではないか。人格高い人の惡裝は、一見怪しく思はれても之を審察し之と交際するに従つて、本來の高い慕はしい人格が現れて來て、いかなる襤褸も之を汚す事が出来ない、かつ此人に地位と物質とを得しめたら嘸かしとさへ同情せられるのである。文に於ても亦同様の感が起りはせぬか。形式拙くても想のよいのと、想拙くて形式のよいのと有れば、吾人は言はずとも前者を取りたい。

〔三〕

かの萬葉集と新古今集とを比較したらどうか、萬葉集なる歌の形式即文章は、新古今のそれほど巧妙でな



い。けれども想に於いて勝つて居る。柿本山邊兩歌仙の詩風、大伴氏の憤懣と活動と、將、山上憶良が儒教、佛敎より得たる思想に人情を吐露したる、此等のものを新古今時代の平々凡々たる大宮人の詩材に比すれば、さるて同日の論ではない。平安朝後半の大宮人は、年が年中京都といふ小區域に齷齪して居て、他の山紫水明の自然を知らぬ。地方の騷動を恐るゝのみで廟堂の畫策が出来ぬ。支那との交通も延喜以來絶え果て、攝津や近江へ行けば世界一週でもしたかの様に仰山らしく思つて居た、そして四季折々の詩歌管絃の遊宴に艶麗を競つて居た。それ故彼等の思想は大に單純で平凡で缺乏して居たのである。思想の缺乏したる彼等が勢力は、外形たる詞章に傾注されてしまつた。そこで新古今の様な艶麗な産物が出たのである。新古今から艶麗な詞章を引去れば價值が怪しいものになる。恰も人格低い人から美裝を引剝いだ様なものだ。萬葉集は美裝しないけれども猶人格高い慕しい人物に相違ない。此は即内容のよいからである。

## 〔四〕

徳川三百年間に歌よみといふ歌よみの數多きが中に、桂園香川景樹翁が最傑出して居たといふのは、滔々たる世間並に古人の糟粕を嘗めて居たのでなく、清新の思想を吐いたからである。かの新古今集の如く形式を偏重した爲ては無い。源氏物語や枕草子や近松や此等は形式美の勢力が大に讀者を感動せしむるにも係らず、取るべきところは主として内容にある。想ふに沙翁もシルレルもゲーテも、現代のメートルリンクも亦其内容によりて成功したのであらう。

思想の豊富な人は形式に拘泥せずとも悪文を作出すことは餘りない、形式をむやみに偏重する人は想に見るべきものが少い。或人の談によればジッケンス及サッカレ等が文學上の作品に使用した言語の數は三千餘で、ミルトンは七千餘、沙翁は二萬餘である、語數の多寡は文學上價值の高下を判定し得られると蓋し此は有理の言である、併しながら思へ語數の多いばかりが高等なものとするれば數多の辭書は如何ほどの高價值を有するだらう。唯單に語數を多く陳列するのみが文の能てはない。此は内容の想が豊富にあるにつれて自然に多くの語を要したのである。想だに立派にあれば形式は之に隨つて無意識にでも出来る。想が拙くて形式のみに力を用ゐたのは、二の舞の醜面に白粉をゴテ／＼塗つた様なものだ。

現代の作家について見ても知れる、夏目漱石氏の二百十日は僅々二日間の執筆といふではないか、無論名文ではあるまいけれども思想だに有ればあの位に出来る、故尾崎紅葉氏は金色夜叉の續稿が出来ない爲大に苦心せられたとか、あれ程の達筆家でも思想の方には頗る閉口されたのである、幸田露伴氏は餘り詞章に拘泥しない人と聞くが、其内容に至りては慎重の態度で、五重の塔を書くにも、大工小屋について數日間は其道の研究をせられたといふてはないか、それほど内容に力を用ゐられればこそ愈價值も増すのである。

## 〔五〕

現在和歌壇の新派が成功したのも、一方には用語の上にあるが、他の一方には泰西の文學を輸入すると共に清新の想を詠み出すからである。近來多く新聞雜誌に現はるゝものは、所謂新派の眞似らしい。或人が最初に詠んだ時には奇抜とも清新とも謂はれようが、それを眞似したのは既に他人の糟粕だ、糟粕を嘗めて居るのだ。景樹翁その人は江戸三百年を通じて第一流の歌人で新派を立てたが、其門下は既に舊派と稱せられる。是に由りて之を觀れば、明治の新派和歌も、萩の舎、竹柏園を崇拜して居る間に、いつしか新しい舊派が出来はせぬか、餘りに星とか菫とか愛とか運命とか云つて居ると、ハイカラ式舊派が出来ようも知れぬ。



これまで記述が和歌に偏したが、吾人が論ずる所は韻文のみに就いてゐない。散文に於いても亦同様の言を下さねばならぬ。つまり形式のみ偏重して居れば文の退化を來すから、内容に大に注意する必要がある。而も潔白なる高遠なる思索に待たねばならぬ。千有餘年前の弘法大師に聽け。

夫作文章、但多立意、令左穿右穴、苦心竭智、必須忘身云々

凡屬文之人、常須作意、凝心天海之外、用思元氣之前、巧運言詞、精練意魄、所作詞句、莫用古語云々

(三鏡秘府論、藤岡博士所引)

と説いて居る。内容を重んぜよとは獨吾人が言ふのみではあるまい。

さればとて、外形の美を放棄せよとは決していはぬ。勿論内外の美を備へて始めて完全な文が出来るのだから、之を偏廢する事は出来ない。唯形式を偏重することの甚だしき弊害であるが故に、吾人の目下注意すべきは内容なりと思推するのである。諸君、幸に熟考の勞を惜み給ふな。

▲少年高きを仰がざれば必ず卑きに俯す、而して精神意氣の天に冲飛せざるものは必ず地に匍匐すべし。……………デスレリイ……………  
▲文を作り詩を賦する何ぞ妨げむ、唯一時の客氣に乗じて風流めかすは斷じて弊也。……………高山樗牛……………



ほととぎす

昔思ふ、草の庵の、夜の雨に、

涙な添へそ、山ほととぎす

俊成

行きやらで、山路暮しつ、時鳥

今一聲の、聞かまほしさに。

公忠

今や、卯の花も咲き初め、花橘も香り出でて、ほととぎすの、去年の古聲を忍び、深山出の初音を漏らす時は来りぬ。されば、其の一聲の聞かまほしさに、終夜、枕を敲つる詩人も多からむ。又、こを聞きて、孤窓に、獨、感慨に沈む詞客も少からざるべし。此の時、此の折、三十一文字に思を寄せて、此の鳥の上詠み出でむことは、いとも、興味多かることならむかし。

抑、ほととぎすを詩歌に詠むことは、元來、支那の習慣にて、我が國は、専ら、其の流を酌みしもの如し。されば、漢學傳來前には、此の鳥に關する歌なかりしなり。然るに、漢學一度入り来りしよりは、和歌に、連歌に、發句に其題目となり、鳥類中、否、生物中、最も多く、詠歌の好材料とせらるる光榮を蒙るに至りぬ。さても、幸福なる鳥よ。

二  
ほととぎすの啼聲に就きては、十王經に、「別都頓宜壽」と見えたり。されば、彼が名は、啼聲に因みて、名づけられたるものなることを知るべし。歌に、「おのが名を名のる」と詠めるもの多きも、此の義なりと云ふ。夜色、沈々、四隣、寂寥たるの時、そが、一聲高く叫んで、雲際に入るを聞かば、悽愴の氣、忽然として、人を襲ひ、こゝに、一種の詩情、勃然として湧起し、うたた、感慨に堪へざるものあらむ。宜なり、詩人の愛賞措く能はざることや。あはれ、此の鳥、古來、幾多の詩人の吟腸をして、如何に惱しめしぞ。  
五月こば、啼さもふりなむ、時鳥、



まだしきほどの、聲を聞かばや。 讀人不知  
待ちわぶる。 心にまげよ、時鳥、

忍ぶならいの、初音なりとも。 經 繼  
共に、これ、ほととぎすを待つ情の切なるもの。

ほととぎす、啼かて明けぬと、告げ顔に、  
待たれぬ鳥の、音こそ聞ゆれ。 西 行

山ふかく、尋ねて聞けば、時鳥、  
過ぎつる方の、空に啼くなり。 良 兼

其の聲を聞かむが爲に、終夜、輾轉反側して、曉に  
達し、或は、知らぬ山路を分け暮すなど、人は狂と  
いはばいへ、詩人は、こを、却つて、無上の娛樂と  
なししなり。

啼きぬとて、あなかま人の、騒く間に、  
聞きまよはせる。 ほととぎす哉 寂 西

山かつと、人はいへども、時鳥、  
まづ初聲は、我れのみぞ聞く。 是 則

其の題詠と否とを問ふこと勿れ。 ほととぎすを聞き  
たるよきの、喜悅と得意とは、實に、此の如くなり  
しなり。

身のうさは、とふべき人も、とはぬ世に、

數歳。望帝以其功高。禪位於鼈靈。號曰開明氏。

望帝修道。處西山而隱。化爲杜鵑鳥。或云。化爲

杜宇鳥。(杜宇は望帝の名なり)

寰宇記に曰く、

望帝讓位鼈靈。自逃之後。欲復位不得。死化爲  
鵑。每春月間。晝夜悲鳴。蜀人聞之曰。我帝魂  
也。

事實頗る小説的にして、怪甚し。しかも。ほととぎ  
すの始祖は、此の如くにして、出て來りしものとせ  
り。其の異名を、蜀魂といひ、蜀魄といひ、はた、  
杜宇、望帝ともいふ、由來する所、實に、こゝにあ  
るを知るべし。

説文に曰く、

蜀王望帝化爲子鵑。今謂之子規是也。至今寄巢生  
子。百鳥爲哺其雛。尚如君臣。

これ、我が萬葉集に、「鶯之生卵乃中爾雀公鳥」とい  
ひ、續古今集に、「鶯の古巢の竹のほととぎす」とい  
へると一般、ほととぎすの、自ら巢を營むこと能は  
ざるをいひたるものなれども、之を、望帝の故事に  
附會するに至つては、笑ふべき極ならずや。又、本

哀れに來啼く、ほととぎすかな。 俊 成  
訪ふ人も、なき故郷の、たそがれに、

我れのみ名のる、ほととぎすかな。 堀 川  
ほととぎすが、詩人を泣かしむるか。 詩人が、ほと  
とぎすに泣くか。一讀人をして、悽愴の思ひあらし  
む。

抑、ほととぎすを詠みし歌、古來、千百を以て數へ  
らる。右は、唯、其の一例、誠に、九牛の一毛に過  
ぎずといへども、以て、古來、幾多の詩人が、ほと  
とぎすに對する情の一斑を知ることを得むか。

三

ほととぎすを愛づることは、前にもいへりしが如  
く、支那が、其の本原なれば、彼の國に於ては、之  
に關する説話少からず。いでや、進みて、其の思想  
の一端を見むか。

李膺蜀志に曰く、

望帝稱王於蜀時。荊州有一人。化從井中出。名曰  
鼈靈。於楚身死。屍反訴流上。至波山之陽。忽復  
生。乃見望帝。立以爲相。其後巫山龍鬪。壅江不  
流。蜀民墊溺。鼈靈乃鑿巫山。開三峽。(中略)後

夢には、

其聲哀切。其鳴如曰不知歸去。

とあり。漢名不知歸が、其の啼聲より來りしこと、  
ほととぎすの名の由來と、同じ趣を有するも面白  
し。又、異苑には、左の如き記事あり。

杜鵑如陽相催而鳴。先鳴者吐血死。常有入。山行  
見一群。聊學其聲。便嘔血死。初鳴先聽其聲者。  
主離別。廁上聽其聲不祥。厭之法。當爲犬聲以應  
之。

これを、ほととぎすに關する迷信とす。其の厭之  
法。當爲犬聲以應之。といへるが如きは、實に、滑  
稽、人をして捧腹に堪へざらしむ。

四

次に、異名及び名所を掲げて、本篇の終結とせむ。  
異名の主なるものは、

してのたをさ。時つ鳥。時の鳥。くさら。早苗鳥  
賤鳥。いもせ鳥。田植鳥。冥途の鳥。童子鳥。あ  
み鳥。三月過鳥。こひし鳥。橘鳥。卯月鳥。沓手  
鳥。(以上和名)  
杜鵑。子規。杜宇。子鵑。鶯周。催歸。思歸。梯



歸。陽雀。鸚鵡。謝豹。蜀魂。蜀魄。望帝。不如歸。怨鳥。鷓鴣。鷓鴣。鷓鴣。(以上漢名)

游言錄

岩 田 萩 崖

名所の主なるものは、  
伏見。深草。神山。音羽山。暗部山。桂。稻荷山。常磐山。(以上山城)那良志岡。今城岡。佐保山。三輪。磐瀬杜。春日野。初瀬山。片岡杜。(以上大和)志の田の杜。(和泉)須磨。難波瀉。(以上攝津)二見浦。(伊勢)逢阪。老曾杜。(以上近江)由良渡。(紀伊)繪島。(淡路)志のぶ里。あさる里。松がうら島。まがきが島。(以上陸奥)朝倉。(筑前)

初瀬山、みのりの文に、聲添へて。

夜たゞ唱ふる、ほととぎすかな。 千 蔭

栗田山、松の葉うづむ。しら雲の、 景 樹

はれぬ朝けに、啼くほととぎす。 景 樹

花橋の香る窓の下にて、杜

鶉の聲を待ちわびつゝ、

金子江南識す。

ざるべからず。

▲卑怯陰險意地汚きは人間なる哉。殊に女性を然りとす。婦人路に相遭ふや謙遜羞耻眼を垂る。しかも相過ぐるや互に振り反りて横柄に且細かにその後姿を研究す、何の意ぞや、男性亦これを去ると遠からず、兎角は此の如し、表裏をよく作らざれば人間らしき人間とはいはれず、又成功に覺束なし、穢はしき世なる哉。

▲太陽は宇宙無数の必滅的天體の一にして、地球は之を運ぐる無数の必滅的遊星の一なり、と觀じ來れば人生晏如たり。

▲以太利の心理學者バオロ、モンテガツザ曰く、恐怖宗教利益空間時間によく愛人を割き得るも、互に交はせし接吻は永く兩者を繋ぐと、即ち接吻は泰西に於て愛の最上示現なり。悲しい哉我國人はこれを知らず。一友曰く、外人の接吻を目にする毎に嘔吐を催すと、間違もなく吾人野蠻人は泰西文明の真相を辨へざるも、幸に肺病傳染法より自由なるを賀せざるべからず。

▲近來諸所に石碑銅像紀念的建設物の盛んに設けら

▲游言錄、號を逐うて掲載することゝに三號、相變らず幽玄ならざる駄言を擅にし、貴重なる誌面を汚すを恐縮す。然れども校友諸士よ、傾天動地の英雄、婉麗比なき美人に於てすら、尙その躰内には目を閉ぢ鼻を撮むの汚物を藏するを知り給はん。果してこれが不拔の眞理とすれば、此結構なる有機躰中にて、此游言錄の如き唾棄すべきものゝ混じ居るとを許容せられざるべからず。部長が萩崖の原稿を捨て給はざるは恐らく如説の理なるべしと信ず、會友諸士の宏襟を仰ぐものなり。

▲繪葉書は文筆の拙劣を隠し蔽はんがために、使用の流行を來せる文章界卑屈の惡魔なり。贅澤虚飾は無能の結果なるとを悟るべし。

▲人間は兎角抽象よりも具躰を欲す。即ち人間の最も罪なき睡眠中満腹なれば御馳走を夢み、苦臥すれば惡鬼を生ず、故に天爵よりも人爵有り難く、名譽徳操よりも金錢衣食を憧憬する所以なり。大に教へ

るは、國民が西洋文化に中毒して、健忘症にかゝりしための現象なり。あらず哉。

▲來て見れば聞くより低き富士の山 釋迦も孔子もかくやあるらん 聞きしより思ひしよりも見しよりも 上れば高き峰は富士の根

これだから世の中の事はなか／＼苦しい。ニイチエ故に曰く、萬有眞ならず皆假容なり、と而して、樗牛先生は曰く、理窟は羽織の紐なり、と皆わが意を得たるものなり。

▲有名な猫は曰く、金を作るには三角術が必用、義理をかく、人情をかく、耻をかく、是ぞ三角にならざるべからず。成程金を作るに此三角術が必要缺くべからざるものとすれば此貧は止むを得ないとしてある、と吾輩今更臍を堅めた。

▲又曰く、世の中では萬事積極的のものが人から眞似らるゝの權利を有して居る、語を換へていへば、ずう／＼しきものが勝を制するとなると、はてさて情ない社會なるかな。

▲己の欲する處を人に施せといふ方が西洋風で進歩



したる道德律だといふが、用心しないと此奴は險難だ。そこは古國丈あつて實地派の孔夫子は偉い、己の欲せざる處を人に施すなかれと教ゆ。此方が遂に安全だ。此頃の様には悲觀的哲學者や富豪の死を欲して自殺者の多い世の中には前黄金律は他殺を獎勵するに外ならぬ、所謂高襟的道德律は注意しないと飛んだ危害を産み出すものである。

▲臨時氣違をインスピレイションと文藝家は偉らがり、永久氣違を天才と學者は珍重がる、夢喰ふ虫も好きく、人の嫌がわしがすぎ、文明の世は色様々。

▲或評家は曰く、吾人が一色を認むる處にチチアンは五十色を認むと、是だから議論をするにも、互の根本蘊善が等しきか否かを調べて見た上でなければ、その黑白が判らう筈がない。此を知らずして泡を飛ばすは間拔の骨頂、閑人の洒落にとゞまる。

▲帝國の玄關番安房白濱漁民は、頓痴氣なる船長のために難破したるダコタ汽船乗客の救助に努む。彼等元より犢鼻褌一貫の裸躰なり、乗客等こゝに周章愈一倍、泥棒御參なれと蹴り打ち甚だしきは拳銃を差向けたりと、嘗て聞く米州より來訪する洋人等帝

する此社會にては傲慢無情貪慾下品意地惡等の結晶物も必要缺くべからざるものなりと、有難い仕合なり。

▲美人は行儀作法の優雅にして茲に賞揚を價す。美貌は言語動作の上品懇篤なるを待て始て完し。文書亦然り、其價値はその事實叙述の巧妙なるに止まらず、其著者の品性を視ざるべからず、然れども不注意なる讀者は丁度美貌のみに眩惑せらるゝ多くの青年の如く、單に詞藻叙述に逐はれて著者の品格を認め得ず、是れ蟬の拔殻をうれしがる小供の様な小僧共なり、骨抜鱗とは律を異にするに注意すべし。

▲哺乳類中最も完全に發達したるものは高等哺乳類なり。人間其首位を占むるは明かなり。此等地上に生じたるは、地球發達の第三期に原始衣膜動物より進化したるものにして、少くとも三百萬年の昔に在り。人の一生より觀て測り知られざる程の年月を経ながら、僅五十年を醒寤せざるべからざる程の發達に止まるとは心細き程無進化なり。

▲第十九世紀の初め詩聖シルレル、哲學者と科學者とを戒めて曰く、「汝等相争へり和合は尙早きか、相

國の門戸に近着き、此等裸躰の漁民を見て、折角尊敬し來れる日本觀も興醒め果つとか、余は其矛盾せる馬鹿さ加減に愕くなり。裸躰何故に野蠻なるか、古希臘羅馬現佛邦の藝術は未開の作品と貶すべきか、余は包める飾れる榮める所謂文明よりも、白百合の芳素なる誠を執るものなり。白濱漁民よ、帝國の玄關番よ、飽迄裸躰なれ。ポーナツシの英國バス溫泉場に布いたる嚴重なる規則は、反て人心の野蠻を示すものなり。こんな曲れる御躰裁は入らぬものにこそ。

▲教育者は常に正直なれ誠實なれ善良なれと説く。然れども社會は奸惡にして、斯様なものは正に失敗倒産の悲境に喘ぐの止むを得ざるに到る。天真小兒の如きもの果して現社會に榮え得るか。此に於てか教育者は融通がきかぬ、實世間に疎しと罵らる。教育精神の變更せられぬ限りは教育者は頭の擧る氣遣なし。

おさなごが次第／＼に智恵づきて  
佛に遠くなるぞかなしき  
と禪僧は慨嘆し、ラスキンは曰く、需用供給が支配

分れて之を求む、果して眞理の得らるべきか」と遂に兩者の態度は約半世紀を経て、初て一元論的歸趣を認め、哲學者にして大詩人なるゲーテが「物質は精神なしには存在し得ず又働さ得ず、精神とても物質なくば亦同じ」と斷案を下し、今や、神的世界本質は物質と精神エテルギーとの二根本屬性を有するとを争はざるに至る。歸趣初て明かなりといふべし。

▲朝鮮正月歌（大川靜波氏譯）

時間よ餘りに情なうて  
過ぎにし春に又逢へば  
天は歲月を増し人は壽を増す  
春は乾坤に滿ち福は家に滿つ  
童女よ酒を彌酌みて  
又新しき友を迎へむ

一見欣抃場裡恰好の歌なるが如しと雖も、其根本情致は如何にもうら淋しく悲觀的である。無理遣り酒にかこつけて想を遣るの感がある、思はず起句に悲想を歌ひ、驚いては漸次幹開につとめ、第四句に到り辛うじて其目的を達し、茲に漸く酒を叫び得る餘裕をえ、陶然酔うて微かに一新希望に到達せるもの



ゝ如し。寂靜憐れ堪へがたし。

▲佛教は正宗、基督教は柴刀、といふべし。一は高尚鋭利なるも藏に納められて用をなさず。一は其鋭利前者に及ばざるも遂に有用の利器たり、と説けるものあり。如何。

▲向軍治氏は奇矯の演説をしたりとて教育當局者より制裁を受け、木下尙江氏は火の柱、良人の自白杯にて前人未言のとを物し、戸川秋骨氏は無武士道を唱へたり。世道人心のうちにかゝる推移を見る。教育者たるものよろしく注意すべきなり。

### 旅行中の所感

井 上 楓 岳

今年春季休業中、筑後國大牟田町なる三井三池礦業事務所在勤の友人より、「同町附近四ツ山に、三井家の經營にかゝる築渠の大事あり。見學のために來遊せよ」と促し來りしかば、急に思ひ立ちて、數日間の旅行を企つることゝなりぬ。

九州地方は、恰も、櫻桃李の花満開にて、氣温は、冷熱その度を得、旅行には最好時節なり。舊學年は

詣など稱するものゝ狂せるが如く、南無妙法蓮華經を唱へつゝあり。往時、この寺には、數百の癩病患者、路傍に群居し、參詣人に對して喜捨を乞ひ、大に不快の感念を興へしめたりといふ。近來、當局府は、これを嚴禁し、彼等を一堂宇の中に集合せしめ、一切外出せしめざることをなしたりとて、僅に、數人の醜狀を認めたるのみ。それより、細川侯の別業なる水前寺に行く、午後三時には、大牟田町に歸ることを約せしを以て、熊本市街の狀況は、車上より、概況を見たるのみ。

大牟田町に歸り、先づ、萬田炭礦を見る、この炭礦は、大牟田町を距る、約半里に在りて、三池炭礦の一なり。三池炭礦とは、筑後國三池郡に在る炭層の總稱にして、その層厚く、廣袤四里四方に亘り、其の着手は、數百年の昔なりしかど、採掘したる部分は、今尙、その十分の一にも及ばずといふ。萬田炭礦は、九百尺の地下に炭脈ありて、晝夜を別たず採掘せり。工事は、頗る、大規模にして、實に驚くに堪へたり。

それより、今回旅行の目的たる四ツ山築渠の大王

去りぬ。新學年始まらば、又もや、新進の學生を迎へて、及ぶ限りの力を奮ひ、學業の増進を計らむとする希望も浮びて。精神は何となく自由と壯快との天地に在るやうなれば、旅行中に見るにつけ聞くにつけて、愉快を覺ゆること多かりき。されどこの旅行記は、獨り、その愉快を叙せむがためにあらず。請ふ諸君、余の不文を咎めず、一顧して、吾が、これを起草せし動機のある所を了せられむことを。四月三日午前四時、萩を發し、同日午後〇時二十分、小郡發の下り瀧車に乗る。この瀧車は、九州線の長崎行にも八代行にも連絡するものにして、大牟田町に着きしは午後八時なりき。この夜は、こゝに宿りぬ。

翌朝八時、大牟田町發の下り瀧車にて、熊本市に向ふ。道程二時間、そもそも、熊本市には、上熊本と熊本との兩停車場ありて、門司方面より向ふ時は、上熊本停車場に下るを便なりとす。この停車場を距る數丁の處に、加藤清正公を祀れる本妙寺あり。多數の信仰者は、公の墓前に跪座し、或は跣足にして立ち、或は數丁の間を往復しつゝ、(百度詣、千度

事を見る、四ツ山は、大牟田町を距ること約一里に在り。この工事は、三井家の經營にして、私民の事業としては、我國未曾有なるのみならず、東洋に於ける大工事なりといへば、外國人のこれを見るもの、日本の實業工藝の大進歩に驚嘆せざるはなしとぞ。特に注目すべきは、工事進捗中、屢々、法律上の新問題起り、政府と交渉を要することにて、一例を擧ぐれば、燈臺は、政府の建設するところにして、一私人の建設を許可せざる規定なれども、築渠の結果、必ず燈臺を設置せざるべからず。その設置を許可することゝせば、法律の改正を要することゝなるが如き、以て、その工事の大規模なることを察すべし。從來三池産出の石炭は、一たび、大牟田町附近の海岸に集め、更に口ノ津に運送し、此處にて、外國船に賣込みしも、口ノ津に到る海路約三十六哩、石炭の運搬上、多大の勞力と費用とを要するのみか、石炭は、運搬のために損耗するところ尠からず。今回の工事は、その石炭を積込むべき船艦を、四ツ山港に入れ、築堤に横付せしめむがために、來春落成の豫定を以て。大堤防、大築渠を設くる工事なり。



然るに、この邊、海潮満干の差、十七八尺の甚しきに及び、加之、沿岸より約一里の間は、極めて淺くなれば、その間を浚鑿し、陸地を穿ちて、大船の入るべき深さとし、以て、海水と相通ぜしめ、その通ずるところに門扉を設け、満潮の時、これを開きて船を入れ、入船後これを閉鎖し、石炭積入の上、再び、満潮を待ち、これを開きて、出船せしめむとする目的なり。さて築渠の大事の外、一方には、石炭の採掘より、積込むまでを、總べて、器械の働作となし、地上地下、數條の電氣鐵道を通じ、特に、船艦に石炭を移積する機械は、三井式石炭積込機械といふ、外國にも比類なき、新發明の利器なりとぞ。これ等の順序、工事の模様等は、到底、筆舌を以て解説する能はず、要するに、この一炭礦とこの一工事を見るのみにて、知識啓發上、至大なる影響あるべきことを信ず、故に、余は、熱誠を以て、同地方の旅行を諸君に勧誘す。且三井三池礦業事務所には、本校卒業生、木津谷泰夫氏、同加藤保一氏、在勤なれば、諸君が、他日、旅行せらるゝことあらば、多大なる便益を得らるゝならむ。余が今回、木

津谷、加藤兩君の斡旋のために、その地方の状況を詳知することの便益を得たるは、茲に、兩氏に向て、大に感謝するところなり。この夜、大牟田町に宿す。

五日午前九時、大牟田町を發し、歸途に就く、午後一時、二日市停車場にて下車し、太宰府神社に參詣す。太宰府神社は、官幣中社にして、筑前國太宰府町にあり。贈太政大臣菅原道真公を祀るところ。公は讒に遭ひて、筑紫に流され、病に罹りて、此地に薨じ給ひしかば、太宰府の近傍に、御墓所を營み、尊骸を斂め奉らんとしけるに、御車、忽ち、途中に駐りて動かざりしに因りて、その處を御墓所と定む。

これ、この社の地なりと傳ふ。宮は、今を距る、一千三年前、延喜五年の創建にして、月を經、年を重ねて、終に、今日の如き輪奐の美をなし、禮賽の男女常に絶えず、特に、毎月二十五日には、參拜者、最も多しとぞ。

二日市停車場より太宰府神社まで道程、僅に三十三町、その間鐵道馬車の設あり。毎停車の時、數輛の馬車は、數多の旅客を載せて、太宰府神社に詣

る、その間、僅に、十分餘を費すのみ。故に、九州地方を旅行するものは、この驛に於て下車し、次の列車に乗るとすれば、その間にこの社參詣することを得べし。

社殿は、大ならざれども背には青山を負ひ、大水を見ざるも池水あり、群魚鯉魚、その中に遊ぶ、庭園には、梅櫻を始として、常磐木の類栽培せられ、自然の美と人工と相調和して、一樂園をなせり。或書に曰ふ、太宰府神社殿は金銀を鏤めず、丹碧を施さず、素樸にして高潔、所謂、神々しき趣を存し、自ら神威の高を表すと、されど、余は、悲哉一として、その神々しき趣あるを認むる能はず。却て認む、社殿の右側なる一棟の家に、白衣の神職數人、數多の御守護札、菅公の肖像、其他、種々の物を陳列せるを。その御守護札は、大小種々あり、その差によりて、價值に差あり。それ、社寺に於て、御守護札などを販賣的に發し、世の愚民を籠絡し、金錢を貪ることは、かつは、神威を瀆し、かつは、宗教の神聖を傷くるものなり。然れども、積年の因習、容易に、これを革むること能はざるは、大に、遺憾と

するところなり。余は、信ず、神助は、金錢の多寡によるものにあらざることを。特に、菅神の詠として傳ふるものにも、

心だに、誠の道に—かなひなば、  
祈らずとも、神や守らん。

とあるにあらずや。これ即、神の御心にて、大に、世の迷信家を警むるに足るものあり。余は、菅公は、御守護札の販賣を見て、大に、地下に泣き給ふならむと思ふと同時に、我國前途のために、宗教界のために、大に泣くものなり。

城内、社殿を去ること遠からざる處に、數多の飲食を業とする休憩處あり。賓客を誘ふ婦人、五月蠅き程に、參拜者の後に從ひ來る、大華表を出づれば、宿屋、飲食店、其他、太宰府神社に關係ある物品を販賣せる宏壯美麗なる大厦、櫛比すること數丁參拜者の進路を遮り、物品の販賣、又は、喫飯を強ひ、參拜者を瞞着して、暴利を貪る、また、大に、神社の神聖を汚損せるもの、如し。菅公は、眞摯誠實の人なり。彼は、これを見て、大に地下に泣くならむ。余も、亦、世上、動もすれば、輕躁浮薄にし



て、一時の利益にのみ眩せる、この種の實業家あることを思ふて、菅公のために、我國前途のために、特に實業界のために大に泣かむとす。

市街の一端に、鐵道馬車の駐まる處あり、その側に小學校あり。偶々、群童の戯るゝを見る。學校内部の整理如何を見たるにあらず、校舎の設備如何を、充分に視察したるにあらずして、猥りに、これを評するは、或は、酷に失する虞なきにあざされども、一見したるところ、これも言はずして已むこと能はざるものあり。今、茲に、これを言はんとす。その校舎の外観、狹隘醜陋一見その設備不完全なることを表白す、校舎完備せりと雖、良教師を得るにあらざれば、育英の良果を得ること能はざるは、論を待たざるも、校舎の設備完全せると否とは、兒童に對する教養上、至大なる良否の二大反對の結果を生ずべし。菅公は、文學の神なりといふ。彼は、彼のために、宏壯麗美なる社殿を建造せむよりも、寧ろ、設備充分なる小學校を建て、兒童の教養に盡すことを望むならむ。太宰府町民は、この神に負ふところ多大なり、彼等町民は、その地の繁榮の基因す

る所を知らん。彼等は、菅公の英靈を安んじ奉るは、彼のために、社殿を美麗にするにありとするか、優雅なる庭園を造るにありとするか。余は、これを、太宰府町民に問はんとす、福岡縣は、九州最富裕の縣なりと、その縣の富は、九州の他の諸縣の富と匹敵すと、來年度には、數中學校の増設さへあると聞く、嗚呼、盛なりといふべし。しかして、太宰府町は、福岡縣の一町なり、富裕なる町なり、この町民にして一小學校を改築する資力なきにあざるべし、然るに、今かくの如し。思ふに、眼前に、大なる利益を見んとするに汲々として、比較的成効遅々たる教育には冷淡なるにあざるか。余は、再び言ふ、菅公は文學の神なり、學者を愛し、教育に務め、若しくはそのために盡力するものを愛し給ふなるべし、國家のために、有用の材物を出すことを悦び給ふなるべし。決して、社殿のみ壯麗なるを喜びたまふにはあざるべし。これによりて考ふれば、福岡縣民、特に、太宰府町民が、一小學校造營を後にして、たゞ、彼社殿を壯大にすることは、豈、公の英靈の、大に、地下に泣く所に非ざらむや。余は、

是に於て、菅公のために、國家の前途を憂ふるために、遂に、教育界のために、大に泣かざるを得ざるなり。蓋、これに酷似せるもの、尠からず。故人の英靈を祀るを名とし、或は、偉大なる人物を表彰することなどを名とし、己れの卑劣なる慾望を満たさんとするものあり。これ等こそ、國家の大蠹なれ。諸君、他日、社會に出て、事を爲すに當りては、充分に、國家前途のために、必要なる行動をとり、世上の惡潮に化せられざらむことを望む。余が、この旅行を叙するは、正に、この感慨が、動機となりたるなり。この感慨によりて、諸君の將來につき、自己の希望を陳べむとするに在り。

不愉快なる感想を抱きて、再び、鐵道馬車に乗り、二口市驛に達し、汽車に乗る。行くこと遠からず、吉塚驛に下る。この地、元寇紀念の地、龜山天皇の御銅像あり、また日蓮上人のものあり、その前に敬意を表し、箱崎神社に賽し、箱崎驛より汽車に乗る。午後六時、門司着。直に、下ノ關に渡る。翌夕、下ノ關にて乗船、七日朝、萩に歸る。海上、頗る、平穩なり。

大牟田町行は、萩、下ノ關間は往復共に汽船によれば、最も、短時日にして、費用も要すること、亦、尠かるべし。門司と大牟田町、又は、熊本市との間は、二晝夜にして、その概況を知ることを得べし。費用は、門司大牟田間の汽車賃、往復にて、二圓を出づること多からず、然れば、約十圓を費せば、この大旅行をなし、多大なる知識を得ることあるべきを信ず。

### 一種の史傳を紹介す

安 藤 紀 一

かしこの圖書館、ここの讀書室に、學生の、青鞨黄卷に對するもの、其數、日に幾百人。借問す、そが讀む所は、何等の書ぞ、究むる所、何の學ぞ。その究むる所は、人々の志によりて種々あるべしといへども、苟も、人の人たる本務の基礎が、知方のみにて



濟まず、感情にて濟まず、必ず、意志の修養に在る以上は、心の嗜好は何事にありとも、その意志修養の模範たる前哲先輩の傳記を繙かざるべからず。然り。傳記は、誠に、學生進修の先例を示せるものにて、即、學生の指導物なり、獨り、學生の指導たるのみならず、學生の前に立てる教育者の指導物たるなり。故に、傳記の、教育界に於ける指導物たる時期は永久なり。傳記、豈忽にすべしや。余は。今、この冒頭を置きて、左に、我舊長藩に於ける哲人先輩の言行を觀るべき書の名を列記し、我萩中學校校友會員中、未だこれを知られざる諸君の參考に供す。諸君、それ、其各種の學科を修むる餘暇を以て、是等の書類を、必一讀せられよ、諸君の意志修養上につきて、是等の書より得らるる所は、決して、彼の普通歴史中の人物傳記を讀むの効益に劣らざるべし。

溫故私記

吉田物語

山田原欽傳

毛利忠正公略傳

甲子殉難士傳

懷舊紀事

防長史談

香川津孝子傳

るは、是ぞストラットフォード寺院にして、古今獨歩の大詩傑、沙翁か永眠せし昔の夜床は、この寺にあり。あよそ、英國に於て名士を葬るは、ウエストミンスター<sup>の</sup>墓地を常とす。然るに、今、此大詩傑の吟魂は、獨り浮世を離れて、靜にかゝる荒廢の地に休む。いかにゆかしからずや。寺の壁には、翁の半像高く掛けられたり。その愛情こぼるゝばかりの顔に、儼として濃く仰がれたる眉は、來り訪ふ人々の皆能く語り傳ふるところなりと。アヴオン河の水、アヴオン河の柳、あわれ汝は朝に夕に、翁の吟情に伴ひ去られしを記するや否や。悲歌とこしなへに聞えて、古人の面影、また、何れの處ぞや。墓地を距る遠からざるの地に、翁が呱呱の聲を擧げたる一室ありて、今なほ風雨と日光とに、曝されながら立てり。寺を出て、更に之を訪ふ人は、貴賤となく、老幼となく、皆その姓名を録し去るとか。既に千古の風光に接し、今また千古の遺物に遇ひ、誰か進んで千古詩傑の物語を聞かんと欲せざるものあらむ。

幽室文稿 留魂錄  
吉田松陰傳 木戸孝允傳  
松下村塾零話 維新前後名士叢談  
維新風雲錄 防長回天史  
見聞私記 防長學友會雜誌  
右は、思ひ出でたる儘を、不順序に記せるのみ。是等の書は、何處にても得らるべし。其他重要のもの、猶多しといへども、今は、是等の紹介にて止むべし。

### 沙翁傳

會友 岡 藤 汀 舟

十日あまり前、姪なる人の、沙翁シエロウはいかなる人かと問ひしも、われ詳らかに答へざりしが、これより、その傳記を、何につけ、かにつけ、あるはとひ、あるは讀み、今は、やゝ深くこれを深り得たれば、まとめて、茲にその傳をものしぬ。

ワーウキクシヤイなるアヴオン河の邊り、木高き森の鬱蒼として、天をおほへる處に、一の塔影の隱顯す翁は、千五百六十四年の四月を以て、ジョン、シエロウ、クスピヤと妻メリー、アーデンとの間に生れぬ。父は屠人にして毛を賣り、皮を鬻ぐを以て職業とせしかば、生活の度も低くはあらざりき。此にもし母なりし人の性質、所行を詳かにするを得たらむには、翁の傳を調ぶるにあたり、面白きことも多かるべきに憾むべし、これ少しも世に傳はらず。さてもアヴオン河畔の緑こぶかき中に、養成せられたる神童は、知らず知らずの間に、彼、天然の美妙と交はり、此の光輝ある理想を高めしならむ。學校よりは、此の光輝ある理想を高めしならむ。學校よりは、歸り來れば、流を横ぎりて蝶を追ひ、あるは山に獵して木の間の月を詠めし折もありけらし。正課の餘暇には親友ジョンソンに就きて、希臘羅甸の古語を學び、時としては、單身輕装して旅行を東西に試み以て、いよゝ天地の妙趣を味ふ事もしばゝなりき。

千五百七十五年、翁が住む里の近くなるケニルウチース城主レスタ<sup>ル</sup>王子は女王陛下を招待して十九日間饗應し奉りし事あり。其經營の宏壯にして典禮の溫雅なる、實に美を盡し善を盡したるものなりしか



ば、遠近の人民之を拜觀せんとて、來り集まるもの幾千萬なるかを知らず。之を機として利を獲んとする旅役者は、足を留めて、此處の市場に座を設け、一芝居打ちて田舎男女の大喝采を博したり。必ずやアッオン河邊の一夫婦は、十一歳の愛兒と共に、森の下道ふみつれて、同じく之を見に行きしならむ。然して未來の大詩人を感激せしめしこと幾何ぞ。げに量り知るべからず。

學校を去り龍動に來りしまでの經歷は、傳はらざれど、青年の習として、暴飲暴行せしこともありしならむ。一日、貴族の園林を犯し、鹿を逐ひ、兎を獵りて、酷なる譴責を受けしかば、翁は其處置の餘りなるを怒り、數行の詩を門に録して罵詈したり。此に於て主人ますく憤激し、其結果は、遂に翁をして、此地を脱走せざる可からざるに至らしめし事あり。是等の事情、その原因をなしたるか、又は妻子の糊口をつながむ爲めか、千五百八十七年を以て、一家、龍動に移り住む事とはなりぬ。妻は翁より長ずること、八歳の姉にて、翁が十八歳の時に娶りしとか。其龍動に來るや、世界を動かすべき翁が生涯は始ま

れり。風捲き雪亂る、冬の夜は、いつしか去りて、英國戯曲文學の春日の光はまさに花の木の間を輝きわたらんとす。翁が同郷の友にして、劇場中に高位を占めたるもの三人ありしかば、翁は爲めに周旋せられて、看客を迎ふる入口の番人となり、其の他種々の業に身を寄せて、囊中や、温かになりけるが、三年の後ブラックフライアース座及グローブ座に出勤するに至れり。是より幾もあらずして、名聲直に傳はり、グローブ座配當者の一人となりしかば、以前にかはれる富裕の身となり、現今の金高にて算すれば、千五百弗の收入を、年々受くるに至りぬ。かの有名なる『ハムレット』中の幽霊、『アズ、ユー、ライク、イット』中のアダム等は、作者(沙翁)みづから役者となりて、得意の藝を演ぜしものとかや。然れども、後人、その大文章を讀むに當り、この千古無二の大作者は、嘗て、舞臺に立つて幽霊を演じ、古風なる衣裳を裝うて、書がける山林の中に、行吟せしものなりとは、想ひ到るものあらず。然れども翁は、實に自ら筆し、自ら演じ、以て、華美なる社會に、浮世を面白く暮したる人なり。

殊に、女王陛下の寵遇を受け、時めく花の月郷雲客と交を結びしかば、榮華の春は身を浮めて、樂しみ長く翁の邊りを離れず。かゝる中にも、故山の幽境、忘れがたくやありけむ。年毎に、ストラットフォードに歸り來て、古老の情話を聞き、或は孤舟に棹し、江渚に遊ぶを以て、無上の快樂とせり。而して、更に地面家屋を此に購ひて、聊か老後の閑居にあてんとす。其望あるたのしみは如何なりしぞ。千六百十三年、齡四十九歳に及びて、遂に新築の家(此家はブラックフライアース座の近所)に退き、朝には前園の花を養ひ、夕には後庭の林檎に培ひつつかたはら、『ジュリヤス、シトザー』の大作に従事せり。あゝこの閑日月を、翁に得せしむること、いまだ五年ならざるに、これを奪ひ去りたるものは誰ぞ。翁は無常の嵐に吹きさらされ、アッオン河の水と共にまた歸らず。永久の閑居は、翁の靈魂を迎へて、また聲なし。時に千六百十六年四月廿三日のことなりき。翁が齡、なほ五十二を越へず。哀しいかな。

愛兒は父に先だち、寡婦は残りて七年後まで、生存せしは實説の如し。然れども世遷り、時變りて其子孫はいつしか絶えはて、又その靈を感むるものなきに至りぬ。翁が歿後七年をへて、光輝燦爛たる遺稿は、その友人なるコンデルと、ヘミングとの二人によりて、世に公にせられたり。實に、その構文の玄妙にして、落想の深遠なる、殊に複雑なる人間界の現象を寫すに至りては、悲喜戀愛の至情、躍々紙上にあらはれて、我眼の書に對しあるを忘れしむ。以て翁が創作力の天地間に秀絶せしと、其の作の非凡なることをしるべし。試に取つて、翁が遺稿を讀みてゆけ。忽ちにして鮮血淋漓たるあれば、忽ちにして啞然頤を解かしむるあり。白髮の老人、紅顔の少年、兵馬の嘶き、音樂の響、隠顯出歿變幻萬態、其人情を寫すに當りては、飾らず曲げずして、能く其至微に入り、唯、天真爛漫のまゝを書き出だせるに至つては、小説にも非ず。戯曲にも非ず。實にこれ人生の反射、人界の反響のみ。筆に靈ある、何ぞ怪しむに足らむ。



戯曲の外に、詩歌もまた多く残れり。「ヴェナス、  
エンド、アドニス」「ルクリース」及び「ゼ、バッシュョチ  
ートビルグリス」(情深き巡禮)「ゼ、ラヴァース、コ  
ンブレント」(戀人の怨)を始めとして、百數十余首  
の歌篇これなり。中にも「ヴェナス、エンド、アドニ  
ス」は、サウサムプトン公に献ぜむとて、發行せら  
れしが、是ぞ翁が名聲を博したる嚆矢なる。  
嗚呼翁は逝きけり。翁は逝きけり。知らず四百年の  
後に及んで、東洋の沙翁たるもの、果して出ずるや  
否や。

### 思ひ出せば

會友 飯 尾 強 介

過日萩中學校より一片の音信あり。是に於てか何等  
かの通信もがたと探り尋ねしも、固より空虚の頭腦  
何の得る所かあるべき、加之所謂局務多忙にして到  
底好材料を求むるの暇なく、且つ余の本職とする所  
は學友諸氏の已に御承知の電信電話のことなれば、  
此を題に一つ駄論を吐き呉れんと一度は禪を緊めし  
も、諸氏が「彼奴は學士連のうけうりをやるわい」

の如く、時に動作の意に合はざるあらんか怒氣鐵拳  
を固めて「貴様等はまた軍人性質がない、こう見え  
ても露助のにつける彈丸の下をくぐり玄海灘でケツ  
を洗つた兄さんだ」言未だ終らざるに、鐵拳雨の如  
く降りて其音ボカリ。

#### 二、ビール腹の射的、石龜

我等新兵にして若し此等所謂故兵の意に逆はんとす  
るか、或は行ひ難き命令について反問するか、或は  
然らざるも記憶力薄く動作女々しき所謂ボヤ助なる  
ものには、罰として三十年式歩兵銃に着劍し、これ  
に彈藥盒を懸けて立射のネーの姿勢を行はしむ、こ  
れを續行すること二十分以上ならんか、如何なる腕  
力自慢家も目を白黒にし腹をつき出し其の狀宛然  
ビール腹の射的、普通なるものは一時間の續行。  
ビール腹の射的にあらずんば、上に故兵自身が横は  
れる寢臺を、下より四つ這ひとなりて背と肩との力  
にて持上げ歩行せしむ、斯くの如きもの一時に二乃  
至三其狀石龜。

#### 三、メンコ洗ひ

食事當番に當りし我等四人、朝食後、食事殿所謂メ

と嘲笑せらるゝことの心苦しければ、次の題の下に  
先づは責任を免るゝこととなしぬ。

#### 一年志願兵の面影

思ひ出せば明治三十八年十二月一日四顧皆一面の銀  
世界、行き通ふ人の呼吸も白き午前の八時、坊主頭  
の余は廣島工兵第五大隊に入營し、直に和服より黄  
線星章の軍服姿と早變り、茲に妙なスタイルの工兵  
二等卒となりぬ。爾來メンコを積んで千〇九十五  
本、漸く明治三十九年十一月三十日浮世の風に逢ふ  
身となりしが、其間實に一歳長さが如くにして短  
く、短さが如くにして長き三百六十五日間の御話を  
すれば

#### 一、につける彈丸をくぐりし兄さん

日露戦争はポーツマウス條約によりて局を結び、出  
征部隊續々内地に凱旋する中、我野戰工兵第五大隊  
は三十九年正月頃無事歸隊しぬ。此等野戰隊中の兵  
士は皆夢現の間も絶へず敵を積へ銃砲聲を聞き勇氣  
猛烈のもののみなれば、我等新兵は多大の敬意と多  
大の服従とを拂ひしかば、彼等はます／＼意氣揚  
々我等を呼ぶに新兵を以てし、我等を使役する奴婢  
ンコを洗ふべく、菜臺を運びて後の河に至り、漸く  
寒氣と冷水と戦ひて此等を清潔になし、將に歸舎せ  
んとして、途に古兵の菜臺を運びて來るに逢へば必  
ずや強制的に交換せられ、我等再び多大の奮勵を以  
てこれを洗ひて歸途につく、また古兵の來るに逢ふ  
また交換すべく強らる、斯くする再三漸く時間を費  
して最後のものを洗ひ歸れば、他の新兵は既に營  
庭に衆合し演習しつゝあり、教官なる某少尉大聲一  
番「汝等は演習を嫌ふずらい奴じや」と、噫々新兵果  
してづるさか然も直に理のある所を陳述することを  
許さず。

#### 四、夜間土工作業

夕食も勿々、作業服着用營庭に集合し、番號順によ  
りて圓匙と十字鍬との分配を受け、某少尉の引率の  
下に作業場に至り、適當の想定を設けられたる上、  
片手若くは兩手間隔の一行横隊となりて、合圖によ  
りて作業を初め、土質によりて鍬と圓匙とを使用し  
つゝ堀土、積土、除土の作業を續行すること大抵四時  
間「演習終り」の號令の下に鍬折振る手を止むれば、  
始めて知る汗は流れて川の如く、腹は空しくなりて



臍と脊髓との附着せるにはあらざるかと疑はれ、全く人心地もせざるが兎角して營舎に歸れば、御褒美として分與せらるゝ第一種飯のほや／＼にたくわん三片、土だらけの手によりて早くも口に運ばるれば、いつしか手はきれいになりて恰も洗ひたるかの如く。

五、除隊當日

一年志願兵終末試験も終りて、及第者は「任陸軍工兵軍曹」の辭令を、落第者は「任陸軍工兵伍長」の辭令を、隊長より頂きて將校團や下士團に暇乞も勿々、一同演習服をぬぎ捨て長き袖の衣服に改め、營門を蹴て出てあとふりかへり見れば、一年前の明日の入營より今日までの辛抱、思ひ出せば實にや夢なるかな現なるかな。

漫筆

第五年 小 倉 誠 一

山中鹿之助が、「願くは、七難八苦に、逢はしめ給へ」と、祈りしは、偉人の心事を、自白せしものなり。「うき事の、猶、この上に、つもれかし、限りある身

間が、猫犬を惡戯者視する以上の程度にあるべし。それ、彼等は、時々、人間の所有物を、盗み食ふも、其食慾を、充たすに止む、人間は、否らず、限りなき、慾心を、満足せしめんがために、その求め限なし、然らば、人類猫犬、果して、何れが惡戯者なる。

金なる哉、金は、天下の寶なりと、然れども、身を失ふ。劍は天下の至重なりと、然れども、身を害す。用所を誤れば、阿片も命を傷り、醫術も人を殺すと、豈に、心す可けんや。

職人肌、役人肌など、人の氣風さまざまなる中に、書生肌といふものあり。此のもの、含める意、多けれども、邊幅を飾らざるなり、城府を、設けざるなり。巧言令色なきなり。これらを、其外部の特色となす。換言すれば、これ書生肌の公式なり。噫、今の世の、此物、果して、この公式に、適するや、否や。

錦囊

第四年 桑 原 雅 亮

の心ためさむ」と、云へる歌も、堅忍の氣、鑑みる可きなり。「睥睨蟬蛭州首尾、欲向何處試我才」と、いへる句にも、男子の霸氣見えて、痛快なり。噫、今の世の男子、是等の語、果して座右の銘とすべき、價値ありや否や。

線滴たる志都岐の山麓に、釣を垂れて、一舉して、籠にあまる數魚を得、喜んで曰く、「かくまで、我釣に、懸るゝは、愚の極といふべし」と、乃ち、籠中の魚、得意然として曰く、「釣らるゝものは、我のみならず。貴重なる、時間を浪費して、連日竿を手にせる御身も亦、魚に釣られたるなり。而して、釣の腮に、立てるや、試験の日、甫めて、悟らるべし」と、奇なる哉。

人は、野犬野猫を、惡戯者なりと評す、然れども、彼等、生存せんがためには、食はざるべからず、食はざるべからざるために、人類の、繩張以内に入て入りて、食を求む。敢て、惡意あるにあらざるなり。然るに、人類は、生存維持のため、山に、獸類を屠り、水に、魚類を捕へ、野に、植物を求む、彼等禽獸よりは、人間を目して、惡戯者とする程度は、人

立志

君見すや、暗黒世界を破りて、東天に昇る旭日の、燦然たる、赫々たる其の様を。男子、志を立て、途に登る、當に、斯くの如くなるべし。

熱心

君聞かずや、小蛙の、柳糸を攀ぢむとするや、飛びては落ち、落ちては飛びて、たゆまずうまず、終に其の希望を達したりしを。男子、志を抱きて、道を行く者、當に、斯くの如くなるべし。

迷夢

君知るや、中に毒あるものは、外形常に美なることを。我等の進む道の側に立てる紅蓮を見ずや。男子、苟も、志を立て、途を行かむもの、美はして、夢にだに、紅蓮に觸るゝ勿れ。

希望花

君聞けりや、我等が行く前途に、一大華園ありて、そが中に、紅、黄、白、紫の淡く、濃く美はしき花の、將に蕾を破らむとして、微笑みつゝ、我等の行くを待てるを。男子、志を立て、道に登れるもの、此の園に到りて、好ましき花を手折り、かざし



ずして、止むべきかは。

臨終

君見ずや、彼の美はしき山櫻の、三日の業を終へて散り行く様を、片々として、其の喜べるが如き、何ぞ、其の終の潔さ。男子、志なりて死す、當に、斯くの如くなるべし。

### 俳人の逸事

第三年 驛 元 三 郎

○鬼貫は、蕉翁よりは少しく後れて世に出て、其上住所をさへ、異にしたれど、蕉翁と並び稱せられ一流を立てたる、此の道の達人なりき。鬼貫未だ若かりし折、諸卿の打集りて、連歌の最中なりしが、公達は鬼貫の、其の場に來れるを見て、「この男は當時世にうはさする俳諧の發句をよくする者なり、*いふ*一句こそ望ましけれ」と、強ひられしかは、床の間に掛けありし、小町の掛物を指し、「あれを賜らば一句贊せん」といふ。公達は何れも驚きたれど、止むを得ず「さらば佳句を」とのたまひしに、鬼貫即座に筆を取り、先づ肩のあたりに、*あちらむ*と書き、稍

々しはしためらひて筆をなげたり。其座に居合せたる諸の公達は、示し合せし如く、一度にどつと笑ひたり。鬼貫すかさず筆取りなをし後もゆかし花の色と書き終りし佳吟に、公達はしたをまきて、驚きたりとなん。

○一茶は發句に奇智のありしは。世の知る所、或時名主某家に、食客になり居たり。たまたま百姓他より金員を借らんとして此の名主の奥印を求む。あやにく不在にして大に艱みけるを、一茶前より聞き居り氣の毒に思ひ、我れ此れを取らせんとて、右の通りに御座候今日の月と書きて與へたり。目に一文字もなき田舎百姓は此れを證と思ひ、貸主に見せしに、打眺めてからからと笑ひ、我れ此の字を買はんとて、所要の金子幾らかを出し與へたりとぞ。



### A RETROSPECT.

H. IWATA.

The room in which I was once boarding was one of four-and-a-half mats in the second story. Though it was small yet it had a large window open to the south, and the sun poured in his delightful light and purified the air in the room; thence one might take distant view over a fine large garden,—the garden of a rich merchant living at a distance. It was very well planted with shrubs, evergreens and many flower-plants.

Right beneath the window there stood side by side two little houses,—or to speak exactly, cottages

—in which two families were living; of course the men of these houses belonged to the number of those whom it is said of to be "out with stars, back with dew"; and in the evening I frequently had heard lovable and innocent voices—"papa! you have come back? Welcome!"—truly these had sounded to me like angel's music.

Among the flower-trees, there were three great cherry-trees that, during the vacation, were a considerable comfort to me and every day from morning till night were my sincere friends. Surely likewise they must have consoled these poor troubled families, and undoubtedly the landlord too admired the beautiful blossoms:

Thus the following image, that still remains green within me, appeared upon the mirror of my emotion,—

The town and the country—everywhere,  
The bounty of God is admirable;

When the spring visits a grand edifice,



The air about an humble cottage is full of perfume.  
All the distinctions are nothing but the false  
work of man,

The moon, the snow, the flowers,  
Are all equally enjoyable  
To the young and to the old, to the rich and to  
the poor!

### THE BRAVE YOUNG SOLDIER.

S. HAMAYA. 5TH YEAR.

When Napoleon was carrying the war into Italy  
in 1796, he ordered one of his officers, Macdonald, to  
cross the Splügen with fifteen thousand soldiers.  
Perhaps you know, the Splügen is one of four  
passages which cross the Alps from Switzerland to  
Italy.

When General Macdonald received the order, it  
was about the beginning of December, and the night  
was gaining on the day, and the winter storms were

raging hard. It was a hard business to cross the  
mountains, but he had to obey.

Then the army began their terrible march  
through a precipice of the Alps which is about six  
thousand feet high. The soldiers were carrying arms  
and gigantic commons were drawn by oxen.

There was a brave young soldier in the army,  
and he was marching at the head of them, and was  
striking a long rod in the snow in order to find the  
path, and workmen were clearing it; after which  
followed the army.

They encountered severe storms, and had to  
fight with coldness. When they heard a loud noise  
suddenly, they looked at each other, for they knew  
well what it was. They cried, "An avalanche! An  
avalanche!" The next moment the ice fell off and  
took off the middle of the file, and threw them into  
the glen. The brave young soldier was among them  
who were thrown into it.

The hero and many others were seen struggling  
for an instant and then disappeared forever!

### THE TWO FILIAL AND AFFECTIONATE SONS AT KAGAWAZU.

By HIDEO TANABE. 3RD YEAR.

About seventy years ago, there once lived at the  
village of Kagawazu, a very poor old woman, who  
had two sons, Gonzo being the name of the elder and  
Rikichi that of the younger.

One winter she had taken a heavy cold and was  
getting worse day by day. Of course she took some  
medicine, but all to no effect. Then her sons felt  
much more anxious, and every day went to Shinbori,  
where a temple dedicated to Kōmpira Daimyōjin  
stands, and prayed the deity in earnest, saying,  
"Our God, please help our poor mother!"

One day there was a heavy snow. They did not  
care for it, but set out as usual. On their way home,

they were so benumbed that they fell down in the  
snow and were frozen to death at the bridge at  
Matsumoto, for that day was very cold; besides they  
were in want of food for some days, and did not have  
clothes to wear.

When I was told this story by our teacher, tears  
came into my eyes. I hope every boy to be dutiful  
to his parents like the two brothers.

### SCRAP-BOOK.

By T. TORNO.

A by-stander knows and judges better. He  
flatters himself with the idea that he is blessed with  
more endowments. But when he puts himself in the  
line, he finds those on whom he has looked down are  
far better men.

\* \* \* \* \*  
"Morals" teaches us to be modest and conciliat-  
ing. When we see that "successful men" are those



who rush on, elbow their way, pull others down, and get up the top of the tree, should we still listen to "Morals", and lag behind?

It is the first thing for us, then, to come at the true sense of "Success."

Man is apt to take it a shame to ask. He pretends to be wise, when he is quite ignorant. He shuts up his eyes to the plain fact that it is a greater disgrace to make blunders before the public and to be laughed at, because he should have asked.

The past is dear and sweet, even though it is of sorrow and affliction; the Future is hopeful as well as incomprehensible; while the Present is displeasing and dissatisfactory, in whatever position one may be.

The former two are poetical, beautified through the mystic veil of "time"; but the latter is plain and prosaic, because it is a bare fact, and admits no

playful imagination.

The Proverb, "Time flies like an arrow", is true to the letter particularly when we talk with our bosom friends.

Though we should keep ourselves from forming the habit of wasting away the precious time in idle talking, yet it is sometimes necessary for us to take to this practice as a means of recreation, which relieves us from the daily toilsome work and even from the worldly cares for the time being.



半風子辭

頓野指月

猿に小鏡をさせて、俳諧の神を入れしは、芭蕉の

翁が幻術と聞けど、煩惱の垢に誰が化粧の魂をうつしてか、爰に風といふものありて、陽虎が似たる面貌もなく、足の數よりしていへば、百足にも及ばぬを、何の世よりか千手觀音の名に立ちては、野末の菰垂の中にも和光の塵に交はれど、敬して遠ざけらるるは、強ち其身の貴き故にてもあるまじし。たま／＼清女がにくきものゝ内を漏れたるは、涅槃會に猫の加はらぬに同じ身の程を思はで、釘づめの服の下に忍びありきて、東京巡查を困らせぬれど、猿の手の免れがたきをいかにせむとすらむ。ざるを苟且に源内が道行に、物のあはれを知りそめしより、自ら仁の端ともなりて、潔く身を殺して王猛が美を成せしは、いさゝか聖人の心にも似通ひ、常は襤褸のむさきに纏はれながらも、折につけて花見の風雅を忘れぬぞ、吾が俳諧の本意には協ひぬらむ。

夏の初め

廣瀬保生

狂風花のあと訪ひて、夢の間惜しき春も早や、あはれ昨日となりけり。美はしき者も遂には亡びつ、

骸骨の上を粧ふ偽も、醒めてはつらき思ひ出なりけり。嗟、世を酔興富彩の樂土と化せし花の世界は、徒に多情多恨なる詩人が空想の歌に入り了んぬ。今や我等の靈に觸るゝものは何ぞや。初夏、然り初夏。そこには男らしき響きあるなり。北方の雁、遠く歸りて、南方の燕、遙に來るや、初夏の表相は、大なる空間に現はる。吾人に光を惠む太陽は、その新なる強き威嚴を以て、天の莊嚴なる帝座に照臨し、吾人に生命を給する大氣は、その自然が賦與する最も爽快なる清澄を以て、吾人の四周を圍む。眼を放てば、庭には多肉にして生々したる若葉充ちたり。多汁にして淨き夏花あり。多肥にして趣味ある夏草あり。緑の陰に、餌を求むるは子雀か。蓮池には浮葉見えそめて、蛙が晝寐の夢を乗せたり。遠き山々は、紫に煙りしが、緑の色に晴れて見えたり。近き山々は、古葉若葉の薫り鮮かにして、淡紅の匂ひ雜れり。野には、穗麥熟して、玉苗秀てたり。牛を追ふは、農夫の子なり。堤を行くは川狩の子か。養蠶の盛りと見えて、桑を刈る人多し。海は夏らしき莊重なる響きを以て、游泳の人を待ち、



濱の松風は、浮世に遠き韻きこもれり。まして夕暮は、わけて唯ならぬ頃なり。蚊やりたく里、苗代野火。卯の花月夜、星月夜。山杜鵑に詩を吟する人あらん。水鶏に歌を咏する人あらん。蛙の聲遠く聞えて、螢追ふ子の聲近く聞ゆ。いかに静にして、面白き夜の様かよ。

絢爛瑰麗の色観は、春の相なり。浮華驕艶の姿は、春の相なり。初夏は、然らず。清涼は、初夏の生命なり。人間 心、恆に清涼なるを要す。労働は、初夏の生命なり。人間、身、常に労働するを要す。現世の人心濁り、現世の遊樂盛んなり。風紀頹敗し、意氣銷沈す。誰か初夏の新しき力を學ばざる。自然の大なる暗示、そこに雄大なる繪畫あり。そこに靈妙なる音樂あり。はたまた、そこに崇高なる詩品あり。天の蒼々たるは、悠久を意味し、地の綠勝ちなるは、活動を意味し、而して、紅の花の多きは、熱烈を意味す。花木、花、夥多なりと雖、その結實は、數ふるに足らず。人間の成功、亦甚だ容しとせんや。初夏なる哉。初夏は、大なる青年の師なり。

### 冬旅の一日

第五學年 大 草 又 七

十二月の二十日の頃なりしと覺ゆ。無下につらく苦しかりつる試験も終りて、待ちわび居たる休暇となりければ、旅路に出て立ちて、かしこの山を蹈み、この水を渡りて、さまよひありかば、慰み樂しむわざにもやなりなむとて、親しき友どちと只二人、朝まだき、冷たき風に旅の衣をなびかせつゝ、何處をあてともなく、東のかたへなむ出て立ちぬ。冬のさかりの事なれば、道行く人の吐く息も白く、西に東にかけり行く小鳥のかまびすしきは、餌をあさるにやあらむ。見渡すかぎり寂莫荒涼にして、四方の山々黄色を帯び、残る松さへ、峯に寂しく見ゆ。やがて行くほどに、新川口に至りしほど、沖のかなたを眺めけるが、眞帆片帆の遙に漂ふさまは、げに一幅の書を見る如くにて、心もそらになりぬ。かゝる折しも、川口より出て來る帆影に、ふと心をつくれれば、その舟子の歌ふあやしの聲は、寒空に響き渡りてものさびしかりけり。かくて小畑もちち過ぎ

て、身に浸む風をうけつゝ、高さ浪の音を聞きつゝ、磯邊の道を辿り行きぬ。やがて新道と舊道との分るゝところに至りけるが、嶮しくはあれど、舊道の近さに如かじとて、これに登りて小徑を行きぬ。かくして頂に至り、我も友も、汗を拭ひて憩ひつゝ、ふと麓の方を見下せば、新道を行く旅人の、細く少さく見ゆるもをかしく、木の間より沖の方を見渡せば、烟波萬里の中に、大島を始めとして其他の島々も手に取る如く、遙の彼方には、雲か烟の如く、水天髣髴たる間に見島も見ゆめり。やがて山を下らむとしけるに、六花、鵝毛のごとく翻々として降り來たり、樹々の梢も、時ならぬ花を咲かせぬ。山を下り、再び新道に出て、行きしが、これよりは右はさかしき岩山にて、左は果しもなく海原なり。沖の彼方より打ち寄する浪は、青山の搖ぎ出でしがごとく、十重二十重、限りなく打ち續きて、萬雷の一時に九天より落ち來しなるらむと疑はれ、岸邊の岩に激して亂れ散る飛沫は、白き雲霧の空に漲りて、數限りなく、美しき珠玉を奔放せしむるならむと思はるゝ。又かく足下に打ち寄する寒潮の、ひときは

烈しく狂ひ出てたるが如く思はるゝは、雪の降り出でたるを怒り罵るわざにやあるらむ。かくして思ほへざる間に足はかどりて、はや大井村にぞ至りける。村の名あへる小川にかゝれる橋の上より見下せば、流るゝ水の光も薄白く、高く低く、行く冬の賦を奏てつゝ、流れては逝き、逝きては流るゝさまは、げに淋しく悲しき心地す。こゝを打ち過ぎて行く手の方を眺むれば、遙に奈古村を望み、近く目のあたりに、水漫々たる奈古の海を望みぬ。向うに見ゆる少さき島は、そも何といふ島なるかと里の小女にうち聞けば、これなむ奈古にて名高き鹿島なりける。緑の色こそ失せたれども、黄に、紅に、樺に、紫に彩られて、かしここゝに、白浪のうちよするも見え、白鷗のそのほとりを飛びかふさまは、げに妙な眺めなりけり。この幽玄なる光景に、我も友も恍惚として佇みぬけるが、漸く我にかへりても、なほ去るに忍びず、これを眺めて憩ふこと久しかりき。かく海人が苦屋より、煙の淡く長く立昇るころ、奈古浦に着きぬ。



寄宿舎の朝

第五學年 小 倉 誠 一

東天、白みを帯び、紫めき薔薇めきたる雲間より、薄明なる百星の光も、名残をしく消え行く朝、寄宿舎の窓を開き、四顧するに、空の色は見る間に明けわたりぬ。時しも、寂寞を破り行くは、巢をはなる鳥なり、新緑の葉には、半夜の雨の名残見えて、水晶の玉を宿しぬ。まだ起床一時間前の頃なれば、舎生の夢も未さめず、獨りさめたる余は、昨夜の夢思ひやられ、一人思はず、微笑をもらしぬ。はや鶏鳴は朝を報じ、鳥も、三三五伍なきてどよみわたりぬ。炊夫が朝飯の用意せんとて、水を汲む音も漸くきこえぬ。空は、いよ／＼明かにて、朝暾麗しく、たなびける雲は、真紅に染められ、漸く昇りて、硝子窓に反映する程、起床のベルは、満寮の夢を破りて響さわたり。嗚呼「イヤナ響だナ」と口々に言ひ出せど、目をこすりながらも、元氣ありげに、枕を蹴つてゲットアップするや否や、蒲團を疊み、蚊張をたむ等、規定時間内にもものする事、甚迅速

快敏なり。之ぞ自治を重ずるこの寮舎の特徴なるか。十分に於て、人員検査あり。それより、手拭片手に横摺引くわへ、例の洗面場目がけてゆく。時に「オイ御早ウ」「イヤ失敬」とそこそこの挨拶始まり、やがて清潔なる空気を吸はんとて、滴たるばかりの濃緑の樹陰に、露をしわけて逍遙す。げに、幽邃の裡に希望の影を浮べ、静寂の中に活動の象を呈し、雄麗—平和—快活なる趣は、吾人をして、壯快なる感覺を起さしむ。朝飯のベル鳴れば、今しも、書讀み居たる人の聲は、水を流せるが如くやみ、言ひ合せが如くやみ、言ひ合せたるか如く、食堂にと押駈くるなり。一禮了れば、満室肅々、たゞ茶碗と箸との音、炊事夫を呼ぶ聲のみ聞ゆ。さて、始業前の用意はをかりぬ。始業のベルは鳴りぬ。舎内一人を留めずなりぬ。たゞ、各自教室にと出掛くる後は、満寮、再び寂寞に返りて、たゞ机と書筐と相列りて其の室を守るのみ。

浩然の氣を養ふべし

第五學年 田 坂 榮 助

梅雨瀟々として人の心を沈ましむる時、試に海濱に出でて見よ。果して如何の感かある。吹雪凜々として人の膚を寒からしむる際、試に高峯に昇りて見よ。果して如何の感かある。恐らくは何人も皆、雨の面白さ、雪の勇しさを悟り、一種云ふべからざる感にうたれむ。宜なり。緑滴る松は霧の爲に半身を隠現し、鶴江の台も指月の山も空に浮んで仙人も見えむばかり、海水は天に接して遠くなり近くなるみの面白さ、或は見渡す限り白雪を戴きて、數里に渡る無數の白山巍々として聳ゆるこの好景、蓬萊の山もかくやとばかり、その壯快なること實に筆にも言葉にも及び難し。人間の少さき巢にのみ潜み居て、夏橙に注ぐ雨をのみ見ればこそ、梅雨は益々鬱陶しけれ。穢はしき火鉢をのみ圍みて、籬根の雪を見ればこそ、冬は愈厭はしく思はるれ。一度雲通ふ辻に望めば、その全く豫想外に出づるを悟り、反つてこの趣味多きを知るならむ、春秋は更なり。浩然の氣を

養ふとはこれを言ふなり。抑浩然の氣なるものは能く偉人を生じ雅人を生ず。古より偉人と呼ばれ高雅の人と云はるゝものは、多く山水を好み、名所古蹟を探り、名山に昇り名水に望みて、以てこの氣を養ひ、聖賢の資を案出するに勤めしことは、諸氏の既に限りなく見し所ならむ。ある人は曰く、「山水は偉人を生ぜず偉人はよく山水を發揮す」と然れども余はあまりこれを信ぜざるなり。そも、昔より、偉人と呼ばれ雅人と云はるゝものは、如何なる地に生ぜしか。勿論我等チャイルドの能く極め得べき所にはあらねども、その實例より見れば、概ね山水秀麗なる地より生ぜしことを推し得べし。又我が帝國の如き山間狹地の民は小事を企て、埃及の如き大原廣地の民は大事を企つるが如きを見て、周圍のものは、如何に人心を左右するかを知り得べし。浩然の氣を養ふものは、縦令偉人の稱を博することなしと雖、人物頗高雅なり。理想甚豊富なり。目的殊に雄大なり。生涯頗快樂の人なり。決して凡常の人に非ず。これに反し。この氣を養はざるものは、縦



令世の働きある人と雖、精神甚粗野なり。野心家なり。生涯頗卑劣にして理想少きものなり。

諸氏よ、勉學の餘暇あらば、必山水を跋渉して、浩然の氣を養ふべし。地勢の變化に遇へば、精神を入れ換へ、山川の形貌を見ては、道徳を思ひ、草木の有様を見ては天眞を悟り、水に寫る月影を見ては樂む、誠に有益の事ならむ。或は洋々たる大海を眺め、巍々たる高山を望んで心は壯にし、名所舊蹟を訪ねては、昔を忍び、歴史を思ひ將來を察し「俯仰低徊去ること能はず」誠に趣味あることぞかし。只に精神の快樂、健康に無量の裨益あるのみならず、又能く盛大の氣を養ひ、優長の心を起さしむ。抑、朋友相集りてカルタをとるもよし、テニスもよし。然りと雖、これらは、唯娛樂に効あるのみにして、かゝる深遠の氣稟を得るには聊困難ならむ。都會より比較的名士の現はれざるはこれが爲か。世事益々煩はしく、風習日に敗類せむとする今日、縦令身は洋装に飾るとも、我が古武士の精神を失ふべからず。

我が古武士の精神を失ふべからず。

風の辭

第五學年 山中 喜 一

昨日ふりたる春雨に、もえてたるばかりの、小草を褥とし葦の清き香にむせぶ詩人に胡蝶の樂しき生活をしむべくとよふ風。落花を乗せたる筏をおしくだす春の川ずらを、ぬるく吹く東風。團扇に招かる、かと、思へば、柳の糸に姿をかくす風。九重の雲ふかく通ひしも賤が軒端に吹きすすみ、藻鹽吸む海人が袂になれしも、高殿の簾の間より綾の袖に通ふ風。げに風こそ、あやしきものにはありけれ。夏の初め、前栽は皆青葉にて、水盤にたゞよふ一つの葩もなし、さいつ頃、白梅のけだかく、清きかほりを持ち來したる風も今は若葉に、さわぎて何ともいひしらぬ心地ぞする、あゝ汝知らずや、俳人は田の面見渡す東屋に居て、青嵐に筆をとり、旅人は峯の松吹く風に、氣をすまして、岩間の涼しさを樂しむ。

その靜なる姿は、可憐兒の紙鳶、みどり子の、よろこびすさむ車風に、もてあそばれ、又一ひらの花に

もたはむるそのおそろしき姿は、天の八衢より吹きおろして、木をも、家をも、たふさんばかりに、すさび、さては怒濤を起して、村落をも併呑せんばかりに、おそろしく狂ふなるよ。夏の夕、軒端の風鈴に通ひ、一家團樂に、平和を媒する風は、冬の朝、雪にまじはる、ふじきに似たり。

花の香を送るやさしき風は恨み多き五丈原頭の、白旗靜に夜動ひて、夜寒を、わぶる虫の音にしげくすさびて、無常を告ぐる心地す。あゝげに汝、風よ。この宇宙に汝ばかり、趣深きはなく、また汝ばかり不可思議なるは、なかるべし。

回想

第五學年 津 守 猛

「姉さん」

と小さな涼しい聲で高く呼びながら、土橋を渡つて自分等の涼んで居る涼臺をさして驅けて來るのは、川向ふの新屋の勝坊である、今年五ツで、黒目がちのぼつちりした眼で、口元が可愛らしくて、笑ふたんに膨んだ圓い頬に唇を引込ませる、色のくつき

りと白い男の兒である。

「ハイ、勝さん、此處にゐてなさいよ、いゝ風が吹いて涼しくつて。」

妹は團扇をあげて手招きをするけれども、勝坊は見馴れぬ自分を恥かしく思つたものか、橋のたもとまで來て立止つて、柳の樹の蔭に半身を隠して、寄り附かうとせぬ。

「おいでなさいよ、何も恐いことはありません、兄様ですよ、それ今朝東京からのお土産だつて、勝さんに錦繪を釋山してくれだ兄様ですよ。」

勝坊は柳の蔭から半分顔を出して、にこ／＼と笑うては居るが、また來やうとはせぬ。

「どれ、そんなに兄様が恐いのなら、あちらに行きませう」

と自分は一寸家の方へ行かうとすると、突然風のやうに飛んで來て姉さんにしがみついて、胸のあたりに顔を押し當てて、

「兄様お土産を有難う。」

「ハア、少なくつていけなかつたねえ、それで勝坊の氣に入たのがあつたか」



「坊はあのう、廣瀬中佐が一番好きだ」

もはや誰かに書の講釋をして貰つたものと見える。

「姉さん、中佐はえらいのでせう、坊は鬼將軍の中佐が一番好きだ。」

やつぱり姉さんの方にはばかり談しかけて、兄様にはお話をしてくれぬ。

「勝坊も大きくなつたら鬼將軍のやうな大將になるのだね。」

「あゝ。」

至極簡單な御挨拶である。

どうかして御機嫌を取らうと思つて、

「それ、この葡萄を上げるからおあがり。」

黙つて仕舞つて手を出さうともせぬから、姉様がよく熟れたのを一房とつてやつたら、

「難有う。」

と云ひなり攫むやうにして受取つて、懐にかくした。

「あら、勝さんは御行儀が悪いこと、おほい、と姉さんが笑つたものだから、自分も誘ひこまれて、アハ、と笑つた。

勝坊は耻しかつたものか、顔を眞赤にして、ふい

と立つて、逃げ出した。

これは自分が、去年の夏休暇で故郷へ歸つた日の夕方、の事であつたが、其後二三日経つたかた、ぬ中に、すつかり自分になれて、毎日のやうに遊に來る、机の上を掻き廻す、本を汚す、筆を折る。果ては晝寢をして居る自分の頭に飛び上るまでの腕白小僧と化けて仕舞た。だから秋になつていよいよ上京すると云ふ時には、初め可恐いものにして寄附かなかつた小僧が、袖にぶらさがつて、わい／＼泣き立て、大に困らせた。

ことしも自分は故郷にかへつて、美しい山、清い流を友として樂しき夏を過す積である。そして其山よりも、水よりも樂しみにして居るのは、去年の夏、柳の蔭から半面出したり引込めたりして笑つた、廣瀬中佐の勝坊に、可愛い勝坊に、はやく逢ふことである。」

### 春と秋

第四學年 中村 誠

春花と秋花

春花は、麗にして、秋花は、清なり。一は、鳥にまかせ、他は、蟲に與ふ。彼は、壯者の如く、此は、老者の如し。

#### 春川と秋川

春水は、摘花の香を有し、秋水は、落葉の香を有す。溶々たる春の川は、眠れるが如く、清々たる秋の川は、夢より覺めたるが如し。

#### 春山と秋山

春山は、綠葉もて彩られ、秋山は、紅葉もて飾らる。一は、武士的にして、他は、華族的なり。文明の今日、武士、數多華族と變ず。是亦、故ある哉。

#### 春雨と秋雨

春雨一降を増す毎に、蕭條たる萬物、生氣活動す。所謂催華の點滴なり。百花争ふて、色、美を増し、柳枝、愈垂れて、細長さ糸綫の如く、翠綠の快感、自ら備る。

秋雨、一度地上を侵せば、生氣滿々たる萬象、殺氣枯凋す。所謂落華の點滴なり。百花亂れて、色、艶を失ひ、柳葉、飛びて地上にさまよひ、蕭々の憂感、自ら浮ぶ。

#### 春風 秋風

枝も撓む許り、河邊の青柳を吹く春風は、抜山蓋世の勇をも和ぐる靄々たる趣を有し、搖落の梢に悲翠を彈じつゝ、庭前の梧葉を訪ふ秋風は、哀愁の韻、轉、感興の鼓動を高む。嗚呼、春風と秋風、邪は亡びよ。正は、光りあれと、叫ぶ聖者の命の如し。

#### 晚春と晚秋

爛漫たる千草、綾羅の衣を脱ぎ捨て、濃綠なる相を現す。活氣、此に於て新進の氣を帯び、是より生々たらんとす。是、晚春の感なり。綠は消えて、紅となり、杜鵑は去つて、雁渡る。枯菊の憐れなる、例へば、武運つたなき勇士の、刀折れ、矢つきて、鎧は、さながら、蜂巢の如く、生き残れる郎黨と共に、無念の涙を拂ひつゝ、今は最後と枕を連ね、討死したるに似たらずや。是、晚秋の景なり。

### 月鈴子

第四學年 古谷 實

秋氣は山野に滿ち、空は遠く澄み渡り、日は西に春



いて、美しい光は斜に碧流を輝してゐる。折から百舌鳥の聲遠くより聞えて、秋の夕暮の哀を知らせて居る。今しも我は杖を郊外に曳かうとして宿を立ち出た。面白さうな道を選んで、左に曲げ右に折れると鎮守の森がある。こゝには繁りおほうた翁草のうち、藤袴も咲いてゐる、女郎花も笑つてゐる、默然と歩を進めて、森の下道をたどるに、栗の實のはじけて落ちたのか、がさと一聲木の間に、物の落ちる音して、あとはひっそりと静になつた。其所を通りぬけて、小笹ふみにじりながら行くと廣い野原となつた、見渡すに柿の木や榎の木の紅葉した間を白布を引いた様な、阿武の水が流れて居る。そこに打ち架けた橋の上を、今しも小犬が二匹、くるひながら走るも時にとりての一興である。折から。何所よりか月鈴子のかれがれな聲の聞えはじめた。何んが爲かわきて耳に響いた。歩むともなくそが方へとたどると、小松のまばらなあたり、奇麗な苔の上を、美はしい羽根をふりたて、悲しげに行きつもとどろつするのである。暫しが程は、何とも言はれぬ感に打たれて、黙つて居たが、あまりにその様の物哀れに

その聲の悲げなのに、何時しか口を開いた。そうしていつた、可憐な汝月鈴子よ、汝が此の世に出て、此の美しい小松の下に、奇麗な苔の上に、月をみてたしめる歌をうたひ初めてより、幾月であるぞ汝は何故に今日はかく悲げに、鳴くのであるか、汝は、又、紅葉の散り敷きて、置く霜の眞白き師走の頃は、そのうすい衣で何所に住まうとするのであるか」と、月鈴子が哀れなその聲悲しげな其の調は恰も我の間に答えるものゝ如くであつたが、はては、其の聲次第次第とかすかになつて、其の清らかな姿は見えずなつた、折しも秋の日は静に暮れて月は早や東の山の端をはなれて、清々清々照しはじめた、噫、可憐な月鈴子はいづこに行つたであらうか。

五月雨

第三學年 平 佐 幹

糸の如き雨はしとしとと降り、傘をさせども衣袖を濡し、茂れる森に降る音もせぬに翠滴り、花園の花々涙を垂れ、霧は山々をこめ淡く麓のみを現した。軒端にかゝれる蜘蛛の巢は主人を失ひ銀の玉を

宿す。出て、向の田を見渡せば籬笠の農夫田植にいそがはしく或は牛を追ふもの或は苗を植うるものこゝかしこに蠢き柳下の蛇の目傘は小町道風はしむ。

四季の月

第三學年 工 藤 峻

春の月  
をやみなら降り暮しし春雨の、午すぎより小降りとなりて、今宵は名残なく打ち晴れて、軒端をつたふ玉水の、今は間遠に二三滴落ちたる折りしも、鏡の如き月は、阿呼社の老松の蔭にあらはれて、其清き光は隈なく我が文よむ部屋を照しつ。

夏の月

いとど涼しき夕風は、前庭の松が枝に訪づれぬ。今し夕餉を終へし余は、庭下駄にて「夕顔の柵も」など言ひつゝそこらさまよふに、何所かに蟲の鳴く聲のいとさびしげに聞ゆる程に、立待の月は向ふの茅屋の上に現はれ、あたりの小草における露の玉に限なく宿りぬ。

秋の月

秋立ちてより幾程もあらぬに、早、大方の景色變れり。庭の小草踏み分けて、涼しき秋の夕風に袂吹かせつゝ、龍田姫の小琴の調の床しさに耳かたむけて歩む折しも、鈴蟲の聲のわきてゆかしく聞ゆるに、立ちとまりてそが方を打ちまもり居しに、清く澄み渡れる東の空に、十五夜の月は現はれて微笑めり。

冬の月

北風の吹き荒びていと寒きに、阿武の流れも凍りしには非ずやと思ひつゝ、堤のあたり上へ上へとたどる程に、何とは知らねど、水鳥の吾が行く足の音に驚きしか、羽音けたましく飛び去りぬ。其跡に互えわたる冬の夜の月は影を碎きぬ。

眞の樂

第三學年 阿 部 時 治

深山幽谷の彼方より遷り來りて梅が香に鳴く鶯は春の快樂を洩すに似たり。水に啼く夏の蛙も、露にすだく秋の蟲も、總べて觀じ來れば樂あるが如し。けに樂は何物にも缺くべからざるものなり。富貴に酣豢



するもの。朝には出てて車馬を驅り、夕には往て花街に眠り、豪遊耽樂其の後來を慮らざるもの、始終よくこれをなし得るか、彼の富貴に傲るもの富貴を得んと欲するもの、或は名利に驕るもの名利を得んと欲するもの、彼等果して如何なる樂を有し或は有せんと欲するか。かの大厦に坐し、酒地肉林の遊びに耽り、糸竹管絃の音に浮るるを以て、樂となすか。げにや富貴の間は或は樂しき事もあらん、名利を持つる間は或は樂しき事もあらん、而れども彼等は知らざるか、富貴名利は永久の樂となすに足らざるを、まして此は俗界の樂にして、其の醜、其の俗、厭ふべく、賤しむべく、耻づべきもの甚しきなり。果して然らば、富めるも、貧しさも、貴さも、賤しさも同じく受けて、以て、永久に盡くるなく、窮るなき樂は何所に存するか。他なし、讀書の樂これなり。思ふに人間程外界の感化を受け易きものは有るまじ。朝夕に聖賢君子に接すれば知らず識らず其の感化に浴し、無邪氣なる小兒に向へば我れ亦小兒となる。然るにこの世の中には尙假面怪物多し、果して然らば何所に向て哲人君子を求めんか、他なし机上

### 我等の前途

第三學年 梅田吉郎

巍峨たる嶮山重疊して我等が前に横はり、茫々たる蒼海の怒濤は、今將に我等を洗はんとせり。豈我等の前途多事にして又困難ならずや。然りと雖決して失望するを用ゐず、落膽するを用ゐず、苦は是れ樂の種なればなり。精神一到何事か成らざらん。人苟も志を堅うせば、艱難辛苦我等に於て何かあらん。元より艱難辛苦は我等の欲する所にあらず、されど虎穴に入らざれば虎兒を得ず。人遊んで後日の逸を貪らんは到底不可能の業なり。よく之を凌ぎよく之に折せずしてこそ前途の寶を得、榮譽を博し、至勳を奏するを得べきなれ。凡そ人の世に處する蜀を得て隴を望むの念なかるべからず。我々の如き前途多事なるものに於てをや。就業の始め直に成功するはあまりに容易に過ぎてなかなか危険なり。第一回の勝利はやゝもすれば失敗に變じやすし。世には第一回の勝利に慢心を起して其の度を過し、遂に零落に終りたるもの少からず。故

書冊を繙くに若かず。迷霧みなぎりて道義の光ここに滅し、腥風起りて暗黒々たる社會を演出せる時に當りて、己れ獨り正義を守らんか、立ちて隣人に問へば彼答へず、天に叫べと應なく、地に問へども答あるなし、否答へざるに非ず。或は痴人と、或は狂夫と誹謗の聲は喧然四方より起りて己れを搦め、五尺の小幹を容るるに餘地なきに至らん、其の時に當りて何所に向ひて己が知己を求め、その苦痛を語らんか。來りて机上の書冊に對し、俊傑の傳を讀め、書中の俊傑果して我れに何事を授くるか。或は教へ、或は慰め、或は同情を表す。是に於て、忽ち自分忘れ、書を忘れ、古今の關を一蹴して俊傑と膝を交へ、快を談し、樂を語らん。是に於て迷霧は晴れ誹謗は消え、而して道義は永久に輝くに至らん。かかる樂こそそれ永久の樂なれ。氣鋭の青年滿腔の希望を抱きて、人生の大海に投ぜんとするもの、洪波の荒きにその銳氣を挫かれて、吞天海の希望を空しく畫餅に屬せしめん事、若かず讀書の樂をなすには、あゝ、讀書の樂は眞の樂なる哉。

に成功の秘訣は失敗中より勝利を抜き、之を我が障礙物を越ゆべき踏石となすにあり。若し失敗せば腹切らんとまで思ふべし。而して同時に跳ね返る丈の反撥力を鼓舞して斃るゝまでやるべし。見よ見よ、拔山蓋世の英雄豪傑、或は政事家、或は文章家、或は雄辯家、或は哲學者其の赫赫たる著名は、海外萬里に振動し、千歳の後我等をして追慕措く能はざらしめん彼のナポレオン、アレキサンドル大帝、ソクラテス、ニュートン若しくは豐太閤、西郷南洲の如き、豈これ三面六臂の鬼神ならんや。横目豎鼻總て我等と同一の人間のみ。其の如何にして斯の如くなるか。即ち百折不撓の精神を以て、事に當りしなり。元來薄弱なるものと雖もこの念を以て事に當らむか。滴々の水の絶えず落ちて巖石を穿つが如く、巍々たる嶮山何にかあらん。蒼海の怒濤亦何かあらん。我が困む時は人も困むなり。我が疲る時は人も疲るゝの時なり。人の困疲するに際し我れ一層の勇氣を鼓舞すべし。勝利固より我れに歸せざるの理なき也。



### 將來に於ける我が故郷

第三學年 山 一 源 吾

山間僻地と雖も、早くより世人の目を引くは、我が故郷ぞかし。北は、日本海に臨み、漁業日に進み、月に進む。峯巒は、東と南とを圍み、綠樹繁茂し、多くの良材を出し、中央の底地よりは、多くの農産、及び、果實を出す。西は、三隅灣を控へ、汽船は、堪えず出入し、又、日本海を通過する軍艦は、何れの國を問はず、未だ、かつて、一度だも淀泊せざりし事の無きは、何故ぞや。之れ港灣は深廣にして、前には、青海島を控へ、以て波濤を防ぎ、一見湖水の状をなし、幾百の軍艦を浮ぶるに足る。加ふるに、灣頭には、澤江町あり、又、小島、仙崎雨浦は、一帯の青松白沙の下に連り、終に、煙波香靄の間に没す。又、兩岸の群山は、崔巍崢嶸たり、蒼蔚たる樹木、漸く黄葉し、燦として、文繡の如く、或は、翠綠滴らんとして、煙霧之れをかすむ。されば、人をして、一度、此の地に泊せしめんか、自ら、蒼仙に、化せしめんとす。加ふるに、氣候は、

寒暖中を得。惟ふに、恐らく、風景に富み、且つ、日本海守備港としては、此の港を措きて他に求むること能はざるなり。陸上交通としては、鐵道は、今や正に、大嶺より、敷設せられんとし、縣道は、既に、開通す。商工業は、日を追ふて盛大となり、今や工場も建築せんとす。されば、僻地は變じて、紅塵萬丈の地と化し、洋人も、漸く來り住し、縣廳も、此の地に遷され、師團及び、鎮守府も、設けられ、以て、文物燦然、一瀉千里の勢を以て、開明の域に達し、殖産の旺盛を圖り、美術技藝の發達を促し、商權の擴張に力を盡し、文物武備の完整を期し、而して、以て、宇内の國威を、海外に輝すらん。嗚呼、我が故郷の多望なること、洋々たる春海の如し。

### 綠蔭の悲劇

第三學年 大 橋

夜の更けゆくまに月は皎々として、窓越に見ゆる草花は露を宿し、露に宿す月の光は螢かと疑はる。折しも、いづこに調ふるとなく、清き笛の音は病に

なやめる吾儕を九泉に導く便りと響きて漫る斷腸の思ひあらしむ。嗜真に夢にだにしらざりしよ我が此の病。噫、真にはからざりし此の病魔。頭を廻らせば去年の秋不圖したる事より病魔は吾儕を苦中に陥れ、今に至るまで身は故里なる別墅の一室に病床にありて、日毎にあらぬ空想を胸中に描きて思ひを惱すのみ。打かこつ程に夜は益々更けゆき、空渡る月は波に映じ銀蛇走るかと思はれ、黄金波上を轉々するものの如く、暫し恍として、月を眺むれば、微笑む如く、慰むるが如く招くが如く、親しまむとするものの如く、魂は飛びて月世界にあれど、身は月下にありて、病魔に苦められ、飛ばむとするも飛ぶ能はず。折しも時三更を報ずれども、惱に驅られて、夢を結ばむとして結ばれず。あまりのつらさに、涼しき風に、琵琶の調をかきあはせむと、苦しき聲を張りあげて、汀の波を友として、調ぶる中に、吾知らず夢を結びぬ。ましらなく聲に夢を破れば、東天は一面に代緒を流したるが如く、朝嵐に搖らるる浪は、其の色と和し、毯子を敷きつめたる如く、泊を出づる白帆は眼下に見え、漁夫の聲も間近く聞え、

床をなれし小童の泣聲も手に取る如く聞ゆ。呼吸は泣けど、日々父母と樂しき愉快なる日を送るならむ。翻て我身は如何、父母は在ませど病魔の爲に居を異にし寢食を共にせず。昨日の歡樂は今日の悲哀となり、昨日の春は轉じて今日の秋となり、昨日の理想は今日の空想となり果てぬ。嗚呼、將來の外交權は、我掌中に收めむと描きし理想も空想と轉じたり。嘗て人のなし得ざりし宗教の統一も、吾にありと意氣込みし元氣も秋の枯葉の如く散り失せぬ。嗚呼、天父は余を綠蔭の茶毘となさしむるかと思ひもはず、突然胸苦しくなると共に吐血したり。此れに伴ひて、心臓の鼓動激しくなりて、今にも最後を告ぐるかと、吾を忘れて呻きぬ。苦しき息の聞えけむ、看護婦は走せ來りて、驚きたるおもちして事の容體を問ひ、即時に退りて、事の急を故里なる親戚に告げたりけむ、暫時にして祖父、祖母、叔父上等は、我が病床を訪ひ、息もつぎあえぬ様なりき。余は苦しき中に微笑を浮べて迎へぬ。祖父は常に變らぬ暖き情をもて、御前の身は到底助るまじき身なれば、天の定命と諦めて快く往生せよ。祖父も老體



の事なれば、日ならずして御前の後を逐ひ、盡きぬ縁を來世にて……と、云はれもはてず熱き涙を拭はれぬ。哀れをそうる、軒端の松風は、汀打つ波と、昨日の琵琶歌を求むるが如く、室内寂として聲なく、益々黄昏に近づくのみ。折しも、けたたましき車の響するともに、轅を門前に止めぬ。徐々入り來りしは、嬉しや懐しき母君と姉上なり。共に眉宇の間に露を宿し、悲愁の情に得堪へ給はぬ様なりき。母君は先づ祖父等に向ひ常の勞を謝し、次に改めて、「天の定めし定命は、如何ともする能はざるが故に、かこつとも甲斐なき事なれば、これを終りと諦めて樂しき主の御前に行き永遠の樂を得よ。人一度初めあらば一度終りあり」とは云へ國家の爲めに盡さずして、主の榮光を顯さずして、一片の煙となり果つるを恨とするのみ」と云はれも終へず漣なす涙、姉上も……、床を圍む叔父上等も……。日は西海に没し、邊り寂寥として聲なく、空渡りし昨の月も、心ありてか今宵は晴れず、息次第にかすかになりゆくのみ。いまはの際に一言をと、苦しき息をつぎつ、「祖父母様に慰めを與へず、

父母に先つ不孝の罪は許させ給へ。只國家に何の盡す事なく、豊なる皇恩に報ゆる事なく、天帝の榮光を顯はさずして、空しく黄泉の客となるを恨みとするのみ」と云ひ終るや否や、復吐血したり。此の時遙に聞ゆる村童の、樂しげに遊び戯る聲。嗚呼、浮世は眞に斯の如く冷淡なるものか、同じ一村中乍ら、彼等は愉快に戯るゝ事ならむ。反面に此の一室中には、悲劇を演じ、悲愁悲哀をもて滿され、郭公吐血の思ひあるのみにして、息は次第に絶へ絶へになりゆき、既に絶へむとする時、常に愛する歌を奏しき。

しづけさかはのきしべを  
すぎゆくときにも

うさなやみのあらうみを  
わたりゆくをりにも

こゝろやすし神によりてやすし。

と奏し終るや、最後の笑を滿面に浮べ長へに、松の下蔭に盡きぬ恨を止め、十七歳を最後に若葉の露と消え失せぬ。驚きて突てば、足踏跟としてかたへの柱に頭を打込みて、痛さに全く夢さめぬ。身は今迄

机により、校友會雜誌の原稿の爲めに、苦しみつゝ、吾知らず睡眠したるなり。嗚呼、我將來に斯の如き悲劇を演ずる事ありや否や。

余が渡滿紀行の一節

第三學年 藤井 醇 一

八月六日、洪濤瀾汗として萬里際涯なく、眸を放てば空水一碧水か空か水か鬚髯として辨ずべからず。天晴れ風和ぎて玉兎皎々船は青疊の上を行くが如し。忽にして、浪は碎きぬ月のかげ、風は起しぬ波の山、海若怒りて、激浪天に沖す。我國屈指の大汽船も、只木の葉の如くたゞよひ、輕々と持ち上げられたる、浪がしら、下る時は、恰も八萬由旬奈落の底に沈むよと思はる。浪聲轟々として舷側をうち甲板を越し一衝一突、かくの如きこと數時にして、月は入りぬ。夜は明けぬ、風もやみぬ。浪もやみぬ。されど、未だ甲板に上るほどの勇氣は出でず。只聞く、浪の船側を打つ音のみ。忽にして、船頭に轟々たる響を聞くと共に、船の動きもやみて汽笛はなりぬ。人々皆甲板に出づ。遠く來し方を回り見れ

ば、依稀たる青螺海盤上に點々たるのみ。首をめぐらして西方を見れば、千帆皚々として、緑の波に映じ、萬人蠢然として、埠頭に集る。驚く、其の規模の大なるを。幾萬噸の大船も何なく横附にすべし。或人は自身此の埠頭に上り居ながら大連の淺橋は何處かと、いひしとかや。むべなる哉、東洋第一といふ。正午十二時驗疫あり。荷物には、石炭酸をふる。臭氣鼻をつき人をして座にたへざらしむ。余が降參せしは驗疫の際我が手土産の、夏橙の籠中へ無茶々々にこれを、かけたたりしなり。扱又船の下には、旅店客引の上船許可を待つもの蠢然たり。驗疫はすみて上船の許可は出ぬ。客引等争ひ入りて、その店の名を呼ぶ聲浪聲と相應じ、人をしてそゞろ蚊窟に入りたるの感あらしむ。我は、川卯の客引と共に船を下り埠頭を過ぎ、此處にて下條氏に逢ひ、同道して川卯旅館に向はんとす。先づ馬車を雇ふ。馬車と一言にいへば馬車なれど、内地に於ける普通のガタ馬車にはあらず。乗車すれば、何となく、紳士氣取になるぞ、をかしき。御者は手綱かいくり駒の頭を立て直せば、鐵蹄聲高く砂塵を蹴つて進む。只、あ



われむべし、馬を取扱ふの残念なる、憂慮胸にせま  
りて、口ものいふ事あたわず、目見る事あたわざる  
に至らしむ。さる程に、いつしか目的の地に達し  
ぬ。此處に、少しいこひて後、虎公園へ行く。

来て見ればさほどにもなし虎公園

何處が公園地なるかをしらず。只大小數十本の樹あ  
りて葉は皆綠色薄く黄白色を帯び、側に小松數百本  
あり、そは、近年我國より齋らしたるものとかや。  
我私に、我國を極樂國といへるはこれ我が國人の自  
讃に過ぎずと思ひしに、今までのあたり此公園の殺風  
景なるを見るにつけてかの言の虚ならざるを知る。  
右方にあたり石疊の高き三間、幅五間程のものあ  
り。これ虎の檻なり。鐵格子より肉を入るれば、一  
獸百鏡の目をはりたる様に四肢慄き戰ひて、そる  
日露戰役の當時此の内に入れられしといふ、婦人の  
事など思ひ出さる。馬車をかへして停車場に向ふ。  
路側の家次第に大になる。これ露西亞町に近づく故  
なり。驛に至り、待つ事十分にして、午後八時、火  
車は汽笛一聲驛を去る。車窓を開きて眸を放せば風  
景一として奇ならざるはなく、一望千里小丘相つら

なる間に、土人の家の點々たるのみ。南關嶺にて、  
軌道は二つに分る。一は旅順に、一は遼陽より遠く  
ハルビンに至る。日暮れて此處を發し、疾風の勢を  
以て午後十二時旅順驛に達す。家人の向ひに遭ひ、  
馬車にて宅に至る、二晝夜の旅路に勞れて、此夜は  
ものもおぼろず。

### 指月巖頭に立ちて

第三學年 小林 眞三郎

白砂を履て、松風、濤聲に入りて、遠く、天樂を奏  
する斷崖千尺、鬼斧神削の巖頭に、月の昇るを見ん  
とて、立ちぬ。岬角に落ちんとせし太陽は、金絲、  
銀絲を指月の山になげて、隠れんとせり。そは光  
り強かりき。時は矢の如く、流れぬ。遂に森羅萬象  
凡ての有形無形の萬物、靜かに、清く、廣き、黒幕  
にて、覆はれ終んぬ。我れも遂に、幕中の人となり  
ぬ。忽ちにして、闇を破つて聲あり。そは玉江乃精  
舎の夕を告ぐる鐘の音なりき。一聲、二聲、……  
……、八聲、九聲、復、聲なし。  
天地は、寂と成りぬ。森々たる古木、昔を語るかの

様。天地は、益、闇碧となりぬ。遠く、濱街道を通  
る、提灯の火も此處には、めづらし。

寂寞の境、唯に、小波の妙へなる樂を奏するのみ。  
我れは寂聲寥々たる巖頭に思ひぬ。そは我が友の事  
なりき。我れに、十數年來、相知の友あり。  
それよ、過ぎにし夏の事。炎神嚴として頭上に、落  
ち、街頭の砂礫は、毒氣を放ち、屋上の鬼瓦も、火  
炎をはかんずる時、露人の「ダムダム」彈を、用ゐる  
と聞きて、病を犯して、奮然、屋外に走り出て、劒  
を按して、北方に向ひ、「文明の露人は、今や、野蠻  
の露奴」と、叱咤せし丈夫ぞ。五年の昔、彼れの父  
は、彼れの成功を見ずして、卒しぬ。いまはのきは  
に「正雄の成長後が見たい」との一言、思ふも涙の  
種子なり。我れは、嘗て、彼れと此巖頭に立ちて、  
語りぬ。話は、たまたま、軍事の上に及びしが、彼  
れ腕を扼して、「日露の戰雲は、今や、酣となつたが、  
僕が歳は、十八だから、出征出来ないのは、實に殘  
念だ。何んだ、出征出来る……」。僕は  
今、十年、否、五年前に、なぜ此世に、生れなかつ  
たらう、だが國に對する活動力は、兵のみではな

い。商業。工業、農業、其他、各方面に、活動の餘  
地がある。一つ商業で。天下に活動しようか。工業  
よし。農業よしだ。残念だ!!!。此の腕を滿洲の外  
に、振ふ事は出来ないのか。僕は、泣く。女々しい  
だらうが、僕は目に涙が溢れるのだ。君!!。僕は泪  
羅の鬼と化しても、滿洲の豊富の地に、活動したい、  
戰爭後、滿洲に行つて、此の五尺四寸の男一疋を、  
かたづけろさ。意氣、昂然。是れは是れ嘗つての事  
なるよ。彼れは、意を決して、千里の外に、活動せ  
んとするなりき。かくて、滿洲の亂雲晴れて、修羅  
の卷は、平和の天地となりぬ。彼れ、欣喜、措くあ  
たはず。余等に、別し、昨年のさつきの中旬、しか  
も、夕、六時、萩港より金龍丸にて、發せんとし  
て、僅五町の海に、和船沈没のため、水中の鬼と化  
しぬ。今月は、之れ、我が親友、正雄君の一周忌の  
命日にぞ、ある。我が目前に、巨眼、炯々として、  
異光を放てる丈夫は、現然たり。隱然たり。我れ  
は、益、親友を思ひなやみぬ。遂には、天を恨みぬ。  
怒りぬ。曰く、「天よ。あたら。有望の青年を……  
……」されど、云はず、語らず。只、數滴を、巖頭に



はふりぬ。パツ！と金波、銀波、大浪、小浪を漂はしし月は、昇りて、今や、中天にあり。光、輝き渡りて、いと麗はしう閃ける長汀曲浦。あゝ、麗はしの月よ。されど、我が目は、熱涙に、充ちぬ。またも我は洩しぬ。月よ、同情あらば、我が囁きに耳をかせ、我が思ひ出は、我胸にえ堪へぬなり」と。されど無慘よ!!、ちぎれくもは、月を呑みぬ。

### 夏の趣味

第三學年 野 北 重 利

杜鵑一聲、高く名乗りを雲井に上げてより、世は、早や、趣味多き夏とはなりぬ。昔を忍ぶ花橘の香、軒端に匂ふ菖蒲の色、何れか夏の印ならざる。緑の色に、紅に、羅綾を染め出す春の美はなけれど、雲雀鳴く野邊に、東に西に、うかれ心に舞ひ遊ぶ樂はなけれど、夏には亦夏の趣味あり。碧波漫々として砂石白き所、岸打つ波の鼓に俗腸を洗ひ、松吹く風の琴の音に、樂しき寤寐の夢を結ぶは、之を夏に求めずして、はた、何所に得べき。細流潺湲として奇岩裾を洗ふ所、自然の美に恍惚として塵世を忘れ

清風颯々として綠陰玉露滴らんとする所、小冊を繰いて朗々として之を誦す。這般の趣味、之を夏以外に求むべからず。其他、海水浴に温泉に納涼に螢狩に、はた、曉の色に夕立に夏の趣味は尙ほ多かるべし。あゝ、樂しき夏は來りぬ。あゝ、愉快なる夏は來りぬ。なつかしき人も歸り來まさん。願くば、平和の聲、幸福なる音を聞かせ給へ。趣味多き夏!!

### 讀書の樂

第二學年 廣 兼 來 藏

古今を貫き、東西を通じ、四時を分かず、たのしきは、書讀む樂なり。春風、暖かに頬をねぶるの季、花は笑ひ、鳥は歌ふ野原に伏して、和歌や、俳句の集を繙けば、短き歌句の中に高尚にして、複雑なる趣味を悟り得て、さながら天界にさすらふの心地せむ。三伏の暑さをも、忘らるゝ、深山の綠の蔭に、ハンモックつりて蟬の聲をきゝつゝ、雜誌を開けば、臥しながら社會の進歩を知り、有様を知る事を得。其

の快言ふ可らず。

冷しき秋風吹く小春の日和、萩の小窓に、古の偉人。昔の英傑が傳を讀めば、己が理想とす可き人も見出すべく、己が参考とす可き事も知りて、其の益如何にぞや。

寒さ膚を、つんざき、吹き來る風も身にしむ、長き冬の夕、靜に經傳を繙けば、目のあたり、聖賢の教を、聞くが如き心地せられ、人の道を識り、事の理を辨へて自ら心清らかになり、我自ら聖人となりたる思起らむ。

要するに、酒にせよ、菓子にせよ、其外種々の肉慾的の樂にありては、快極れば、酔ひて争ひ、胃を害ふなど、苦しみを感ずるものなるを、ひとり讀書の樂は斯の如き事なきのみならず、其に依りて、智識を啓き、感情を養ひ、意志を練り、人物を磨き、退いては身を修め、進んでは世を益するものなり。噫、げに讀書の樂を解する人こそ、人間最高の快樂を味ふものなれ。」

### 立志

第二學年 原 田 正 三

後日社會に出でて、活動せんと欲する者は、先づ志を立てざる可らず。志とはそも何ぞ。志とは即ち心の向ふ所にて、恰も、弓を射る者の、的をねらひ、河を渡る者の、彼岸を望むが如し。されば、志の立てる者は、射手のねらひの、確なるが如く、舟子の楫取、確なるが如く、目的の達せられずと云ふ事なし。これに反し、志の立たざる者は、恰も、舵無く磁石無き船に乗り、大海に出でしが如く、衝無き馬の如し、漂蕩奔逸、定る所なし。之れ、志を立てる、必要なる所以なり。而して、志を立つるに當りては、大にして、高きを欲せよ。小にして低くければ、小安に安んじ、大事をなす事能はざればなり。志を立てるに當り、大なる希望心を、起すも可なり。名譽心不可なかる可し。然れども、一轉して僥倖心、及び、空想を畫き、到底なし能はざる事を、望むに至りては、是れ、最も、畏る可き邪徑なり。果して如何なる業務が、



己の天才に適應せるやを考へ、其の、適應せる方面に向ひて、志を立つ可し。經驗少く、社會の事にうとき青年、往々、志を立つるに當り、堅固ならず。昨の是とする所は、今の非となし、漂々として恰も、楫無き舟を以て、波上に飄流するに似たり、其の中途にして、躓き仆れん事、期して待つ可きなり。故に志を立てんと欲せば、慎重の態度を以て、よく身邊の事情、現在の境遇、將來の事を熟考し、且つ父兄、教師、先輩の意見を聞き、時勢に應じ、宜しく、堅忍不拔の志を立て可し。一度志を立てながら、僅かの障害の爲めに、志を屈するが如き事、ある可からず。天下何事か、此の輩の手になる物あらんや。詩に云はずや「男子立志出郷關。學若不成死不歸」と、男子一旦志を立てるや、堅忍不拔、百難前に横はり、千難後に従ふも、屈撓せざれば、名を千載に輝すや必せり。

### 落花を弔ふ

第二學年 松 井 隆 美

春風よく花を咲かしめ、又よく花を散らす。花を咲

か、梅に薰なしといふ。櫻花散りぬ。誰か、櫻を麗ならずと云はん。年々歳々花はかはらず、而して人の花を愛で、花を慕ふことも亦同じ。人豈情なしといふべけんや。あはれ花や、よく時を得て咲き、時を得て散る。芳は、天下に亘り、麗は四海に顯はる。散りても恨みなかるべし。時これ初夏花落ちて葉茂り。紅あせて、綠さかゆ。聊か花を惜みて、之を弔ふ。花よ、もし靈あらば、それ安けく泥に横はれ。」

### 大和魂

第一學年 片 山 平 作

「敷島の大和心を人間はば旭に匂ふ山櫻花」とは、本居宣長の歌なり。げに、よく我國民の氣概をいひたるものかな。玉となり砕くとも、死となりて全からず。義の爲には死を争ひ、不義と見れば睡せんと思ふ、これ所謂大和魂なり。近く、日露の戦争に連戦連勝し、以て、我が國を東洋の一小島國とあなどりし世界各國をして驚嘆せしめ、皇威、國光、赫々として 内に輝き渡りたるも、實に大和魂のあればな

かすは風の意か。花を散らすは風の心か。春雨よく花を養ひ、又よく花を害ふ。花を養ふは雨の意か。花を害ふは雨の心か。花や、その爛漫たる時に於ては、鳥鳴き、蝶舞ひ、瓢を携へて杖を曳くもの、幾千百なるを知らず。酒なき家は酒を設け、家なき里は家を建つ。天下一日も花無くば、光なきが如し。一朝にして雨に害はれ、風に散りて、麗々の姿、馥郁の薫、消えて跡なきの際、誰か又瓢を携へ、杖を曳かん。微風、微雨も、なほ害あらんと憂へしは、爛漫馥郁の昔なりき。今泥化したるに方りては、足に踏まんも顧みず、又憐むべき哉。變化は、天の理なり、榮枯は、世の習ひなりと雖も、風も無情、人も無情、天も亦無情ならずや、然りと雖も、試に思へ、花にして芳麗終始變ぜず、爛漫長く變らずば、いかに、誰か之を愛し、之をめて、之をながむるものあらむ。忽然として笑ふかと思へば、忽然として散りてこそ、愛して措かず、賞して已まず、千里を遠しとせずして杖を曳くなれ、春風、春雨、花を開かしむるは、其の意なり。花を散らすは其の心なり。風雨、豈、情なしと云ふべけんや。梅花散りぬ。誰

り。世界に國を立つるもの幾百、人口十六億にのぼる。されど如斯き魂、如斯き精神を有するもの、我が五千萬の同胞を除き、何れの國にかこれを求め得べき、見よ、西洋の武將を。見よ、強大無比と稱せられし露國の武將ステセルを。身は極東要塞司令官の重任を帯びながら、尙ほ、降伏の辱をさらし、厚顔にも歸國せしにはあらずや。ああかれも武士なり。生を願ひ死を厭ふの武士なり。誠にこれを何とか評すべき。それ降伏は必しも賤しむべきにあらず。何となればかの威海衛に於ける丁汝昌の如き武士の鑑とするに足れるものあればなり。露國のかく連敗せしもの國の武器精銳ならざるによるにあらず。兵數少きによるにあらず。將士不智なるによるにあらず、只彼我將士の心に差あるなり。吾等は未だ劍を取りて戰場に馳驅するの力あらず。されど戦はこの戦にて終るにあらず。否、平和の戦は、世のあるかぎり、片時も止む時なかるべし。故に、吾等は今に於て身心を鍛練し、大和魂を養ひ、以て、他日の大雄飛を期せざるべからず。



### 名なし草

第五學年 彌 政 南 葉

ちゝのみの父の恵もはしそばの

母の恵もわれはわすれじ

春の野は球うつわざにはや暮れぬ

かへる衣に月もやどりて

雌牛ひく田子はうたひてかへるなり

三日月うつる川のあなたを

歟すて、母は往きたりをさな子が

乳房こひつゝ泣く聲き、て

富士のねの雪の消えなむ日ありとも

君をわするゝ時はあらじな

浦さして歸る帆船を見る人は

暮方の霞に色をこめおきて

明日來む人を花も待つらむ

友とちと小舟を浮けて迎らばや

水底はるか月すむ方を

鶏なきて残れる月の影あはし

み、ひきてかへさむよしもなし。

頃は卯月のはじめにて、夜もそらく雁がねの、二

聲三聲聞ゆるに、兄の命のいたつきの、あやうきた

よりもたらしぬ。

とどろく胸をおさへつゝ、我は朝とく出て立ちて、

み空に星の二つ三つ、輝き出づる暮つ方、兄の許に

ぞ至りける。

かくして兄に逢ひしとき、兄は我身を見給ふや、無

言のまゝにつくづくと、我を眺めてかすかにも、い

と淋しげに笑み給ふ。

いとも久しきいたつきの、床の惱にやせはてし、色

は青ざめ眼のみ、懐くひかりて白露の、月に輝く如

くなり。

永くみ側に侍り居て、看護せばやと思へども、學の

道に勵む身の、如何にせむすでなくなくも、心なら

ずぞ別れける。

別れてよりも何となく、心ひかるゝ心地して、思は

遠く西のかた、空眺めては我兄よ、ささくてませと

祈りしを。

あゝ情なき世なるかな、あくる夕の鐘の音に、諸行

さして急がむ故郷の山  
月高く山田の里の秋たけて

靱うつ音もさえまざるなり

### 秋の山里

第五學年 大 草 露 芳

わが宿に、歸り來ぬ間に、日も暮れて、松風寒し、

秋の山里。

曉は、冬こそ殊に、身にはしめ、水汲む音の、空に

響きて。

露營

片われの、月影凄き、夜もすがら、勇士の夢は、い

づち攻むらむ。

半面に、月の光を、あびながら、立てる歩哨の、い

ともをいしき。

### 亡き人

第五學年 大 草 露 芳

水に浮べる泡沫の、またくひまに消ゆるより、は

かなき世とは知りつゝも、かくとはつゆも白まゆ

無常をしのぶとき、あはれや兄は亡き數に、入りて

かへらずなりにけり。

逝きて歸らぬ水底に、映れる月に今ありや、西の端

山に影淡き、残んの星にゐますにや、あゝ亡き人は

何處にか。

### 首夏雜詠

頓 野 指 月

しのび音や楊花咲く堀の内

村々を埋めて茂り／＼かな

薄月や蘆もそよがで鳴く蛙

短夜を蚤にくはれてほとゝぎす

築山の茂みに朱き御堂哉

棚橋を渡れば鮎のさばしりぬ

蟬鳴くや荷車續く小石道

蓮の葉に世を輕んじたる蛙かな

### 桐一葉

第三學年 小 林 直 三 郎

寂しさや一葉二葉の桐の音



大海や水と天との真帆片帆  
夕立を恨むが如き蟬の聲  
いつの間に月は上れる櫻花

折にふれて

第五學年 富田 流葉

○臘月

漕ぎよする櫓の音のみや臘月

○柳

五月雨に霏く柳や水の面

○五月晴

片里に簑笠ほすや五月晴

○蛙

うす月夜鳴くや水田の初蛙

○杜鵑

杜鵑たゞ一聲や蚊帳の内  
木蔭れに時鳥なきけり臘月

花の波

第四學年 桑原 雅亮

○花の波さつと寄せ来る山路かな  
○一螢の後より小笹五六本  
○畔道を追分節や秋の暮  
○大雪に新になりぬ稻荷堂

初雪

第四學年 桑原 雅亮

○ここの塵拂ひ清めし初雪に芽出度明くる新玉の  
歳。

○東雲のほがらくと明け行けばかすみの末に黄鳥  
の聲。

○むらさきの霞のとばり開かれて指月の庭に春立ち  
にけり。

○出て行きし白帆の影は打ち絶えておぼろにかすむ  
春の夜の月。

○たちまよふ浅茅が原の朝霞遠くへだてゝ鶯のな  
く。

○白百合のまがきのもとに三つ五つこくびかしくて  
何思ふらむ。

うたふなり。

野邊の景色の、たのしさに、つもるうさをば、はら  
さんと、友とちふたり、杖をひき、うかれ歩くもあ  
もしろし。

れんげたんば、すひくは、飛び交ふ蝶も、今と  
りつ、明日の學の、書机に、置かむものし、よ  
ろこばし。

みどりの草を、かたしきて、やすき夢路を、たどり  
つゝ、花と鳥とに、さそはるゝ、春の野邊こそ樂し  
けれ。

○別れし友に

第三學年 安達 茂作

今は誰とか遊ぶべき、のどけき春のその庭に、  
君とむつびし指月山、こぞにかはらぬ櫻花、  
春はきぬれど吾ひとり、胡蝶は舞へど吾ひとり、

に小雀

○春の日に妹がすさびに種子まきしやまと撫子今盛  
也。

○月雪に花になれにし古里のやまにも今朝は別れぬ  
るかな。

○なる神の音静まりて夕風に鳴く音涼しき蟬の聲  
々。

○吹く風は葦の枯葉をおとづれて一夜のうちは秋は  
來にけり。

○夕暮にいと静なる水の上をかすかに渡る琵琶歌の  
聲。

○臥待の月影高く小夜ふけていよゝさえ行く虫の聲  
々。

○はなよつき月よ花よと思ふまに今年もいつか暮れ  
行きにけり。

野邊の春

第五學年 木原 直孝

野邊のすみれの、色ふかく、われをさそひて、かを  
るなり。空にひばりの、聲高く、われを招きて、



淋しく遊ばん君なくて。

今は誰とか謠ふべき、

阿武の川邊をたどりつゝ、をちち照す螢火や、

金波銀波のさゝれなみ、清き眺めを友として、

聲爽に歌ひしものを。

今は誰とか眺むべき、

天界萬里澄み渡り、

數さへみする秋の月、

舟を浮べて眺めしものを。

今は誰とか語るべき、

見渡すかぎり銀世界、

炬燵かこみて君と吾、

共に楽しく語りしものを。

思ふ心にまかせ得ぬ、

高嶺の花を手折らんと、

共に語ひたのしみし、

今は天涯三千里。

おゝ吹き渡る朝風よ、

愛を送ると我友の、

汝が此方へ歸らむ日、

吾に告げこせ思ひなぐさに。

暮れゆく海邊

第五學年 工 藤 峻

寄せては返す小波の、渚に立ちて眺むれば、

沖に漂ふ片帆眞帆、何所をなして行くならむ。

金波みなぎる西の方、今して仕業なし果てし、

水平線下に没し行く、夕日の影のうつくしさ。

磯の岩間のここかしこ、友呼ひ交す群千鳥、

何思ひけむ諸共に、波路はるかに飛び行きぬ。

夕日は波に沈み果て、靜に來る夜の神。

にはかに變る空の色、無名の星もまたたけり。

遠き小島のあたりには、すなどりすなる漁火の、

數百の影は現はれて、波のまにまに漂へり。

やがて出て來る臥待の、月影清く小夜更けて、

後の原の叢中に、いよよそひゆく蟲の聲々。

第三學年 野 北 重 利

はかなしや、

舊城跡に立ちて

榮枯盛衰世の習ひ、

昨日榮華の花咲かせ、

明日は朝日に露と消ゆ。

見よや見よ、

そのかみ防長二ヶ國の、

主とも仰ぎし毛利氏の、

居城と稱へし巴城の跡。

あわれなり。

昔の影も見えわかず、

わづかに残る内の堀、

記憶うながす所々の塚。

富士山

第二學年 栗 栖 靜

大いなるかな富士の山 大和島根のたゞ中に

あまたの山に比類なく 雲のうへまで聳え出て

その頂にたえまなく 雪の冠くもの帯

大いなるかな富士の山 倒扇の形拾三の

州より此れを眺むべし 高さそ凡そ一萬の

上を越すこと數千尺 なせる姿のいかめしさ

大いなるかな富士の山 幾億年間赫々の

日は照せども雪さえず 昔の姿そのまゝに

かへて來りし其の様は 大和の國威を輝かす

見事なるかな富士の山 頂上に達し圓形の

八峰中に古の 噴火の遺跡今もあり

山頂たとふ金銀の 二つの泉水清し

他の山々は皆くづれ 萬の河も皆うもり

國興亡し人變り 世には古今の別あれど

富士山のみは開闢の 昔の姿かはるまじ

海原

第二學年 上 野 北 洋

見よ大海の雄々しさを、春はかすみ島つゝみ、

あさりの歌のにぎはしく、西に東に漕ぎ出づる、

船は御國の富源なり。夏は藍濃き大洋の、

うねりは高く又ひくく、少女の小舟もてあそぶ。

秋ばれ一點雲もなく、白帆は松の根をくゞり、

青螺と見ゆる孤れ島、夕日かゝりて霧せまる、

彩雲四方に立ちのぼり、照すの神は今まさに、

天の岩戸に入り給ふ。聖なる庭に神つどふ、



榮の歌げのほのめきや、あゝ渴仰の眼を擧げて、  
沈む夕陽を讀へずや。 淡墨色の空もやう、  
怒龍將に起たんとす、 北風凜とふききたり、  
怒濤の山はいやたかく、 千鳥の聲もいとすごく、  
小山の如き大艦も、 木の葉の如く飄らるゝ、  
怒濤は岩にうち碎け、 水煙たかく立ち上る、  
あな勇ましの極みぞや、 あな勇ましの極みぞや。



廣島より

河野厚造

敬啓、通信せよとの御端書、去んぬる二十一日に拜  
誦仕り候。仰せ付けられ候までもなく、進んで御通  
信申し上げべき積にて、これ、小生が、豫ての主義  
主張とても申すべきものに御座候。承り候へば、彼  
の國にては、六十七の翁媪も、時あれば、かれら  
が古き母校に集ひ候ひて、昔を語る老木の蔭に、夢

より淡きその上のことも語り合ひ候よし。即ち、  
これ、人間真情の流露する所、人情の美は、かかる  
懐舊追憶の際に發揮せらるるものと存じ候。さる  
を、この國の人たちの中には、一度校門を辭しては、  
さながら道路の人の如く、一年二年が内に、はや、  
生死だも明ならぬものさへこれあり候は、彼此小言  
をならべるものの、なか／＼、野暮なりと申すべき  
に候や。』

さて、其の後、御校の御模様、隨時拜承致し居り候  
處、校運彌々隆昌、慶賀の至りに御座候。小生、轉  
任以來八閏月、健康は舊の如く、元氣は旺盛にし  
て、時に、臺所奉行を狼狽せしめて快哉を叫び、八  
百屋の帳尻に驚いて、豫算の狂ひを嘆ずること度々  
に御座候間、幸に御休神下されたく候。』

さて、小生が、かりの宿りと定め候は、廣島市竹  
屋村第十二番地ノ一、いところやかなる住居に候。  
このあたり、まだ新開のこととて、尋ぬるには厄介  
に候へども、自然、機會も候はば、何卒、御訪ね下  
されたく、孔明が三分の謀は御座なく候ふとも、足  
を常腹に加へ候誰やらが、鯉魚ねの愉快を共に致し

申すべく候。』

我が廣島中學校は、生徒六百を有せる大校なれど  
も校舎の陋隘なること、到底、お話には相成らず、  
書なほ暗きトンネル敷場、腦膜炎の小供の様に、  
頭の開いた廊下など、名所の多いことは海内一かと  
存じ候。これを思へば、御校などは勿體なき程に御  
座候。されど、何しろ、年々の志願者、六七百名よ  
り多きは八百に上り、八十點以上を得るにあらざれ  
ば、入學し得ざる始末に候へば、生徒の學力は、概  
して、優秀に御座候。猶又、生徒間に自治の美風の  
比較的發達せることは、或は、誇りとすべきことか  
と存じ候。生徒の互選せる生徒總代は、非常なる熱  
心と勇氣とを以て、よく生徒を統率して、學校の命  
令を實行し、學校の精神を奉じて、校風の振興を圖  
り居り候。されば、その成績の見るべきものあり、  
例へば、服裝の如きも、和服などは全くこれなく、  
嚴冬にも外套を著けず、酷暑にも麥稈帽を戴かず、  
懦弱の風の吹きすさめる此の廣島の一隅に、よく、  
剛健の氣風を維持致し居り候。彼の、徒に、時間の  
値ざりこざりのだしにつかはれて、能事をはれりと

するが如き世間一般の生徒總代なるものは、大に、  
鑑る所あつて然るべきことと存じ候。甚だ手前味噌  
のやうには候へども、他山の石といふことも候へ  
ば、敢へて申し上げ候次第、あしからず思召の程願  
ひ上げ候。』

玉木正行君は、今春、當地高等師範學校を卒業し  
て、直様、我が校に就職せられ、英語を受持ち居ら  
れ候。佐伯益豐君は、外國語學校を卒業して、先  
月、本市なる縣立商業學校教諭に任せられ候。これ  
亦、玉木君同様、英語にて、我が校中學校卒業生三  
人が、當市の縣立學校に奉職致し居るわけに御座  
候。小生の如き、兩君とは、丸て毛色はちがひ候へ  
ども、三人、揃ひも揃うての大兵にて、やがては、  
乾坤一擲、廣島の天地を震撼せしむるやも計りがた  
く、愉快に候。』

談は多岐にわたり候へども、寺田林市君の遠逝は、  
誠に、氣の毒の至りに御座候、君、農科大學實科に  
ありて業未だ成らざるに、昨夏、病を得て、小畑に  
歸臥せられ候。げに、顔色憔悴形容枯槁、一年前の  
君が體は、いかに、これを見ること能はざりしに



は、小生、窃に、君が運命を悲しみて、同情の念を禁ずること能はず、唯、常に、「天道いかてか君の如きに禍せむや、安心したまへ。」とのみ慰め居り候ひしに、遂に、三月二十日、はかなくなられ候は、今更、愚痴とは知りながら、天道の正邪を疑ふばかり、痛哭無限に御座候。』

### 三池炭坑より

會友 加藤保一

拜啓、新緑漸く杜鵑の聲を洩らす好期、校友諸君には、定めて、御勇健御勉勵の御事と存候。扱て、校友會雜誌御發行の報に接し、懐舊の念、止めがたく、緑深き指月山影なるかの白壁いかめしき母校を出てしより、既に、一星霜以上経過致候。小生は母校を出てしより、懐かしき山水を後にして、身を工

業界に投じ、當三池炭坑に入り、無事勤務罷り在り申候。我國工業漸く發達する今日、三池も次第に擴張せられ、尙、數年前より工事を急ぎし築港も、略ぼ整頓いたし、明年中には落成する事と存候。關西にて一二を争ふ位なれば、中々盛んに御座候。何れ竣成の曉には、九州の商勢に一大變を生ずる事は朋かに御座候。築港の面積は外港、「一五三、五〇〇坪、内港」四〇、〇〇〇坪、埠頭一、三〇〇呎、水の深さ「三三呎」に有之候。炭坑は六ヶ所にて、宮浦坑、大浦坑、七浦坑、宮原坑、勝立坑、萬田坑で、萬田坑は肥後國に有之候。毎日の出炭三千噸以上に上り候。此等の石炭は、やがて、新築港から海外に輸出せらるゝやうになり、非常に便利と相成り申すべく候。之れがため、大牟田町も、日一日と盛んに相成り、數年の後には市制と相成る事と存候。尙外に面白い事を通信致度候へども、事務多端にて、此度は此で失禮いたします。校友諸君に宜敷。草々。

### 熊本縣より

會友 山田藤助

### 札幌より

札幌農學校豫修科 石津半治

萩中學校四百有餘の舊友諸君には、指月の麓阿武のほとり平和に幸福なる學窓に、御健全て學校に勵み勉められつゝあること、思う。校友會より何か雜誌に投稿せよとの書面を戴きましが、生は元來不文で而も無經驗な青二才である、それを別に申し上ぐる程のこともないが、札幌へ来て札幌農學校に學んで自分の得た利益を一つ二つ申し上げて、茲に遊ばんとする諸君に何かなすことが出来れば幸と思ふ所である。

諸君に申すまでもなきことながら、何卒諸君は常に奢侈は我々の最大の敵なることを記せられ、又早く豪傑を氣取ることなく、學校時代は矢張り學課を第一の樂しき義務とせられむことを希望致候ふ。志賀矧川氏も曰はれし如く「これからの人間は躰は仁王の如く腦は電線よりも複雑に且つ緻密に而して禮容を重ぜざる可らず」と存候ふ。漫言多謝。

併し諸君の御承知の如く、我札幌農學校は今年九月から帝國大學となり、之れまでの豫習科は大學豫科即ち高等學校二部乙となり、尙その外に専門學校程度の農學實科、林學科（何れも駒場大學の實科の如きもの）と土木工學科（高等工業學校の土木工學科の如きもの）と、今年新設された水産學（之の中に漁撈科、養殖科、水産製造科と）があつて、單に札幌農學校と云つても中々複雑である。自分は茲に札



幌農學校の各科について述べないこの事は他日機を見て述べることにせう。

崇高な指月の山、神々しい阿武の流は過去幾多の偉人を出して明治の政治界、陸海軍社會に大いに振つたが如く、曠蕪たる石狩の原野、巍々として立つて居る羊蹄の山、洋々として流れてをる石狩の水、雲を凌ぐ様でノーブルなエルムは又ノーブルで且つ紳士的（真正の意味に於ける）の人傑を生まざるを得ない、實に我が校の歴史は之を證して居ると思ふ、無論札幌は近寒の土地冬中は石狩平野を通じて雪の世界で時には乾坤を一吞にせんとする様な吹雪がある、併し札幌の冬間は學問修練の好期である。冷靜な頭惱、集中的のメンタルを養ふには、我國他に見ることの出来ないカレージタウンである、尙冬氣外部とは全く交通絶えて讀書が出来る。外は吹雪で氷雪煙の様に空中に躍てをる、そのとき内にはストーブを圍んでガールイルなりゲートルなり湖畔詩人なりの高遠の思想を味ふことが出来る。然るに札幌の冬氣が人の軀軀を萎縮するとか、又腦漿を凍結せしむるとかそんなことを考へるのは、餘りに意氣

地がない様に考へられる。

雪漸やくとけて鹿子またらの間からクロバリの翠加はりて、冬の單調は春の女神の行列と共に消え行き、野はタンポポで黄金世界となり、森には鶯郭公が相應じて自然の調和をなして歌つて居る、かくなつては朋亂を提げて休みの一日を採集に出かけるものもある、タンポポ、クロバリの上仰いて蒼穹を見ながら詩集を繙くものもある、又單に杖曳いて森深く分け入るものもある、この楽しみは北海に學ぶもの誰も得るところの一大慰藉者である。

札幌に學んだものが何故かく自然に近よるかと云ふに、實に我が札幌農學校の空氣が新鮮で潔白で自然で自由で又高尚であるからである、この精神即ち札幌農學校學風である三十餘年の昔、トクトルクラーク氏が最後の訣別である Boys be ambitious の一語は我が校の理想である。我が校はあくまでアマビシヤスで、自由で大陸的で獨立的で紳士的で又積極的である。之が證には我が校には保證人なるものは斷然廢されてをる、學生は一個のヤングセントルマン（真正の意味に於ける）と見なされてをる、實に

無闇な束縛はない、無意味な制限はない、而も校風は廢れることなく尙依然として北斗星の天の一方に赫々たるが如く我が校は北海の一方に照々たるものがある、かくの如き校風を有してをる生徒は遂に自然に交る様にならざるを得ない、又社會にも交はつてアマビシヤスである活動的である、即札幌の自然の興ふる教訓が札幌農學校の校風である、札幌の自然は校風そのものである、學生には遊惰三昧を競ふ義務的教育を取るものは少ない東都に見る様な墮落書生は殆ど見ることがない、皆高尚な理想を有して濁々たる中屹として天下を睥睨してをる觀がある、これ我が校の卒業生が普通の百姓にあらずしてどこかに美はしい趣味を有してをる所以である、實に我が校の精神は活きたセントルマンを作るそれである。』

今や農業の範圍漸く廣からんとして、實際的人物を要して居ることは社會の趨勢である、鐵を取り牛を追ひ又は未開の地に行つて國を富まし世界を富ますんとするの士、來つて茲に學び茲に修養し茲に鍛へて、卷き來る濁浪中より免れ今世界が要してをる活きたセントルマンたられんことを願ふのである。』

### 慶應義塾

會友 根來 仁藏

目下私立大學多しと雖も其組織完備し、單に智識の開發に勉むるのみならず人格を修養するに勉むるは實に慶應義塾を置きて他無し。帝國大學をフックスフオード大學に比すれば、義塾はケンブリッジ大學にして互に文學上の二大明星なり。過去五十年間思想、産業、政治、生活等世に貢獻したる程度は帝國大學に勝ると云はざるべからざるなり。

從て義塾特有の長所とする所頗る多し、即ち義塾には別に規則なく只故福澤先生以來の名教修身要領と稱する寶典を基として専ら人材修養に務む。塾生の腦裏は常に此の觀念に満ち若し此の觀念にして腦裏を去れば是と同時に慶應義塾々生たる名譽ある資格は消滅するなり。故に自由平和の氣風求めずして校内に満ち渡り、幼稚舎より大學に至る迄互に相尊し相愛撫して五千人恰も一家の如し。



次に運動は東洋の霸王と稱し其の他圖書館演舌館消費組合等皆其趣を異にせるものなり。是等は漸次號を追ふて照會せん、先づ義塾歴史的位置に就て一言せん。

慶應義塾が如何なる時世に開創せられ又如何なる時代を閱歴し來りしかを思へば、其歴史は實に明治史と相表裏錯綜すと斷言して疑はざるなり。義塾は安政五年の創立にして、海内の人心恟々として其堵に安ぜず、四海革新の氣蓬々として我國を襲ひ、時に或は一二の西學者泰西の文物を入れ國家改造に意を注ぎたるものもあるも嘲笑譏誣の内に失敗し其の意を達せず。其時に當り人傑故福澤先生は出群の見識を以て本塾を創立し、大膽に勇敢に維新の變動に處して泰然として講學を續け、砲聲の内に一日も啞喑の聲を絶ちしこと無く専心泰西自由の教育を宣傳し、以て絶望的革命を導きて希望ある革命となすに力ありて大なり、若し不幸にして福澤先生無かりせば、維新以後の國狀は如何なりしか想像すべからず、即ち舊思想と戦ひ政治的自由社會的自由及新生活の宣傳者となり、憲法國會自治制度の基礎を作り、明治

十七年頃以後は國權論の首唱者となり、二十年以後は教育ある人格ある實務家を作るの温室となれり。安政五年始めて鐵砲洲に學塾を開きしより今日に至る迄、教育界の先導者となり、一萬餘人の人材を出し、自由生活の有る所、新事業の經營せらるゝ所、自治制度のある所義塾出身者在らざるはなく、而して其人皆福澤先生の教に則り獨立自尊の民として、國家に寄與するを理想とせざるもの無し。故に慶應義塾は單に一つの學風を起したるのみならず。氣品の泉源智徳の模範となりしのみならず。實に近世史に一時限を書し赫々たる光を放ちたるものと言ふべきなり。

### 慶應義塾體育會に就て

會友堀 思影

義塾體育會の組織的に設置せられたるは近年のことなれども、其の歴史を尋ねれば頗る古きものあり。即新錢座時代に於て運動としては只に「ぶらんこ」のみなりしも、其後三田に移るに及び「ぶらんこ」「鐵棒」「シローリ」等を造り、又或は市中より馬を借り來り

て師を求め大に馬術を練習し、又一方に於ては劍道柔道を學ぶに至り、其他各種の運動法を工夫して熱心に體育に勉めたり。明治十年頃に至りては柔道を習ふもの多く、劍道と相並びて殊に盛大となり他の運動は漸時衰へたり。其の以後明治十七年頃には「べいすぼーる」始り、生徒の組織せる端艇俱樂部興る等、生徒の體育に力むる者非常に増加せしかば、義塾先輩諸氏及び當局者はこれを組織的に統一するの要あるを感じ、遂に明治二十五年五月を以て慶應義塾體育會を組織し、福澤捨次郎氏を會長に推し、現在の劍道、柔道、野球、端艇の、各俱樂部を體育會の下に集合統一し、新に弓術、操練、徒歩の各部を設け、生徒よりは一定の體育會費(一學期間一圓)を納付せしめ、幾種なりとも其好む所を選択せしめ、各部には部長幹事ありて其の事務を處理す、近年に至りては庭球、フットボール、水泳器械操の各部成り、今や體育會は將に完備の域に達し、義塾の中堅は體育會に存するに至れり。左に順を追うて各部の概略を示さむ。

一、劍道部、明治十一年創始、部員百餘名、師範は神

道無念流佐藤義遵氏

- 二、柔道部、部員約四百名、(三段二段初段のも二十餘名、有級者八十餘名)師範は講道館流五段飯塚國三郎氏
- 三、野球部、明治十七年始、部員百五十餘名、
- 四、端艇部、明治廿二年始、部員千三百餘名、
- 五、弓術部、明治廿五年始、部員二百名、
- 六、庭球部、明治卅四年始、部員二百餘名、
- 七、蹴球部、明治卅二年始、部員百五十名、
- 八、水泳部、會場は相摸國葉山、師範は神傳流佐藤氏
- 九、器械操部、部員百五十名、

其外寄宿舎中の好角家は、一時常陸山を師範とせしも今は稍衰々たり。

編者曰、此編は記述詳細なりしを紙面の都合により節略す。諒焉。

### 俵瀬

會友西山春醉

私は卒業後一年間ほど、大津郡川尻(捕鯨地として



名のある)といふ所の小學校に行つて居ましたが、その間には隙をうかゞつてはあちこちと、その地方を遊びまはりました。中でも油谷島の俵瀬といふ處を見に行つた事がありました。此處は向津具半島が、ずつと西に向つて日本海中へ突出してゐるその西端に、ほとんど越ヶ濱地峽を見たように、(あれよりは、まだ幅がせまくて長い)地峽でつゞいてゐる、即ち、油谷半島(油谷島ともいふ)の、そのまた西南端、日本海に面して、俵島といふ小字があります。その海岸にある、島と云へば島、瀬といへばあまり小さくない位な即ち島です。こゝは潮が干て居れば、徒行せられます。規模はあまり大きな處といふ程ではありませんが、こゝの一番價値のある奇妙なといふのは、島の岩石がみな米俵を積み重ねたやうな形をしてゐると云ふ事です。これは水成岩で、それが水蝕作用のどうかに依つて、つい出来たものだといつてしまへばそれだけの事だけれど、中々に奇妙優雅なものです。次によいと云ふのは、沖には渺々たる日本海をひかへて居り、かなたには角島が蜿蜒としていて、其の燈臺は手にとるが如くに見

られ、こなたには油谷島人稀に際して、名を知られるようになったあの沖の島は、波濤の中に淡く孤立してゐるのです。岩根の松の木陰などに腰うちかけてやすんで居れば、丁度大國様の繪でも見るやうです。また釣をするにも至極宜いのです。魚類も餘程多いのです。惠比須様のその磯です。して見ると、こゝは規模こそはあまり大きくはなけれど、詩的にも通俗的にも至極い、所です。

私は、こゝを見ることが出来たのは、こうです。或日、村別集會(毎月向津具村の教員が、順番に各小學校に集つて會議をするのです)が、この油谷島分敷場で行つたら、必ず一寸でも俵瀬だけは、見に行かう。」と、こゝいひつゝ、會場へ向つたのです。そして晝食後の休み中に、私は他教員と共に、先づこの地の最も高い山に登りましたが、こゝも眺望が非常によいので、つい時間を費したので、俵瀬は目の下にあれど、時間に心を引かされて、止むなく、人々は名残惜しげに山を下りましたが、私は一人後に、

のこつて寫生をして居ましたが、つい今から思へばあまりよい事ではありませんが、まあ、集會の方は一足後れても、折角に思ひこんでゐた俵瀬を、一寸なりとも見て置きたいものだといふ心が、むら／＼と湧きてたので、前後も考へず、けはしい、道といへばあるかなさかの、初めて通る、案内も知らぬ處を夢中で一走りに、とう／＼行つたのですが、何分後が氣にかゝるので、ゆつくりとは遊ぶ事が出来なかつたので、實に口惜いのです。

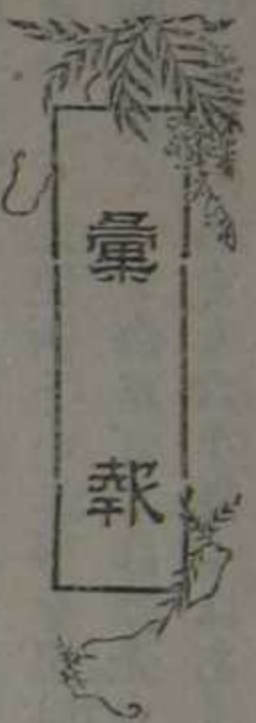
こゝに私は、一つ感じた事があります。一昧で土地柄と風景とは非常に關係のあるものです。文人詩人が濟勝の具で、しかして悠悠世路にかまはぬ人ならいざ知らずですが、吾々如きものには、土地柄が風景に密接な關係をもつのです。

見たまへ。川尻で「俵瀬へ遊びに行かう。」と云へば大抵な人は、業務に急とは言はずして、「油谷島かあ」と二の足を踏むのです。これはどうでせう。外ではありません。土地柄といふ事を思ひ副へるからです。俵瀬へ行くに、海路ですれば先大津あたりから、便船ですればあまり六ヶ敷くはありませんが好

便利とは言はれない。陸路をとるならば、角山路とてよくない道があります。それから一應川尻へ出るか、又はすぐ行くかの二路がありますが、どちらにしても路はよくありません。山路です。山越の小路です。まづ二峠ほど越して、初めて大浦といふ處まで行きますと、さあこれから前よりも一層難路悪徑です。苦は樂の種蒔とあきらめなばそれまでの事ですが、大抵はそう得あきらめんのです。二の足を踏む。同村の人すらかくの如し。ましてまだ踏みなれぬ他郷の人では、土地柄を聞いては大抵はがっかりするのは當然です。昔日交通機關が不備な時代でも、風景はやはり愛でては居たが、あの江の島、須磨、耶馬溪などはどうです。今では交通機關がよく備はつて居るから行き易い、したがつて遊覽者も多いのです。今日では菅笠の風流家は少ない。して見ると兎に角土地と風景とは關係が深いのです。

向津具半島も、遠からず交通がよくなるをうです。諸君も遊びに行つたらいいでしょう。





### 恩師の送迎

○横田慎治先生、昨年六月、英語科教員として來任せらる。先生は又講道館柔道の達人にして、囑により柔道の指南に當りて、銳意盡力せらる。我校が先生に倅つところ豈夫尠少ならむや。

○河野厚造先生、三十七年十二月以來、國語漢文科に教鞭を執らるゝこと茲に二個年、常に懇篤に熱心に教授せられしものを、且文藝辯論部長として、頗る斡旋せられしものを、今や去つて廣島縣廣島中學校に榮轉せらる。ああ、されど先生は故郷を見捨て給はじ、我等が祈れるが如く、近き將來に於て温容に接するを得べけむなり。

○上原勝之進先生、昨年十一月、國語漢文科科教員として就任、熱心に教導せられつゝあり。

○エム、モッサ、スマイザー先生、三十六年四月

○吉田六造先生、三十八年十月以來本年三月まで、體操科教員として、且舎監として、秋霜肅殺の嚴正と春風騷蕩の温情とを以て、専心教養に盡力せられたり。その功其勞永く忘るゝ能はざるところ、而も尾道商業學校に榮轉せらる。誰か惜まざらむ。

○金子乙助先生、本年四月、國語漢文科科教員として就任せられ、勤勉と懇切とを以て、日々教導の任に當らる。

○藤井百輔先生、先生は三十三年四月就職せられて以來茲に七葉葛、終始一日の如く、諄々懇々、薰陶せられたりしを、今や雄圖渡韓せられむとす。我等の不幸喩ふるにも無し。然れども先生は國家の爲大に韓土に經營せらるゝに至りては、慶賀せざるを得ざるなり。唯我等は先生の鴻恩を永く記すると共に、本校に盡されたる功勞を空しくせざらむ事をつとむべし。先生の別辭の要旨は左の如し。

これまで多年親交を重ねたる諸子と別るゝは、余の最悲しむ所なり。されど更に長教師を得て充分勉強あらむことは大に希望する所なり。余は嘗て數々諸子に向つて言ひし事あり。「國家の向上發展は、單に内地に於てのみ企圖すべきにあらず。且國家の富強を致すは、先國民各自が富強ならざるべからざる」事を。是即今日

以來最忠實に最熱心に教授に従事せられたるのみならず、青年學生の精神を修養し、操行を善良ならしめむと盡力せられしを以て、職員生徒一般に深く信頼する所なりしが、今度大阪高等商業學校に聘せらるゝ事となり三月九日其告別式を行はる。席上氏は滿腔の熱誠を注ぎて別辭を述べ、繼ぐに涙を以てし、大に感動を與へられたり。別辭の大要を譯出すれば左の如し。

本日は余にとりては甚悲しむべく、且甚喜ぶべき日なり。何となれば今日は數年間親交を重ねたる諸子と一堂に相會する最終の日にして、將に相別れざるを得ざるを思へば、何となく惜別の情に堪へざるものあり。されど又願みて諸子が新任の長教師を得らるべきことを思へば、諸子の爲に賀せざるを得ざればなり。余が在職の間諸子が能く忠實に勉強したるは、余の深く喜ぶ所なり。新任の長教師を得ば、益奮つて勉強せざるべからず。特に諸子に向つて誠實に注意すべきことは、「惡をなす勿れ、當になさざるのみならず考ふる事なだにも爲すべからず」といふことは是なり。諸子は夫に心身を修練せむことに力めよ。即身體を強壯ならしむること、精神を健全ならしむること、感情を純潔ならしむること等なり。余は此地を去らば、當に大阪に在るべし、諸子が若も大阪を通過することあらば、余を訪問せよ。余は實に歡びて諸子を迎ふべきなり。

の識をなしたるものか、余は茲に海を渡りて或事業を爲さむと企てしが故に、別離の已むを得ざるに至れり。云々、

○高田徳佐先生、三十八年四月就職せられて以來二箇年間、理化學に教鞭を執られ、機械藥品の整理より生徒指導に至るまで、専心一意其任に當られたれば、我等は永く先生の恩に浴せむと願ひしものを、本年四月去りて先生の郷里なる石川縣立第一中學校に榮轉せらる。あゝ、再、先生の嚔咳に接するを得むは果して何の時ぞ。

○溝部壯六先生、本年四月、體操科教員として就職せらる。先生は曩に本校の爲に盡瘁せられしが、三十七八年役に遠く異域に轉戦せられ、平和克復と共にめてたく凱旋し給ひ、これまで濱田中學に教鞭を執られしが、今日再び先生の薰陶に浴するを得るは、我等一同の悦に堪へざるところなり。

○井上大九郎先生、三十八年四月數學科教員として就職せられし以來、二十有五箇月、温和の資を以て懇篤親切に指導し給ひ、我々は日に日に其教を仰ぎしに、本年五月、命によりて長崎縣立諫早農學校に榮轉せらる。巴城の風物亦惜別の情あるに似たり。



○安藤秋士先生、本年五月、物理化學科教員として來任、六月一日より熱心に教授の任に當らる。  
 ○津田末吉先生、本年五月、數學科教員として就任、六月一日より親切に教導せらる。先に恩師を失ひたる我等の心緒は述ぶるを得ずといへども、而も今此處に新に諸先生を迎へたるは我等の幸福なり。今より大に勉めむかな。

### 有地中將の來校

明治三十九年五月、海軍中將有地品之允氏は義勇艦建造につき、勸誘の爲、來萩せられたるが、青年學生に海事思想を養成せしむる必要ありとて、特に本校に於て一場の講話をもせられたり。實にや四方環海の我孤島、海にあらざれば戦争し能はざるにあらずや、海によらざれば商業の發展も望むべからざるにあらずや。當時有地中將の演説概要を記すれば左の如し。

比較的海の少き獨逸の皇帝さへ、「吾人の將來は海にあり」といへる位なれば、吾人は海につきての知識を有せざるべからず。しかも我が國人は二十年前までは、海軍のことさへ知らざりしほどなり。

わが義勇艦は、三千噸、二十一哩、六吋砲入門といふ艦にて、タリリン式の機械を備へつけ、戦時に有用なるものにして、その價百二十一万餘圓、二十三ヶ月の豫定を以て、三菱にて造船中なり。竣工の上は、臺灣航路に用ゐることとなり。日露戦役には、商船を以て、假裝艦となし、世間には、義勇艦を造る必要なしと考ふるものもあれど、それは、大なる誤なり。海上捕獲をなすにも、信號の後には空砲をはなち、更に、前方を射撃する等のことあり。しかるに間に合せの船にては一度發射するときは、甲板は漏り電燈は障礙を蒙るに至る。その他燈火の装置より、機械居室等に至るまで、皆不利不勝手のみなり。わが義勇艦は、これらの經驗により設計したるものなり。日露戦役に於ても、十七八の假裝艦を造りて浦鹽方面のみにも、六十の密輸船を捕へたり。これにても假裝艦の必要なることは明なるにあらずや云々。

### 滿韓修學旅行

東亞風雲の來往するところは滿洲にあらずや、憐々庇護を仰ぐものは韓國にあらずや、我國民にして滿韓の野に大に畫策するところ有らむは、單に快心の業たるのみならず、又以て當然の本務たるべきなり。況して、再度まで數萬の同胞が誠忠の血を流したるに想ひ至りて、轉、感慨の禁する能はざるに於ては、一度彼土に入りて地形を視、同胞の英魂を弔はむし、

爾來海軍はやゝ進歩したれど、なほ郵船會社の十二隻と東洋汽船商船兩社の一部の外、信用して乗るべきものなき有様なり。政府の有する海軍を擴張すればとて、海軍國といふべからず、平時營利のために造船するものにては、有事の際に際しては、進んで補助すべし。今七強國中にて、補助艦を有せざるは我が國のみなり。これ海事思想なき證なり。元來商業を營むには、船によらざるべからず。船は水のある限り、吃水の許す限り、いづこまでもゆかべし。船の運賃は莫大なるものにして、開戦前七千萬圓の正貨輸入中二千萬圓は、運賃として船によりて得たるものなり。又開戦の初において、敵を旅順に入れて、海上權を我が手に入れ得たるも船舶の力によりてなり。今日は平和の時にして、經濟上の戰は益繼となりつゝあれば數萬の命、十八億の金を投じたる利益は今後に於て收獲すべし。戰の準備は平常にありて、一旦有事にありては、これを使用するを原則なりとす。諸子は、學校の規定に従ひて、大なる準備をなし居らるゝことなるべけれど、海事思想は必有せらるべきなり。

さて、海事と輸出入額とは、常に并行するものなり。英國の高船は、他の六國の合計よりも大にして、輸出入額は、他の六國の計に近きは、よき證なり。我が國よりも小なる面積の國民がなす事業にしてかくの如し。我が國民として出來ざる理なければ大いにつとめざるべからず。我が海事の進歩も、この十年間に、他國に劣らぬ度を示したれども、なほ、微々たるものなれば、今後大に進歩せしむべき吾人の責任や大なりといふべし。

思ふこと、是國民の至情ならずとせんや。明治三十九年七月廿八日、其筋の許可によりて、本校生徒若干名は、井上教諭引率の下に征途に上れり。旅行人員甚多からずと雖、數の多寡は壯圖たるに於て、何等の障害をも與へ得ざる所なり。かくて千山萬水を跋涉し酷暑と戰ひて、めてたく歸校せられたるは、八月廿九日の事なりき。第五年生徳富周平君の如きは、病氣と洪水との爲、諸處に轉々して、遷延、異郷に時日を費し、越えて九月歸來せられたり、其勞苦察すべし。九月廿九日、井上先生の滿韓旅行談あり。概要如左。

滿韓地方は日露戦役の結果として大に我勢を發展したる地にして、將來我國民はこの地の經營を充分にせざるべからず。文部省は茲に見るところあり、本年の夏季休業を利用して中等以上の職員及學生をして旅行せしめ、その地の智識を得せしめんと欲し、陸軍省と交渉の上、陸軍省所屬の流車及流船に無賃便乗を許すこととなり、日々の食料は實費にて支給することとなり、文部省は各府縣諸學校にその旨を達することとなりぬ。余は夙に機を得て滿韓地方を旅行せんと思ひ居りしかば、好機失ふべからずと、直に旅行を志望したり。本年の渡航者は三千五百の數を五回に分つこととなり。余は第五回七月二十九日宇品發の琴平丸に乗じ



て渡航することになりぬ。

七月廿九日午前二時萩を發し、小郡驛にて流車に乗り下ノ關に着きしは午後三時なりき。この日炎熱熾くが如し。滿韓地方は内地よりは炎熱激烈なりといへば、今より前途のこと思ひやられて途中病氣に罹るやうなることありてはならずと、これぞ念頭にかゝるもの一なりし。この地にて山口縣學生團體四十八名一部隊となりぬ。

七月三十日正午、門司港碇船中の琴平丸に乗る。船中にて島根鳥取二縣と山口縣と合して始めて旅行一團體を編制し、山口中學校教諭安江豊太郎氏團長となられぬ。

同日午後三時拔錨、大連に直航す。玄海洋上月清く波靜かなれど船體の動搖は稍甚しく、多数は船暈にかゝれり。夜の中に玄海洋を過ぎて船體の動搖全く止む。これよりは航海大に愉快になりぬ。朝鮮南岸の島嶼の景色瀬戸内海の景色に劣らず。

八月一日午後四時大連に着く。これより旅順に行く、奉天、鐵嶺に行き、鐵嶺より引返し、遼陽より營口に、營口より金州に行く、この地より龍樹屯を経て大連に行き、大連に於て八月十八日乗船歸航す。これ旅行に定められたる順路なり。金州に於て山口縣團練二分して一は豫定の順序に従ひ、一は金州より更に韓國に向ふ。余は韓國に向ひしもの一なり。金州より奉天に向ひ、奉天より奉安鐵道と名くる輕便鐵道により、安東縣に赴く、安東縣より鴨綠江を渡り、平壤、京城に行く。京城滞在中仁川に赴き、釜山より關釜の間を連絡する山陽鐵道の汽船に乗り下ノ關に上陸せしむ。

韓國に入れば平壤、京城、仁川共に我國の勢力の充分に扶植せられ滿洲に於ける状態とは大に反せるものゝ如し。釜山にては市街を見ず。

終に一言す、旅行中鐵嶺に本校卒業生にして同地守備隊として駐屯せらる歩兵少尉前田正敏氏あり、京城には本校卒業生にして菽地出身の實業家として成功せられたる宿屋巴城館主人松木民介氏あり、共に余に旅行中多大なる便益を興へられたるは大に感謝するところにして、本校の卒業生が如斯社會の種々なる方面に活動しつゝあることは余の大に愉快に感じたるものなり。

### 瀧口代議士の視察談

代議士瀧口吉良氏は、上記井上先生と共に、滿韓視察談をものせられたり、これも其大要に止むべし。

釜山に上陸し、大邱、京城、仁川、平壤、義州、安東縣、奉天、營口、旅順、大連を経て、飛脚的に旅行し歸りたり。その間、視察したる所を、つぎはき的に話したすべし。

釜山は、殆ど我が内地と同じく、本邦人の居留するものも多く、對州の福田といふ人、この地にて、最成功せり。こゝにて、糯米所を觀たるが、その土砂をえり出すこと極めて巧妙なり。朝鮮米は、世評ほどに不真なるものにあらず。唯、その、取り入れの法の粗雑なるが故に、土砂を混ざること多し。地主と小作人との收獲の分け方は、年々、その收獲に應じて、これを分つ定なれば、殊更に、粗雑にして、藁の端、庭の隅に、餘分の利得を残しておく。

八月二十五日午前八時なりき。この地に於て旅行團體は解散せり。右は余の旅行せし順路を概説したるものなり。約四週日の旅行稍得るところありたることを信ず、今その要を摘みて語らむとす。

滿洲地方の雨期は已に去り暑熱は豫想せし程に甚しからざりし、旅順に於て少時の暴風雨に遇ひ金州にては一夜半日大豪雨に遇ふ、これぞ有名な覆盆の雨ならむと思ひたり其狀中々に物凄し。砂塵咫尺を辨ぜざると聞きしが旅行中幸に大風なく歩行に困難を感ずる程の砂塵に遇はざりし。韓國にては暑氣は已に去りたる後なりとて京城滞在中雨天ありし時の如きは全く内地の秋の模様を表はし冷氣さへ感じたり。滿韓地方の氣候は晝夜によりて冷熱の差甚し、これ内地人の大に虞るところなり、されど余には夜に入り冷氣を感ずること就眠に快感を興へたり。

滿洲には内地人數多移住せるも大連、旅順を除きてはその數多しといふこと能はず。大連、旅順には露國の經營になりたるもの尙その跡を存し、規模宏大なる建物數多あり。今日我國にてはそれ等の建造物を利用する途なきに苦しめるものゝ如し。奉天は盛京省の首府、我國の總領事館もこの地にあり、繁華の府なることを認む。鐵嶺、遼陽は共に戰役の痕跡を存するもの多し。營口は滿洲に於ける商業繁華の地、この地には歐米人も營業するものあり、我國民が實業上の手腕を滿洲に奮はんとするにはこの地に於て、大に他國民と競争せざるべからず。金州は秋より遙かに寂しきが如し。安東縣の日本新市街地は全然内地と異なることゝなりし。

習風あり。これ、かの米に土砂を混ぜる一因なりといふ。大邱は、前朝の都府にして、市街の不整なること甚し。これ、この地の俗として、空地に一定の制限なく、己れの欲する所の地を求めて、やがて、家を構ふればなり。此の地の監察使を訪ひ、飯田警務顧問に面會して、監倉を一覽したり。四方をぬりつづし、僅かに、光を入れたる八疊ほどの室に、七八十人の囚徒は、膝を立て身をすくめて雜居せり。そこに、一々罪名を書きつけられたるに、死刑といふも數多かり。中に、四十五六の惡相の男は、古來、葬禮を重ずる此の國の風を利用し、富家の墳墓を發き、首をとりて、それを、金と引きかへむことを申し込みたるなりといふ。かくの如き罪人は、世界の他の邦にては、容易に見らるまじきなり。死刑と定りて、猶、處置せられぬもの四十人もあり。飯田氏に聞くに、此の國の法として、死刑は皇帝の批准なかるべからず。然るに、皇帝は、容易に批准せられずして、かくは遲滞するなりと。絞刑を行ふには、監倉の後にある立樹に横木を構へて、用すなりといふ。京城は、内地と同じものを陳列せるさま、恰、名古屋あたりの市街を見るが如し。京城にありしとき、一進會の首領ともいふべき宋秉岐は、余が巴城館なる旅寓を訪ひ來れり。一進會は、今や、七八十萬の會員を有し、各地に支部を設け、一令の下に活動せり。悶悶鬱鬱ある老人を首領とすれども、かの宋秉岐が、黒幕となりて、これを率る居るなり。彼は、七八年も萩地にあり、野田平次郎と稱したりしものなり。京城には日本人俱樂部あり、此の會に集る邦人は、何れも三國の語に通ぜりといふを聞きて、心



強く感じたり。  
ソシヤの農場を訪ふ。中村正路君の主唱により、日韓人合同して組織せらる。十二三町歩もありて、菓物蔬菜を栽培せり。此の地の松田正一君の如きは、一家、此の地に移して、農場の事業に従事せらる。は、美譽なりといふべし。これより、大に開拓し、進んては、養蠶傳習所をも設けむと企畫せり。將來、極めて有望なり。

平壤は韓國の一大雄鎮にして、近時、大同門より、大同江を横きりて、巧なる一の船橋を架したり。これは日本人の手に成りたるものなり。牡丹臺に行かむとて、たち出づるに、道すがら、崖を見るに、この地の監察使の頌徳の文字ども、しきりに、彫りつけらる。そは、監察使自身が、壓制的に、かくせしめたるなりとは、抱腹の至りなり。川を上り行く舟あり、白装の婦女のうち突りて、何やらん、樂を奏せり。その音、絶えざること樓の如く、人をしめて、眞に亡國の音たるを思はしむ。さきに、遊歐の詞、和蘭の樂の、小弱國たることを感ぜしめしことありき。かれとこれと、げに、小弱國の音樂の、いかにあはれなることよ。乙密臺の下に至るに、臺上遙かに、日本の衛兵の軍歌を唱ふるあり。後、露店に陳れたるもの一切を買ひて、これを購ひたり。奉天にては、宗廟を見たるに、その大理石の石階、玉座、寶物の短刀二口の、各、ダイヤモンド三百を鑲めたるなど、いづれも目を驚かすに足れり。文淵閣と題せる圖書館は、今日は破損したれど、その圖書の保存の、よく行き届けるなど、歎稱に値するもの亦多かり。

徒職員式場に着席、次に來賓岡村中將、粟屋少將、室田中佐、外海陸軍將校、山根代議士、藤富郡長、安藤判事、中田署長以下四十餘名の着席あるや、羽石校長は擧式の挨拶をなし、續いて本校の經歷由來を述べて式辭とし、次に山根代議士登壇、得意の體育奨勵演説あり。式了りて順次退場、休憩所に於て來賓に茶菓の饗應あり。後擊劍道場に於ては紅白兩軍八組の勝つぎ試合をなし、柔道場に於ては同様の仕合あり、最後に選手石光憲、佐々木四郎二名にて、講道館柔道なげの形を演じ、全終を告げたるは十一時なりき。

なほ同日は、理化學器械地理歴史博物等の標本類、及生徒成績品を陳列して、一般來觀者に縦覽せしめたるが、各室の入口に、生徒自作の緑門ありて、種々の扁額を掲げ、廊下には紙製の旗造花等を、隈なく飾りつけ、頗壯麗なりき、上級生は各室看守の任に當りて怠りなく、或は機械を運轉して示すもあり、標品につきて説明の勞を取るもあり、諸般の設備、全く整ひ、專縦覽者の欸待に努めたりき。當日式場に於ける山根代議士の演説概要左の如し。

さて、韓滿に對する急務は交通機關の完成なり。韓國に於ける鐵道は、平壤若くは京城より、元山に至る線路は、軍事上水産上其他の點より必要なるものにして、一日も速に開けむことを望む。猶この線路は、平元を聯絡すること必要なりと余は考ふるなり。韓國にては、溜池だに造れば水田は得らるべけれど、畑及牧場にても有望なるものなり。總作にても今後十年を期して、四十萬町歩を得べしといへり。歡迎する中農なり。

次に、警察制度の完成を行ふべし。一般に賄賂公行して、人民は餘炭に苦しめるが故に、之を救ひて、安全に保護するは急務なりとす。衛生のことは今や緒につき、教育は教員缺乏のために、邦人の教育だにも支障を生じつゝあるほどにて、韓人の教育には、猶前途程遠しの感あり。

滿洲は、大農風にして、十町歩も畦畔なき所あり。高粱豆等を産す。日本人が此地に至りて、農業上の勝利を得るは、將來歲月を要し、殆ど望みなきが如くなれども、富源の深きが故に、製造場を起すが如きは有望なるべし。

終に臨みて、諸君が、防長の小天地に懸礙せず、眼光を大にして、將來、滿韓の地にも活動せられむ事を切望す。

### 第七週紀念式

明治三十九年十月十八日、本校第七週紀念日に當れるを以て、紀念式を舉行せられたり。午前八時、生

余は平生青年學生の爲には微力を盡すことを惜まざるものなり。故に今回の歸省にも、當地學生の品行につきて問ふ所ありしに、諸子には飲酒放蕩は勿論卑猥なる俗歌の放唱又は喫煙等の惡風無しといふ。余は之を聞いて大に満足したり。諸子の熟知する如く、我國は戰勝の結果國威隆々として揚り實に愉快に堪へず、然れども此は特に武力に於て勝つたるのみ、換言すれば軍人の勝利を得たるのみ、國民の戦は是にて終りたるにあらず、是より漸く將に醜ならむとする處なり、即ち商工業農業各方面に向つて外國と競争して國力の發展を計らざるべからず。此時に當りて、諸子が最注意すべきは體軀の強健なるべき事是也。然るに青年學生ややもすれば不品行の爲に身體の健康を害するものあり、一高入學試験の際體格検査の結果花柳病に感染せるもの夥多發見せられたりといふにあらずや、是國家の前途に於て大に患ふべきことに屬す、さらぬだに日本人の體格は矮少にして、腕力も歐米人に劣れり、現に余が戰況視察の實地につきて聞得たる所によるも、彼我退團の際敵と引組んで俱に斃れたるものを視るに、大抵は組織が崩れ居りたりといへり。我國民體軀養成の急務なるは此一例にても明白なるべし、かかる時に當りて、青年學生の不品行の爲に體軀を害するもの多しといふに至りては、痛歎せざらむと欲しても得べからざるなり、諸子よ、酒と煙草とは直接間接に青年各種の疾病の媒介をなすものなれば、決して之を近くべからず。余は感ずる所ありて近年共に之を廢したり。諸子に此弊なきは余の最喜ぶ所也。されど今年兵學校入學試験の成績を見れば、トラホームの爲に不合格となりたるもの本縣にも數多ありき。然れば諸子亦いま



だ安ずべからざるなり。諸子よ、體軀健全ならずしては、學び得たる知識も用をなさぬ事を、深く思はざるべからざるなり。云々

### 父兄保證人會 (三十九年)

十一月十七日保證人會を談話室に開かれたるが、今回は實地授業の状況を父兄に知らせむ爲、午前中は各教室に案内して自由に參觀するを得しめたり。且寄宿舎の状況を知らせむ爲に、同食堂にて生徒同様の辨當を希望者に分つ、午後會場に入りて羽石校長の談話、父兄側の希望意見發表、栗屋少將の家庭教育談等あり、終りて柔道仕合數番と、投形とを演じたれば、同日来會の父兄は、一同に満足せられしが、散會したるは午後五時なりき。

### 加村大尉の海戰談

熊本縣出身海軍大尉加村康政氏は、驅逐艦白妙の艦長なるが、所用の爲來萩せられたるに、十二月一日來校、特に本校生徒の爲に、日本海に於ける實戰談を試みらる。元來愛嬌に富める快辯なるが上に、氏は當時朝日艦乗組にて、砲煙彈雨の中怒濤を蹴つて

る。校長の誨告、知事の告辭(代讀)内田少佐の祝辭演説等ありて、卒業生總代田原四郎は答辭を朗讀したり。かくて來賓父兄保證人及卒業生には、別席にて茶菓の饗應あり。全く終りを告げしは正午なりき。(卒業生諸子の氏名は附録にあり。)

◎寄語す。現社會は教育ある有爲の青年を要求しつゝあり、諸君は今中等教育を卒へたる有爲の青年なり、故に現社會が要求する人物は諸君にして、諸君の前途は光と望とに充されたり。然れども諸君の前途には亦魔多く呪ひ多し、魔と呪ひとは自ら速に之を排除して社會に適應せむことを勉むべし、唯に適應するのみに止らず更に進んで之が誘導者となり耳目となりて國家社會の幸福を増進すべきなり。若しそれ具體的に之を述ぶるが如きは、寧ろ其繁に堪へざるところ、諸君幸に自重せよ。

### 修學旅行

我校の修學旅行は、故ありて、去る三十五年に行はれしより、中止せられ居たるが、本年は、第五學年生徒及び第四學年生徒をして、三田尻まで、四泊旅行

實地辛酸を嘗められたるものなれば、言々句々すべて一種の力を有して、感動を與ふると一方ならず。二時間の談話も猶時の移るを覺えず、散會したるは午後五時なりき。

### 學友の計

雪降りしきる二月の七日、學友川上元一君は遂に逝きぬ。君は學にあること四年、温厚の資性は發して親切となり、等しく同窓の推すところなりしが、肋膜炎に病床に呻吟する一週日、運動熱心家として體軀強健なりし君も、前途の光明を、天に奪はれぬ。噫。

### 第七回卒業證書授與式

本年三月二十三日第七回卒業證書授與式は舉行せられぬ。同日午前十時職員生徒式場に入り、次いで來賓林前檢事正、内田、内山、原の三少佐、藤富郡長、渡邊町長、郡視學郡會議員等約四十名、及父兄保證人順次着席、校長は五十五六名の卒業證書を、總代田原四郎に授け、百十四名の生徒に褒賞を授與せら

をせしむることとなりぬ。而して其結果も良好にして、衆能く規律を守り、困苦缺乏に堪へ、忍耐力の養成上、多大の効果ありしは勿論、他の學生をして、修學旅行の軌範を知らしめしものなるを以て、爾後、修學旅行は引き續きて行はるゝこと、はなれり。その旅行中の記事は下の如し。

五月一日、曇、旅行隊九十餘名は草鞋脚絆に結束し、岩田先生を始め教師六名と共に、午前七時五分、颯爽たる喇叭の聲に隊伍整々、山口に向ひて出て立つ。細雨霏々、沃雲天に漲りし昨夕の空も、今日は雨止み、殊に爽快なるを覺ゆ。やかて町を出づれば、軍歌の聲、空に響きて勇ましく、意氣の旺なること斗牛を貫かんず概あり。かくて鹿背の洞道を過ぎ、八時三十分、其傍の茶店に少憩す。道を新道にとりて明木を經、一升谷に至りしに、岩石突起して路愈々峻しく、流る汗は淋漓として滴り、苦しきこと甚だしかりしが、勇を鼓し氣を勵まし、漸く其頂に至り、此を下りて、十時二十分、新切に至りて憩ふ。此地を發し、行く行く空を仰ぎ見るに、曇りし空はいつしか碧空と變じ、白き斷雲のその間に浮べ



るを見る。かくて十一時四十五分、威勢堂々、佐々並に着し、林といふ旅宿にて晝食を喫す。零時五十分、四學年生徒を先頭として發し、午後三時三十分、方便山麓の茶亭に小憩す。一の坂に登るに、路甚だ急峻なりしかば、軍歌を唱へつゝ勇を鼓して登るに、道の左側に防長の境界碑を見る。やがて坂を越え山腹に至り、雲烟模糊たる間に山口を望見せしときは、衆の意氣愈々奮興す。山を下り坦土を行くこと里餘にして、午後三時五十分、山口の町端の茶店に達せし時、我校出身の高等商業學校生徒諸氏の出迎に會す。かくて四時三十分山口に達し、五學年生徒も四學年生徒も、それより其宿所と定められたる中川旅館及び香川旅館に宿る。此夕、我校出身の高等商業學校の諸氏より多くの菓子を贈與せられしは深く感謝するところなり。

五月二日、晴、午前七時四十五分宿を出發して、直ちに高等商業學校を參觀す。此處を出て、十時三十分御堀の茶店に少憩す。其店傍の碑に、「梅が香にのつと日の出る山路哉、芭蕉翁」と刻みあるを見る。これより漸く進むに、路愈々長く、一條の長路を

の盡くるところを知らざりしかば、勞る、事甚だしく、不平の聲咄々たる中に、漸く佐波山隧道前の茶亭に至る。止まること四十分、其間に晝食す。こゝを發し洞道に至れば、泥濘糊を溶かしたるが如く、内には處々に點燈あり。此を以て一帶の下り坂を下るとき、遙に南海の水色を望みし時は、衆快哉を叫ばざる者なし。かくて午後三時、宮市天満宮に着して休憩す。其殿堂の宏壯偉麗なること、真に此地方に冠たりと思はる。此處を出て、午後三時五十分三田尻停車場前に至り、五學年生徒は井原旅館に、四學年生徒は石田旅館に投ず。此夜、五學年生徒は、その旅宿の樓上に茶話會を催し、聊か旅の勞苦を慰す。五月三日、晴、此日旅宿より約一里半を隔てたる鹽田を見んとて、有志者十四五名は、午前七時四十分の頃より、田中先生に率ひられて出發す。彼地に至るや、一行は大に優遇を受け、又種々の説明などありて利する所少なからざりき。やがて旅行隊は、午前十一時三十分旅宿を出て、停車場に至り、十二時十五分發列車に乗りて小郡に向ふ。途次、車窓より佐波河口の岸の松林、影を水に投せる風光を眺め、

よしや。(此項記録、大草又七、中村誠)

### 羽賀の臺遠足

前に出でし第五四學年が修學旅行より歸來すべき五月四日、第三二一學年は羽賀臺及大井方面に遠足したり。例によりて概況を記さむ。

午前七時、進軍喇叭の音と共に、隊伍整々意氣揚々として出發す。天氣晴朗といひ難きも、覆へる雲は却りて我等の幸福なり。松本を過ぎて黒川の大峠にかゝり、左曲右折次第に山ふところに入る、藤躰躰など時を得顔に色を競ひて、往來しげき車馬の埃にも塗れざるがいと美し。行き行けば清風一陣颯と來りて爽快いふばかりなし。

漸く、本道より左に別れて、農夫の教ふるがまゝに進む。羊腸の小徑、木の根岩角を踏む足おぼつかなく、流汗淋漓たり。臺地に登りつきて、一面の紫雲英を茵として休憩す、恰も胡蝶の夢の心地なり。

此臺は往時の演習地にして、一面の芝生に點々小松原と畑とあり。茫々たる日本海には六島を浮べ、水天髣髴の際に見島は模糊たり。此處に行厨を開く時

台道停車場を經、零時四十五分小郡停車場に達す。それより、二時三十分町端の藤井といふ茶店にて晝食す。これより進むに、連日早天なる爲めならん、道に塵埃を揚ぐることを夥しく、漸く進みて坂路を越へ、二本木峠の茶店に憩ふ。かくて日の西岫に入らんとせる頃、大田に至りて宿す。

五月四日、晴、七時半出發、此日は旅行の終りにて加ふるに、これよりは景勝の地もなければ、萩を出でし時の意氣は、今は銷沈せるさまなり。漸く進みて一坂路を越え、繪堂に着して一屋に少憩す。それより雲雀峠を越え、九時四十五分、其茶店に至りて午餐を喫す。此地を發し明木の前に到るや、約三十分の休憩をなす。此間に岩田先生より、三田尻に於ける驛員の我に對する行爲に關し報告あり。かくて明木を經、一時十分鹿背隧道前の茶屋に至りて少憩す。時に空を仰げば、晴れたる空はいつしか淡墨の如き雲漲り、今にも雨降らんぞるさまなり。これより洞道を經、坂路を下る途次、懐かしき萩を目前に望む。やがて三時五十分歸着し、橋本にて解散の命あり。かくて西に東に己がじ、家路を急ぐも心地



正に十時半。  
正午大井村に下る。臺上より眺めし此邊の畫景も、今は我等の蹂躪のまゝなり。同村高倉社前に休憩して、これより海岸傳ひの新道を越ヶ濱にとり、小畑を過ぎて歸校したるは午後四時なりき。(此項の記録、平佐幹、田中貢)

### 下關商業學校生徒の來校

下關商業學校生徒約百名は、修學旅行として、海路當地に來れるが、五月十五日、本校の講堂物理化學教室博物教室寄宿舎及圖書館等を參觀し、翌十六日山口方面へ出發したり。尙本校々友會は、旅情を慰めむとの微意にて、物品を宿所に贈りたり。

### 河内少佐の寄贈品

參謀本部附陸軍歩兵少佐河内信彦氏は、此ほど、本校宛に寫眞二葉寄贈せられたり。其手紙に  
上峯、學生の志氣振興上多くの趣味可有歟と判断したる次第に御座候。要するに學生諸君は、毎に攻勢的度胸に於て、凡ての方面に活動すべきは勿

列して、地理及博物科の教授上に資することゝなれり。深く同氏に感謝の意を表す。

### 卒業生の寄贈品

韓國京城巴城館主松本民介氏は、韓人服一着外一品を井上教諭に托して寄贈せらる、本校にてはこれも地理標品室に備付けられたれば、同科教授上に資すること尠からず。卒業生諸君が斯く母校のために標品類を寄贈せられ、卒業後の状況を通知せらるゝ事は本校が滿腔の熱情を以て悦ぶところなり。

### 本校日誌

- 三十九年六月
- 二十三日、辯論會を講堂に開く、栗屋少將中島教諭の談あり。
- 二十八日、横田教諭の就任式あり。
- 七月
- 九日、本日より來十四日まで第一學期試験。
- 二十八日、滿韓地方修學旅行付添員井上教諭出發。
- 八月
- 二十九日、滿韓修學旅行中なりし井上教諭歸校せらる。
- 九月

論、勝ちて益々兜の緒を緊めつゝ奮勵せられし事を、乍婆心祈る處に御座候。右戦時の寫眞に對せられては不尠、興味を喚起せらるべき事と信申候云々。と、以て氏が寄贈せられたる真意を察すべし。此處に記して謝意を表す。

### 戦役紀念品

さきに陸軍省より、三十七八年戦役紀念として、鹵獲品を各學校神社等に配付せられたるが、本校にも軍刀、連發銃、十七珊榴彈丸、廿一珊鈎套堅鐵彈丸、スミスウエツリン拳銃、方匙等十四品下附せられ、物品は縣廳より送られたり。是即黃人種の自覺を促し、支那人を立たしめ、且祖國の威名を赫々たらしめたる好個の紀念。

### 萩原總領事の寄贈品

滿州奉天在勤の萩原總領事は、滿州農産物十八種、滿州人日用飲食器五種、織物見本數種、鑛物(岩鹽)一種を、井上教諭滿韓旅行の際同氏に托して、本校に寄贈せらる。本校にては現今之を地理標品室に陳

- 二十九日、瀧口代議士及井上教諭の滿韓旅行談あり。
- 十月
- 八日、河野教諭の告別式あり。
- 十八日、第七周開校紀念式舉行、午後柔道及劍道共仕合あり。
- 二十日、劍道大會あり。
- 二十四日、山口四十二聯隊行軍來萩につき教員生徒は附近に出迎ふ。
- 二十八日、柔道大會。
- 十一月
- 三日、天長節拜賀式、午後庭球大會。
- 九日、上原先生就任式あり。
- 十七日、父兄保證人會開催、栗屋少將の談話あり。
- 二十四日、文藝辯論部例會あり。
- 十二月
- 八日、加村海軍大尉の日本海大海戦談あり。
- 十四日、本日より二十日まで第二學期試験
- 四十年 一月
- 十一日、本日より來三十一日まで柔道劍道の寒稽古始る。
- 二月
- 二日、劍道大會、寒稽古皆勤者へは賞狀授與。
- 三日、柔道大會、寒稽古皆勤者四十五名に賞狀授與。
- 十二日、岩田教諭從七位に叙せらる。
- 三月
- 二日、無線電信實驗あり小學校職員生徒の參觀あり。



- 三 日、警察署及本校聯合劍道大會を開く。
- 八 日、本日より學年試験。
- 九 日、スマイザー先生の告別式
- 二十三日、第七回卒業證書授與式舉行
- 廿五日廿六日、共通入學試験執行

四月

- 八 日、他學校出身者の補習科入學試験執行
- 十一日、金子教諭就任式藤井教諭の告別式
- 十五日、高田教諭告別式、澁部先生就任式、脂月社參拜

五月

- 一 日、本日より第五學年生徒修學旅行、四日歸校
- 四 日、第三二、一年生徒羽賀臺地方に遠足す。
- 六 日、井上先生告別式
- 十五日、下關商業學校生徒約百名來萩
- 十八日、劍道大會
- 十九日、柔道大會
- 二十日、庭球大會
- 廿五日、松蔭神社參拜、午後、橋本川にて競漕會開催

六月

- 一 日、安藤教諭及津田教員就任式。
- 二十九日、文藝辯論部第十二例會を開く。



校友會記事

本會役員

(四十年四月改選)

- 會長 長羽石重雄
- 副會長 岩田博藏
- 劍道部長 中島豐之
- 委員 椋木貞一郎 吉岡良平 彌政 竹雄
- 藤井愛咲 伊藤時重 太田良吉
- 柔道部長 横田慎治
- 委員 石光憲弑 佐々木四郎 齋藤徹太
- 松野十一 岩本秀雄 中西作介
- 堀正一
- 球術部長 田中市郎
- 委員 小倉誠一 石光憲弑 村田三介
- 原田初造 大橋 石津美矯
- 藤原政一 上野清 伊藤一郎

- 伊佐小二郎 (以上野球部)
- 濱屋七平 彌政 竹雄 福田敬二郎
- 堀正一 平佐 幹 田中 貢
- 栗栖 靜 江原 茂 伊佐小二郎
- 藤田宗亮 (以上蹴球部)
- 山根四郎 平川新太郎 安藤 芳彦
- 長井 要藏 安達 茂作 藤原 政一
- 高橋 進 (以上庭球部)
- 短艇水泳部長 相島直一
- 委員 濱屋七平 石光憲弑
- 文藝辯論部長 上原勝之進
- 委員 濱屋七平 小倉誠一 大草又七
- 彌政 竹雄 田坂榮助 山根四郎
- 福田敬二郎 落合健 堀正一
- 中村誠 平佐 幹 田中 貢
- 栗栖 靜 藤原 政一 伊佐小二郎
- 藤田宗亮 (補) 大中 秀次

筑前琵琶の演奏

時は明治三十九年六月十二日、本會は、筑前琵琶の

校友會記事

名手小泉、鈴木の兩氏を聘して、寄宿舎談話室に、演奏會を開く。曲は、臺灣入、俊寛、宗高扇的的等皆是悲壯を以て優れるもの、左手に弛張自由の四絃、右手に緩急自在の撥、一彈は一彈より、一調は一調より、次第に興に入り行けば、數百の聴衆時に喝采湧くが如く、或は静寂あたり人無きが如し。殊に扇的的に於ける宗高馬上に瞑目して「南無や八幡……」此矢はづさせ賜ふな」と祈念するあたり、轉、天徳寺了伯の昔も偲ばれて、足の爪先まで電氣に打たる、心地す、蓋是感奮せる聴者の武者振ひなり。ヴァイオリンにうつゝを抜かすハイカラ青年輩は來りて琵琶の調と歌とを味へ、其處に卿等が優柔を醫すべき靈藥あらむ。

希望の光

本校卒業生乃美忠次君外十一名の君等は、本年陸軍士官學校を卒へて、各地聯隊に見習士官となられたり。厚東洋君外十一名の君等は、本年山口高商に入學せられたり。其他高等の學校に入り、或は出てて社會に活動しつゝある人等(附録卒業名簿參照)一



々此處に記さずといへども、いづれも是先途に閃めく希望の光。而して會友會員のわれ人共に慶すべきにあらずや。

### 劍道部記事

○明治三十九年五月三十日午後三時より、萩警察署の擊劍大會を明倫小學校雨天體操場に舉行せられき。我校友會擊劍部も招待に應じ、撰手を出すこと十有七名なりき。この日、天氣快晴、來觀する者場に満ちたり。

大日本武徳會山口支部擊劍教士仁宮久氏の審判の本に、勇壯活潑なる數回の演技ありしが我撰手の武運強き者多かりき。

○同年十月九日萩警察署内道場に於て、萩區駐在巡查諸氏と本校生徒との擊劍仕合の擧あり。これ、二宮久先生の秋季巡察の爲め來萩せられしによりて行はれたるなり。當日天氣晴朗、阿武郡長其の他諸賓各位の臨席せらる、者多く、盛會なりき、三本勝負にして、始の程は、前本校擊劍教師玉木直保先生審判の勞を執られ、後、二宮先生これに代られ、勇壯な

に充てられ、白雪紛々、寒風膚を裂く嚴冬と雖も、時を得たりとなし、諄々孜々、これに出勤せられしは、やがて、諸子が學成り、業終へて、社會に奮闘するに當り、不撓不屈の精神を養ふ基礎を確定せるものにして、此の點に就きて、皆勤證授與の當日校長に代り、岩田文學士の懇々艶賞せられし處にして、又以て、斯道獎勵の補助たるべきものなりとす。今皆勤者の氏名を左に掲げむ。

- 山根益三 ○野北重利 ○彌政竹雄 ○中村樹介 ○三浦嘉七 ○吉岡良平 ○大田良吉 ○柳田昇二郎 ○長岡正監 ○早川富正 ○神田隆三 ○渡邊潔 ○平川春亮
- 尚二月八日、寒稽古成績の發表として、皆勤者と否とを問はず、部員全軀を以て、紅白勝負を舉行す、頃しも二月初旬の事として、満目一面の銀世界にして、寒氣凜烈、人を襲ひ、扮ふ胴着は心身を縮蹙せしむれど、元氣満々たる我が劍士は、何ぞ、それ顧るべき。勇壯活潑なる技を闘はし、觀る者をして握汗せしめ、數時間にして、紅軍の勝に歸しぬ。
- 全年三月三日(日)午後一時より、大日本武徳會山口支部劍道教士仁宮久先生の來萩を期し、萩警察署

る仕合の後斯道に關する二宮先生の演説ありて閉會せしは午後五時なりき。

○同年十月二十九日、左記の者、擊劍部助手を命ぜらる。

- 吉岡良平 ○平川春亮 ○中村樹介 ○大谷壽福 ○三浦正夫 ○羽倉市熊 ○椋木貞一郎 ○柳田昇二郎 ○吉村頼正 ○彌政竹雄 ○伊藤時重 ○渡邊晃
- 全年十月二十日、午後二時より、例に依りて、秋季擊劍大會を催す。この日晴天にして、生徒は陸續來集し、來賓亦多く道場内に満ちり。中島先生及び、玉木先生の審判の本に、震天動地、電光石火の仕合始まり、紅白兩軍秘術を盡して戦ふこと數十度にして、桂冠は白軍に歸し午後四時閉會せり。この日の番組は略すべし。
- 全年十一月十三日我が校友會の擊劍部を自今劍道部と改稱す。

明治四十年一月十一日より、全月三十一日まで三週間、例年の如く、放課後數時間を以て、寒稽古を行ふ。部員諸士は、學年末諸課の多端なるにも拘らず、よく、其の時間を割きて、これを身軀養成、心膽練磨

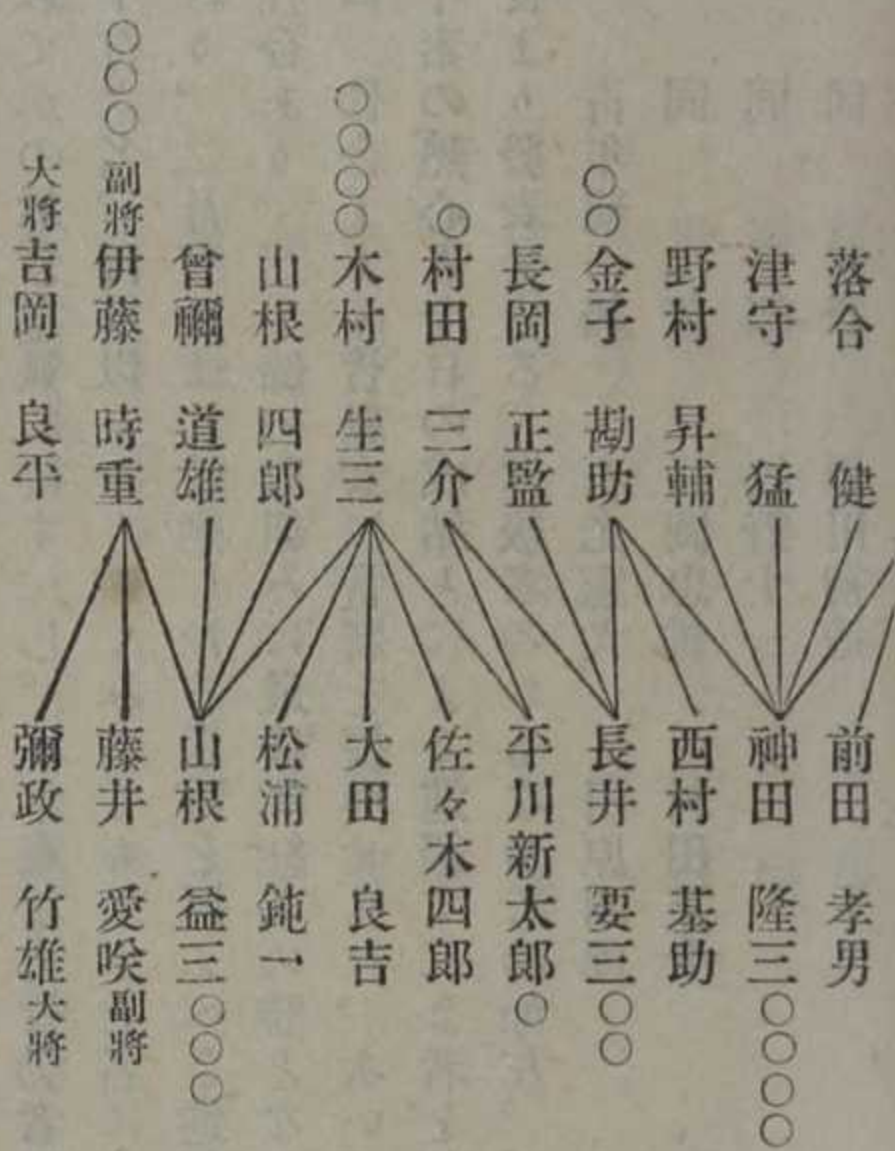
及び本校の聯合劍道大會を本校道場に開く。この日、朝來微雨ありしかども、午後は近日稀なる快晴となり、來觀者續々集り、さすがに廣き道場内も、立錐の餘地なきに至れり。始め中島先生、生徒四名の地稽古を行はれ、次で聯合仕合は、三本勝負にして行ひき。今番組を示せば、

- 三浦 嘉七(中) ○林 孝一(中) ○阿川 環亮(中)
- 野北 重利(全) ○中村 誠一(全) ○長井 要藏(全)
- 水島賀登治(警) ○河田 政治(警) ○石田 福藏(警)
- 大田 良吉(中) ○石光 憲式(中) ○松浦 純一(中)
- 伊藤 助樹(警) ○柴田 好藏(警) ○中村米之進(警)
- 村田 三介(中) ○藤井 愛咲(中) ○河北 一三(中)
- 村田喜三郎(警) ○松岡鐵二郎(警) ○前田 喜三(警)
- 伊藤 時重(中) ○堀田幾太郎(中) ○彌政 竹雄(中)
- 牧 任俊(警) ○松田 龜一(警) ○佐近四万作(警)
- 山根 益三(中) ○吉村 經正(中) ○水井 精(中)
- 奥田 重雄(警) ○本田 庫太(警) ○久保田八郎(警)
- 柳田昇二郎(中) ○羽倉 市熊(中) ○吉岡 良平(中)
- 中村 半次(警) ○福田喜三郎(警) ○石田 徹(警)
- 三浦 正夫(中) ○平川 春亮(中) ○中村 樹介(中)
- 平川 半助(外) ○佐近四万作(警) ○勝の印
- 今田小次郎(警) ○大谷 壽福(中) ○引分の印

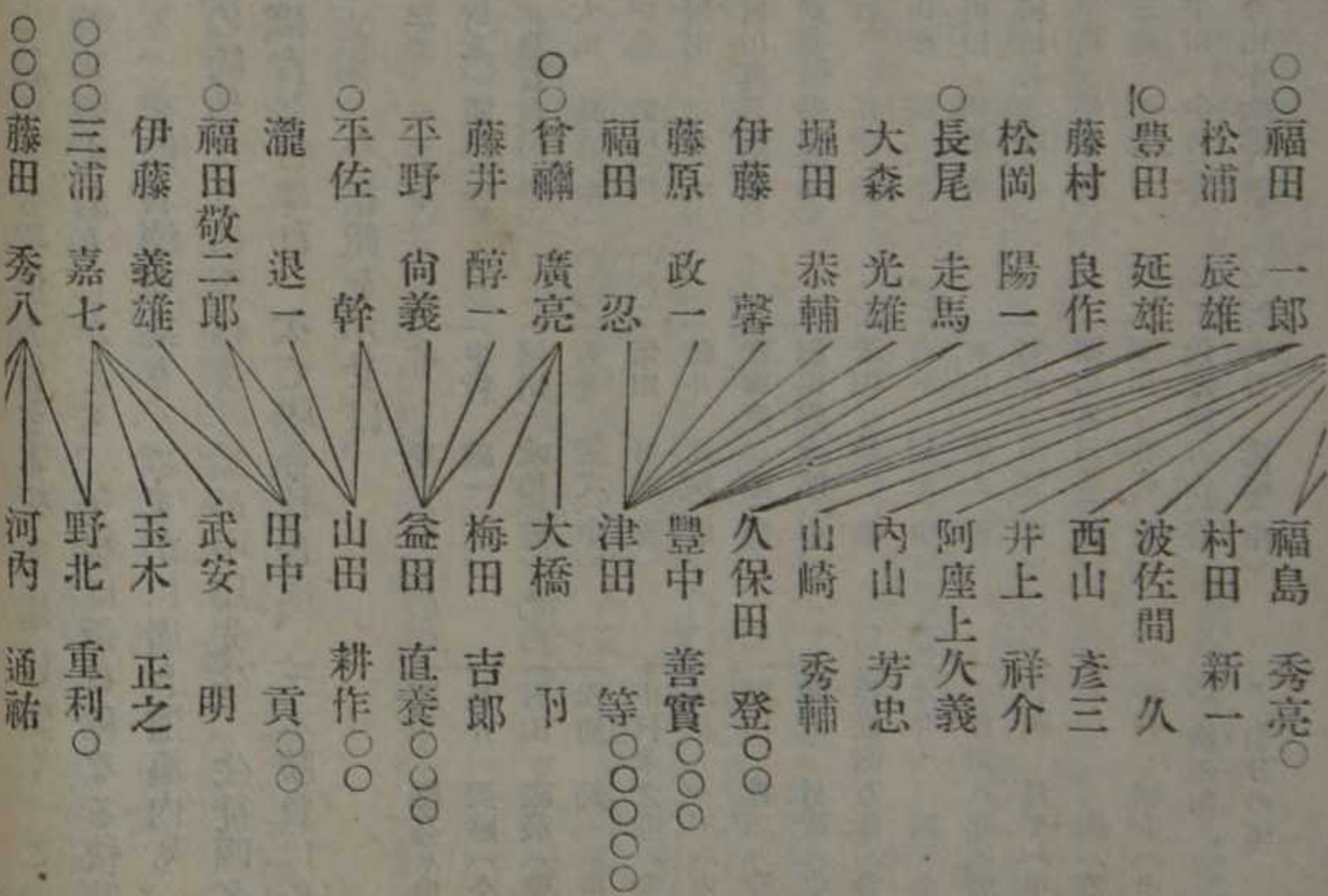


### 春季劍道大會

五月十八日午後一時より、本校内道場に於て、明治四十年度春季劍道大會を開く。校友會長を始め、諸先生十三名の御臨席あり。演武者六十八名を紅白二組に分ち、本部長中島先生の審判のもとに、試合を舉行す。勝負始まる前にあたりて、部長より、沈着、活潑にして、禮儀を重すべき旨、演武者へ注意ありて、直ちに、兩組よりは、矢田、山本の二人、威儀容々として、立ち向ひしが、やがて、矢田君、敵の右手を打ち落して、勝を占む。これより、演武者は、毫も、滯らず武裝整備し、立ち代り、立ち向ひ、花々しき激戦、壯烈なる勝負幾度なるを知らず、電光閃き、石火散り、午後三時に至り、紅組の副將、白組の大將を斃して、紅組の大捷に歸し、茲に畢を告げぬ。尙その番組は、



○松野君は紅組に現はれたる勇士にして、敵六人を討ち取り、猶向ふ處前なし。審判者は優待として控へさせらる。○藤村良作君は、運や拙かりけむ。敗をとれり。されど、君の態度は沈着なり。それ、勝敗は時の運、將來、益、練磨し給へ。○久保田君は、その力には、骨をも碎かんずる力あるが如く、又態度よし。益、上達して呉れ給へ。○津田君は、白組にありて、敵六名を撃ちとり、優待となれり。君の態度は嚴然として元氣溢れ、技亦活潑なり。強ひて述



ぶれば、今少し、沈着にせられたし。○三浦君の姿勢こそ、眞に沈着にして、その業や頗る美なれ。君が平素の熱心は、十分に技術の上に表はれむとす。吾等敬服する所なり。君よ、愈、益、この道のために奮はれむことを切望す。○神田君の業亦美にして、且つ沈着なり。○木村君は、その業、非常に敏捷にして、功績見事なり。希くは、君この部の爲めに、得らる限りの時暇もて、益、練磨せられ、部員を獎導せられむことを。(委員記)

### 柔道部記事

○明治三十九年十月二十八日午前九時より、秋季大會を開く。會長副會長以下諸先生新聞記者及び生徒來會、百疊の道場とて狭きまてつめかけたり。六十餘組紅白兩軍より進みつ退きつ午後に入りて、愈々勇ましく、中にも紅軍の堀君白軍の中西君は其手並天晴なりき。後に白軍の副將佐々木君は二騎を仆して、長岡君と引分、大將田原君は紅軍副將村田君と組んで引分、遂に紅軍大將を餘したり。仕合了りて成績優れたるものに賞牌及賞狀を授與せられ、午後

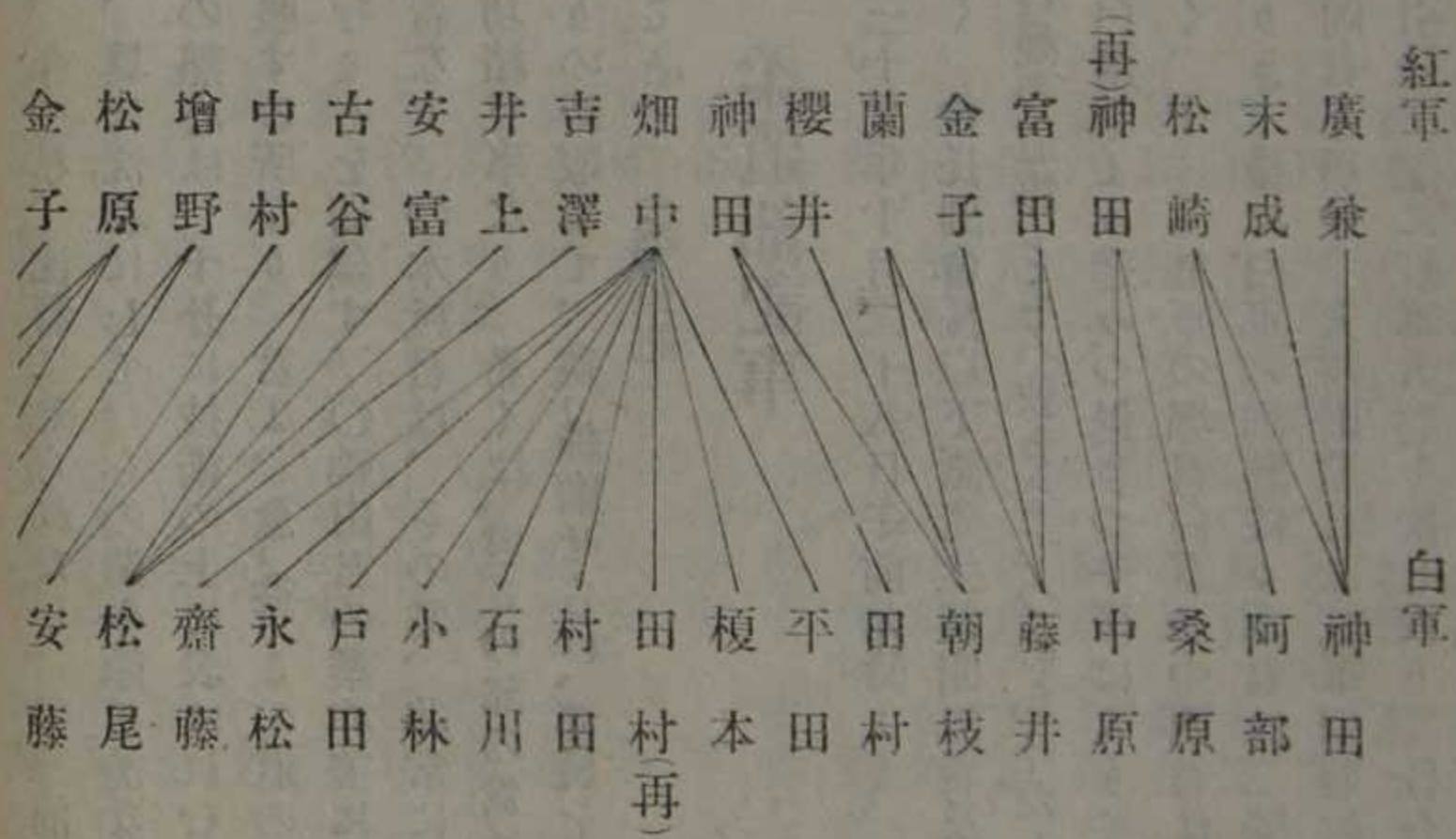


四時閉會したりき。

○寒稽古と進級仕合、菊濱の潮風寒く阿武の河水も  
の凄き酷寒にも、萩中の道場には常に健兒を見ざる  
日はなし。四十年一月十一日より向ふ三週間、是ぞ  
寒稽古の時期、飛躍すべき時は來れるなり。兩腕の  
力兩肱の骨鳴りて流汗淋漓たる豈壯快ならずや。昔  
日明倫館道場に鍛ひし意氣は凝りて維新の鴻業を輔  
けたるもの、今其血を受けたる長州男子、すべから  
く道場に入りて、堅忍不拔の精神を養ひ身體を鍛ひ、  
以てかの尊き意氣に接すべし。本年寒稽古皆勤者四  
十有六名、百本以上のものゝみにても二十七名に上  
れり。二月三日は其練磨したる手腕を揮ふべき進級  
仕合あり。三十餘の取組みに最後は紅軍の勝となり  
ぬ。仕合了りて皆勤者に賞状を授與せられ、次いで  
平素の熱心と今日の成績とにより進級すべき者を部  
長より發表せらる。進級者のおもなるもの如左。

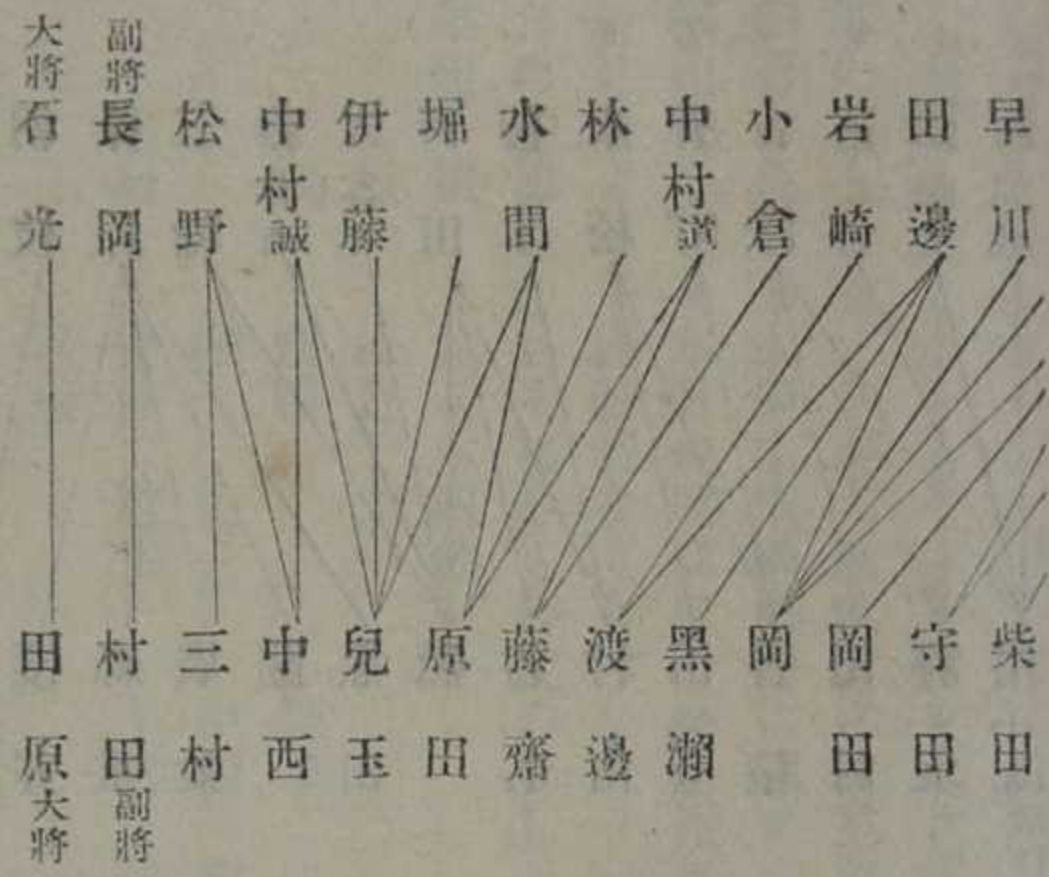
- 青年組一級 石光憲弍 田原四郎
- 同 二級 長岡忠雄 村田三介
- 同 三級 松野十一
- 同 四級 原田初造

仕合番組は左の如し。

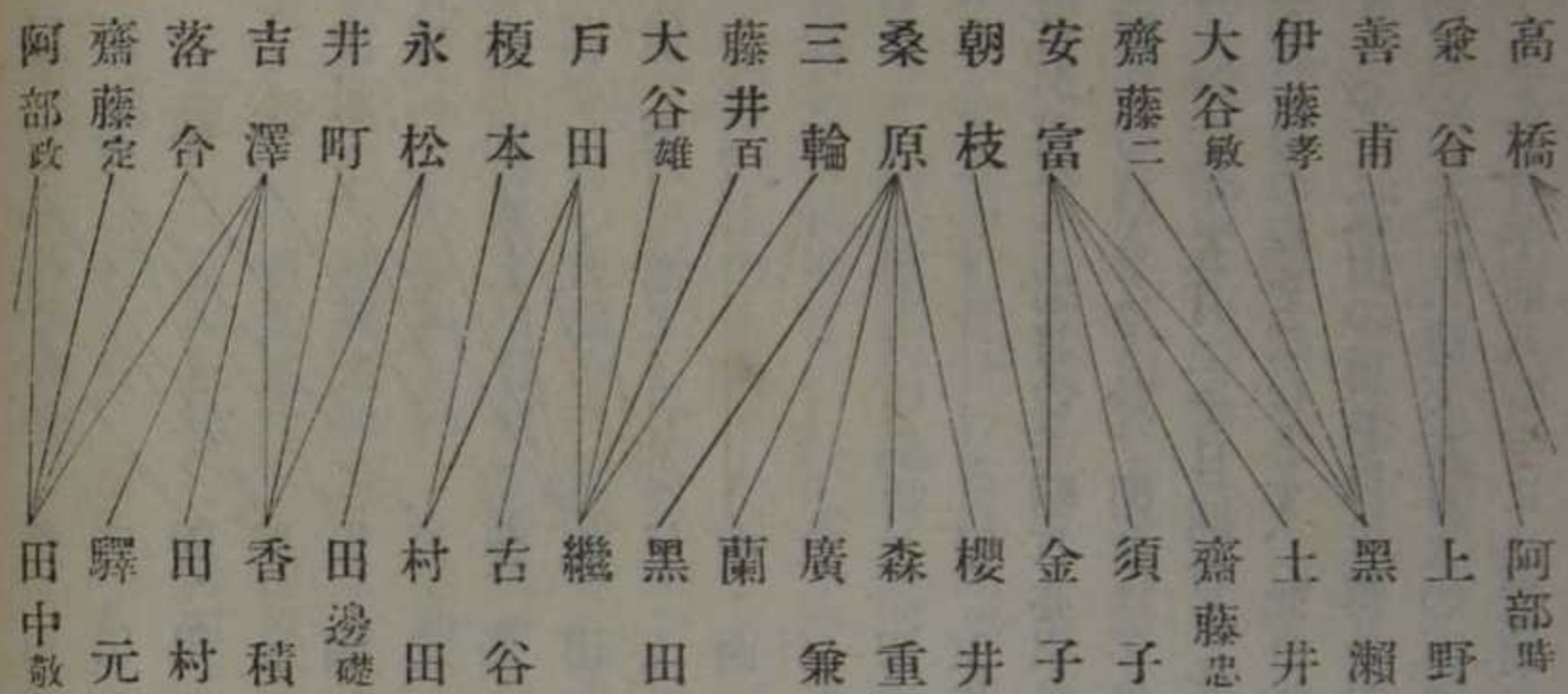


地をのこさず、羽石會長岩田副會長諸先生及び警察  
署員の參觀ありて、頗る盛會なりき。當日の仕合は  
左の如し。

松野三村兩君が引分、副將の一騎打亦引分、大將の  
對面遂に紅軍の勝利となりぬ。閉會は午後二時半。  
○春季大會 四十年五月二十日開會と定まりたれ  
ば、互に磨きし力の程を試むとす、此日數百の健兒  
は腕をさすりつゝ、披山の勇を以て敵を討たむもの  
と、腰に打物こそなけれ、待ちたる人の勇ましくも頼  
もしや。かくて當日午前八時半には道場に立錐の餘







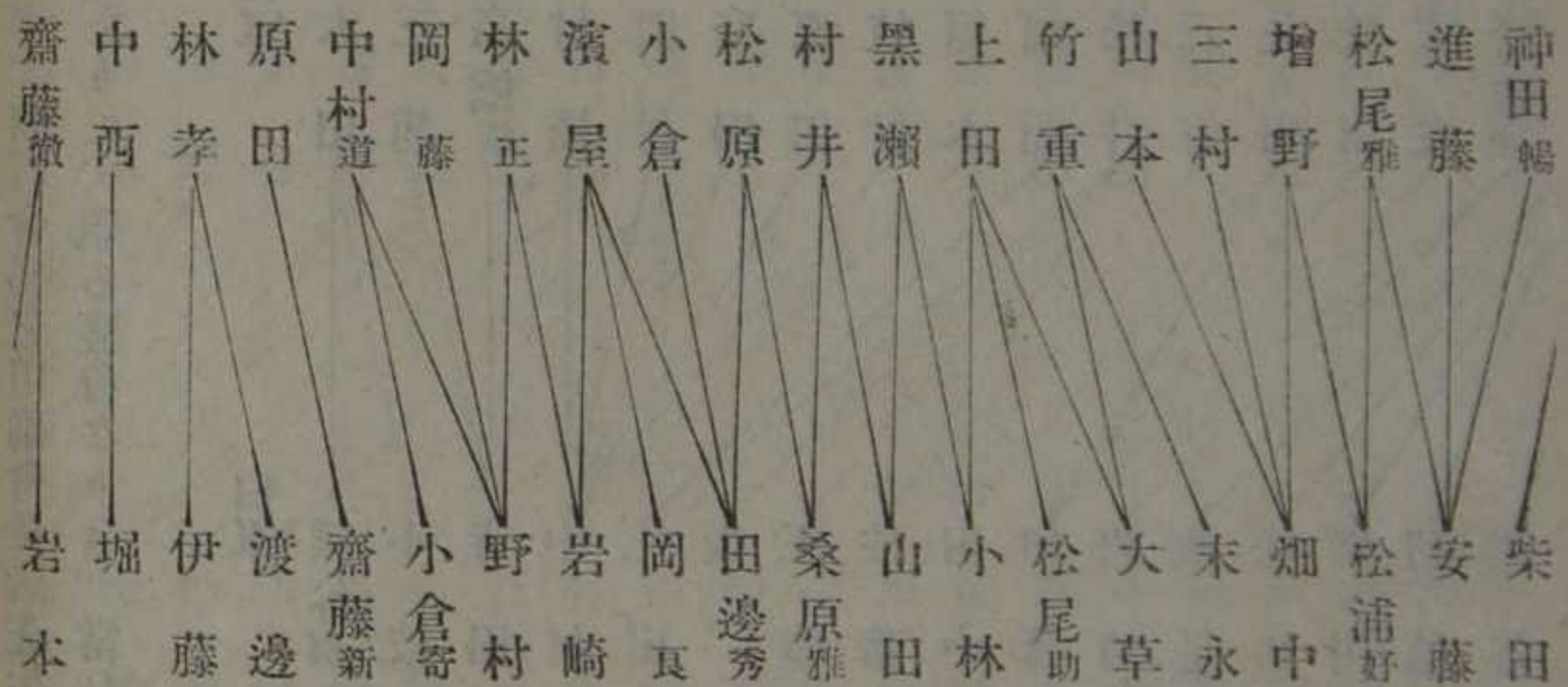
副將 松野 村 田副將  
 大將 石光 佐々木大將

終に紅軍の勝となる。やがて演武者には茶菓の饗應あり、羽石會長より武術は精神修養に關する講話あり、横田部長より本日の勝負について批評あり、全く閉會したるは午後四時なりき。尙、當日の進級者のおもなるもの左の如し。

- 青年組一級 佐々木四郎
- 二級 松野 十一
- 三級 齋藤 岩本
- 堀 正一 中西 作介
- 四級 中村 道生 小倉 誠(寄)
- 渡邊
- 同 五級甲 林 正七 濱屋 七平
- 野村 昇輔 田邊 秀雄
- 同 五級乙 村井 勝 山田
- 松原 精一

球術部記事

○野球會(明治三十九年度) 我野球會は近年多大の



發展をなし、流石に寂寞なりし運動場もノックの響き朝夕に絶へざるに至りぬ。

○五月十九日第一級對第二級級の競技試合。十九點に對する二十點を以て第二級級の勝利となりぬ。依て優勝旗を授與せらる。

○五月廿四日第二級對第三級級の試合。二年級の得點壹に對する參年級の得點十七參年級は優勝旗を奪取す。

○五月廿六日第三級對第四級級の試合。兩軍奮闘今や酣ならんとせる折柄、三年級の投手及捕手に負傷ありしかば、兩軍怨みを嚙んで決戦は中止となりぬ。

○六月二日再び第三級對第四級級の試合を舉行す。第四級級の運や拙なかりけむ、二十一對十九の得點を以て、月桂冠は第三級級の手に落ちぬ。

○同十六日第三級對第四級級の恢復試合を舉行す。八對十を以て此度は第四級級の勝利に歸しぬ。

○同二十六日野球大會を開く審判官高田部長及横見莞爾君の下に戦ひを開始し白組七點に對する紅組六點を以て白組の勝利となりぬ。試合後一同志都岐公



園にて撮影し、勝組には各員賞牌を授與し、終つて茶話會を開き、夕日の西山に春く頃一同解散せり。  
 ○十一月三十日第五年級對第四年級の試合。得點十六點に對する十四點を以て四年級の敗北となる。  
 ○十一月十日秋季大會を舉行す。

○明治四十年度野球會記事、五月二十二日第壹年級對第二年級の試合を舉行す。得點十一點に對する十五點を以て第二年級の勝利となりぬ、第一年級撰手は初陣としては天晴れなりき。

○五月二十八日第三年級對第二年級の試合を行ふ。如何にしけむ十一點に對する十八點を以て第二年級の勝利に期し、名譽ある優勝旗は二年級の收むるところとなりぬ。

○六月一日本校撰手對聯合撰手の試合を舉行す。これを以て春季大會とす。兩軍勇士の氏名左の如し。

- |            |            |
|------------|------------|
| 本校撰手       | 聯合撰手       |
| P. 松浦 鏡一   | P. 林 孝一    |
| C. 岡 良之    | C. 落合 健一   |
| S.S. 原田 初造 | S.S. 金子 勘助 |
| I.B. 藤井 愛映 | I.B. 松野 十一 |

H.B. 小倉 誠一 (伍)      I.B. 三田 尊一  
 H.B. 佐々木 四郎      H.B. 長尾 光馬  
 R.F. 村田 三介      R.F. 渡邊 壽吉  
 O.F. 小倉 誠一      O.F. 伊佐 小四郎  
 I.F. 中國 作介      I.F. 渡邊 道知

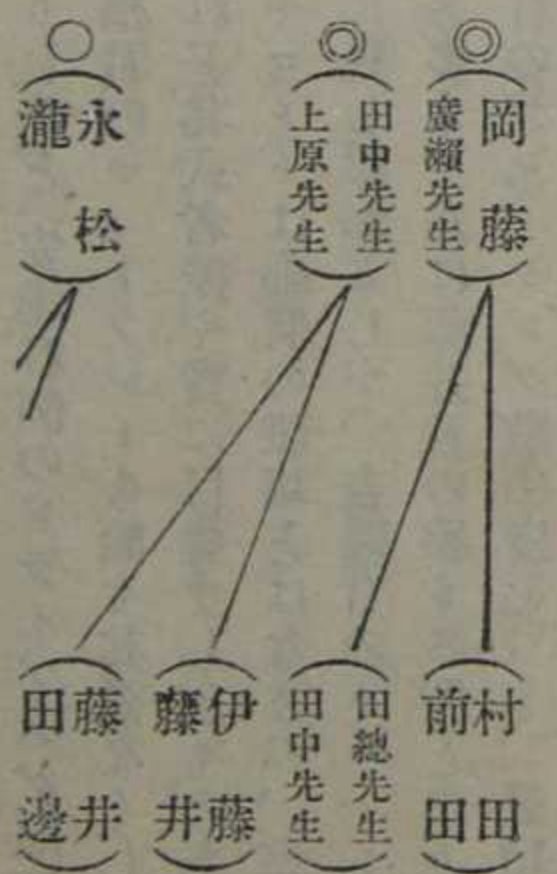
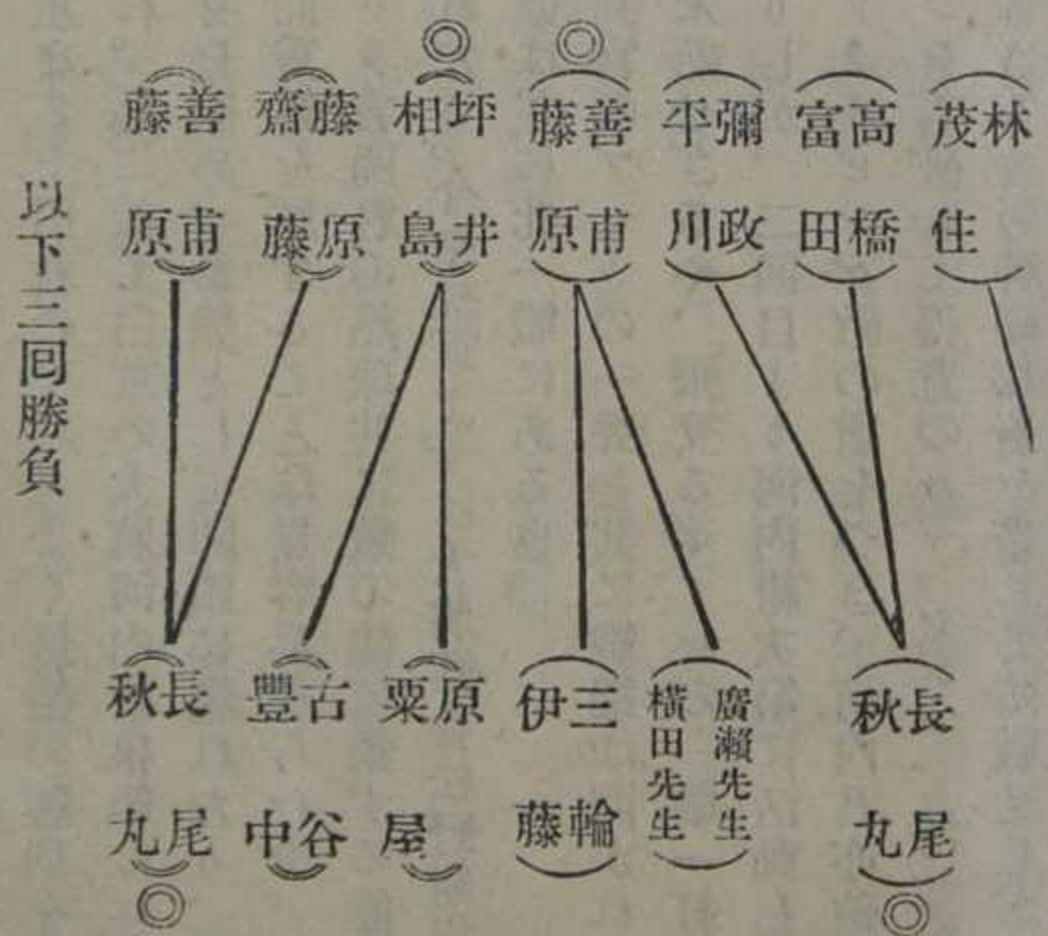
審判員石光憲式君の下にブレ一の令下りぬ。本校撰手松浦君は熱球を提げて陣頭に立ち、或は早く或は緩く魔球は屢々送られて敵を惱ますこと甚し。依て三度振にて仆ふるもの續々たり。其他の勇士岡君原田君よく奮戦し、村田君中西君佐々木君小倉君、各魔王をも挫かんばかりなる健腕を以て、バッチングの手腕を表はされたり。

聯合撰手方にては投手林君の敏腕、捕手落合君例の快活を以て働き、満場一層の興を添へたり。金子君亦天晴なりき。其他面々よく技倆を發揮せられたり。而して白軍四點に對する紅軍二十點を以て、本校撰手の勝利となりぬ。

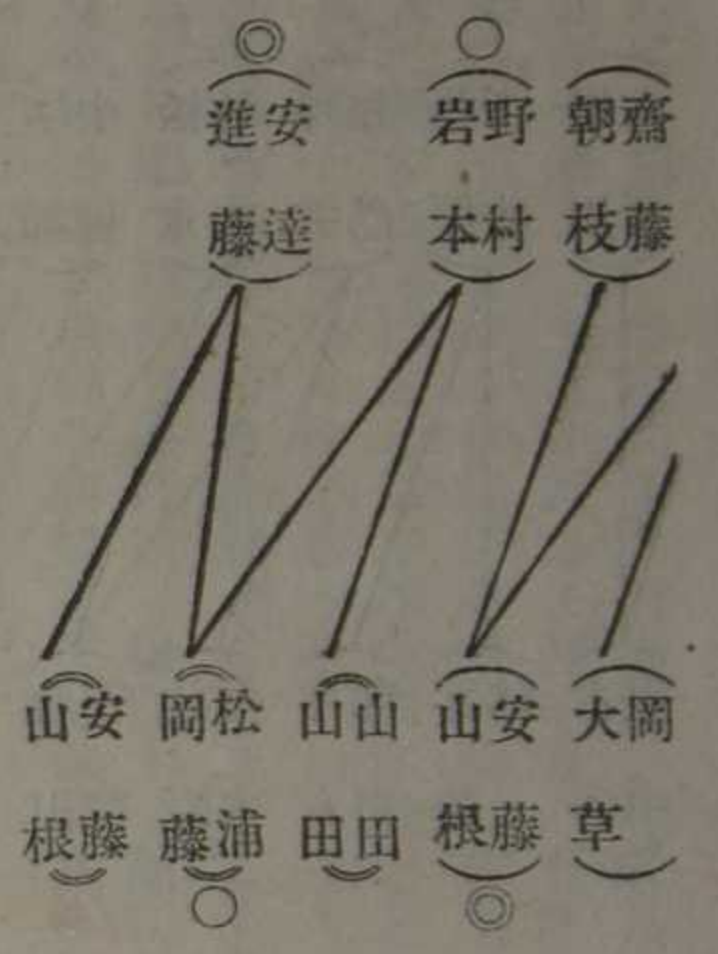
### 庭球會記事

秋季庭球大會(明治三十九年)

十一月三日、天長節式後、午前十時より秋季大會を第四コートに舉行す。高田部長は審判の勞をとられしが、勝利は白軍に歸したり。  
 ○四十年五月二十日放課後、庭球大會を第四コートに舉行す、初に落合健君審判をなし、後には田中教諭其勞をとられたり。當日の番組左の如し。表中に( )印あるは二組を倒したる優待組なり。







以下五回勝負

○副將 上田 吉田 藤井 ○副將  
 大將 松野 合野 河内 ○大將  
 田中先生 上原先生

中に特筆すべきは、安達組對安藤組に於て松浦君のサーブ屢成功して敵の膽を寒からしめしも、ゲーム二回より形勢一變して振はず、遂に安達組の勝となりしは呆氣なかりき。

白軍より、先に優待になりし山根安藤組代りて之に

獨特のスウ・キフト比較的ミス多く、落合君の熱球亦餘りに振はざりしは残念。茲に雌雄決せられて、月桂冠は遂に白軍の頭上に落ちぬ。

### 春季和船競漕會

待ち設けたる和船競漕會の當日たる五月廿五日とはなりぬ。場は橋本橋の下流のあたりなり。この日は、好天氣にて、午前十時より、吉田松蔭神社に参拜し、歸校の後午後一時、一發の銃聲の下に開始しぬ。この時より、勇ましさ音樂の聲は、嚙曉として聞え、煙花の音は、天も落ち、河水も躍らんばかりに轟き渡りぬ。競漕は益々回数を増し、觀覽者は四方より集り來り、さすがに廣き橋上も、今は立つに餘地なき有様となりぬ。この日最も衆人の目を引けるは、五年、四年、三年級の撰手競漕にして、月桂冠は四年級これを占めたり。また教員の競漕の如きは、最も滑稽を演じたり。午後六時終りを告げ、觀覽者も漸く歸途につきぬ。

この日の勝敗を記すれば左の如し。

- 第一回
- 第二回
- 第三回

校友會記事

當りしかど、安達君例のドライブング頗獍猛にして、山根君のショットフレイも餘り其効なくして敗退す。されど其武者振や實に目覚ましきものありき。

今やコートは副將の戰場とはなりぬ、悠々たる態度共に犯し難かりしが、吉岡君のスマッシング割合にミス多く、爲に藤井君の乗する所となり、加るに藤田君のプレッシング敵の虚をつき、氣稍挫かれしも慎重なる上田君のチバリよく最後の勝利を得しは天晴れ。是に於て白軍の大將河内曾根組はユニホームに身を固め、泰然として陣頭に現れたり、敵手の鋭も此重鎮を摩することは豈容易ならむや。上田君のチバリ吉岡君の熱球共に敵の機に乗する能はずして敗れたり。今や紅軍よりは、大將落合松野組出陣せり。勝敗は正に此一戦にある也。

審判官のプレーの一聲と共に戦端は開かれぬ。戦機の未熟せざるや、飛交るボールの一撃一打互角の勢なりしが、二回目より河内組次第に活動し、曾根君のドライブング敵の虚をつき、河内君亦敵のモーションを看破して得意のスマッシングを浴せかくれば、敵もさるもの神變秘術を盡して防戦せしが、松野君

- |           |           |          |       |
|-----------|-----------|----------|-------|
| 一等(三分四十秒) | 德見 俊雄     | 林 眞一     | 田邊 秀雄 |
| 伊藤 一郎     | 村岡 清吉     | 野北 重利    |       |
| 林 武雄      | 宮田 稔      | 田中 貢     |       |
| 早川 馨      | 山本 義介     | 齋藤 忠明    |       |
| 岩崎 民勇     | 羽石 重人     | 工俊 俊     |       |
| 第四回       | 第五回       | 第六回      |       |
| 一等(三分十八秒) | 一等(三分廿三秒) | 一等(三分三秒) |       |
| 小林直三郎     | 上野 義清     | 堀 正一     |       |
| 玉木 政一     | 内山 芳雄     | 齋藤 定一    |       |
| 三好 敬一     | 豊中 實美     | 瀧 退一     |       |
| 阿部 政致     | 神田 信夫     | 桑原 雅亮    |       |
| 大橋 卍      | 椋木 史郎     | 武 居明     |       |
| 第七回       | 第八回       |          |       |
| 一等(三分五秒)  | 一等(三分十秒)  |          |       |
| 三戸 由彦     | 齋藤 新一     |          |       |
| 末永 一郎     | 三村 惣一     |          |       |
| 平川新太郎     | 藤井 愛咲     |          |       |
| 杉本 基良     | 岡 徳一      |          |       |
| 早川 巍      | 栗屋 潔      |          |       |



第九回一等(三分)

- 一等田邊 秀雄 二等林 直一 三等德見 俊雄
- (三分)野北 重利 村岡 清吉 伊藤 一郎
- 田中 貢 宮田 稔 林 武雄
- 齋藤 忠明 山本 義介 早川 馨
- 工藤 俊 羽石 重人 岩崎 民勇
- 第十回 一等(三分十秒)
- 一等堀 正一 二等上野 義清 三等小林直三郎
- 齋藤 定一 内山 義雄 玉木 政一
- 瀧 退一 豊中 實美 三好 敬一
- 桑原 雅亮 神田 信夫 阿部 政致
- 武 安明 椋木 史郎 大橋 卍
- 第十一回 一等(六分二十秒)(二回)
- 一等高橋 二等青野 三等中村
- 大田 中村 細田
- 進藤 山本 西島
- 第十二回 一等(四分十五秒)
- 一等中島先生 二等相島先生 三等有福校醫
- 羽石先生 井上先生 田中先生
- 金子先生 岩田先生 上原先生

田總先生

山本先生

- 第十三回 一等(三分三十秒)
- 一等堀 正一 二等黒瀬 白
- 津守 猛 田村 莊介
- 石光 憲一 三村五郎吉
- 佐々木四郎 長岡 忠雄
- 山田 新作 大中
- 第十四回 一年對二年 一等(三分三十秒)
- 一等(一年) 二等(二年)
- 茂住 豊亮 三好 一郎
- 林 眞一 高橋秀三郎
- 林 武夫 富田 強吉
- 村岡 清吉 黒田 五郎
- 渡邊 梅吉 山田 專一
- 第十五回 一等(三分二秒)
- 一等(四年) 二等(三年) 三等(五年)
- 中西 作介 厚東剛四郎 三村 惣一
- 富田 勇吉 田邊 秀雄 早川 魏
- 堀 正一 戸田 剛三 河内 通祐
- 松野 十一 三好 敬一 三戸 由彦

黒瀬 禎祿 阿部 政三 吉岡 良平

○本年夏期休業中には、縣より當地に水泳講習會を開かる、由なれば、盛に其技を練らむ事自由なるべし。會員たるもの大に奮つて可也

文藝辯論部記事

○第十例會、明治三十九年六月廿三日午後一時より、講堂に於いて開會、職員生徒出席、今回は生徒の演説はなくて、陸軍少將栗屋幹氏の訓話と中島教諭の撃劍の沿革につきての講話とありたり。栗屋少將訓話の概要は左の如し。

諸子は何の業に就くとも、決して小利巧なるなかれ。何事にまれ己が好む處に従ひて目的を遠大にすべし。かくて目的に向つて進むには、間道に入ることなく、直進して以て目的變更等のことあるべからず。諸子の道程は甚長きが故に、疲れず迷はず諸種の困難に遭遇しても、堅固なる思想を保持し、遠大なる目的に達する事を努めざるべからず。思想を變ずれば忽薄弱となるべく、小利巧なれば大成すること能はざるべし。

今日は何事をなすにも、學問才能によりて獨立獨歩し、敢て先輩の蔭に頼らざるの大覺悟なかるべからず。夫燈明の光に夜あるきする者は、もし燈明の消ゆる事あらば、忽にして闇路に迷ふべし。

中島教諭の「劍術の沿革に就いて」といふ講話は、大要左の如し。

尙武は我が邦人固有の性情なるが故に、劍撃のこと亦遠く上古より存せしこと、其例當時の史傳に尠からず。然れども劍術の奥秘を極め流派を立てて其術を師範するに至りしは、近古足利時代の中葉に始れるもの如し。飯篠家直の神道流、伊藤一刀齋の一刀流、上泉伊勢守秀綱の新陰流の如き即其例なり。これ蓋戰國干戈を事とするの時、自ら武技鍊達之士多くして斯かる流派を生ずるに至りしもの、亦時勢の然らしむる所に外ならず。斯くて徳川時代の初めに及びて益隆盛に趣き、將軍を初め天下の諸侯を厚うして武人を招くに至りしかば、其術を極むるもの踵をついて起る

又、假令金満家なりとも、親の財産を受けて樂に世を過さむとするは價値なき人間なり。必自己の力によりて、大財産を作り出さざるべからず。

表面には都合よく飾りおきながら、裏面にまはりて誹謗する如きは、つまらぬ婦女子の行ひなり。而もこれ長州人に通有せる一大缺點なり。かくては軍人としても三文の價値なき者たるなり。元來、表裏あるときは大なる信用を得ること能はず、人にして信用なくんば大事業はなし得られざるなり。故に男子たるもの宜しく己の意志を明白に述べよ。もし他人の面前に告白し得ざるほどの事ならば、裏面にて全く言ふことを止めよ。自己の意見あらば、他人の前にて公明正大に發表して、之を問ひて以て大に研究すべきなり。云々。



に至れり。今武術雑誌に載する所を見るに、其流派の多き七十  
四、五に上れり其盛なりしと想ふべきなり。降て明治以後に至  
り、其職にあらずして帯刀することを禁せられしより、劍術を學  
ぶもの從て減少し、僅に學校警察等に之を留むるに至れり。然れ  
ども、尙、古流の存するもの四十五六の多きを見る。  
而して現今最も多く行はるる所の劍術は、これ等諸流の混合流と  
も稱すべき警視廳流にして、明治十九年警視廳武術大會の際、上  
田馬之允、得能剛四郎等十六流の達人各自得意の術を提供し、取  
捨綜合して、編成せしものなり。  
現今多く用ゐらるる劍術の階級、一級より七級に至るもの如き  
も亦警視廳に於て一定せしものなり。  
明治維新前において、其優秀を示すに名人免許目録初段切紙等  
を以てしたるが、其名人は即一級にして、免許は二級、目録は三  
級、初段切紙は四級に相當するもの如し。明治二十六年警視廳  
の調査によれば、二級より五級に至るもの全國を過し大約千名前  
後なりしと云ふ。  
然るに現時多く行はるる所の劍術を見るに、之を學ぶものはこれ  
を人に見せんが爲めにつかひ、滑稽なる掛聲をなし、或は芝居狂  
言の如き身振りをなし、識者して一見嘔吐を催さしむる藝人的劍  
術をつかひて得意然とし、一般觀者も亦其技藝の末にのみ注目し、  
之を觀ること芝居狂言と異なることなく、劍術の本體を誤れるも  
の甚多きは、斯道の爲め慨嘆に堪へざる所なり。而して其惡風の  
由來する所を尋ねるに、明治の初年帶劍禁止の令出でて斯道漸く  
廢れ、之を學ぶもの減少して、斯道の大家生活の道を失ひたる時

に當り、新陰流の名士榊原健吉なる者、劍術を見世物興行として  
開演し、當時珍らしき見世物なりとて巨利を占めしかば、浪々の  
劍客競つてこれに倣へり。然るにこの輩は、何れも人に見するこ  
とを目的としたれば、劍術の本末如何を顧みることなく、兎に角  
觀て呉れよく、觀者の氣に入らんことのみ主としたれば、單に手  
先の早業身振掛聲等のみ注意し、大に斯道の眞價を下落せしめ、  
長く害毒を流して後進を誤らしむるに至れり。  
抑劍術の要は、事理一致の修業にありて、其目的とする所練心鍛  
術に外ならず。身體の働き太刀の運びは即ち業修業にして、心  
の修練は即ち理修業なり。而してこれ等兩修業の編成すべからざ  
ること、恰鳥の兩翼車の兩輪の如きなり。然るに一般の劍士多く  
は一面業修業に編して、心體を鍊り劍理を研究することを顧みず  
且つ業修業の如きも、多く其者眼卑劣にして勝負の末にのみ走れ  
るが故に、今日の如き劍術となれるものなるべし。諸君は末枝に  
走り盡飾に流れ外見體裁に拘はるが如きことなく、刻苦修練以て  
事理一致の妙所に到達すといふ點に力められんこと、是余の希望  
に堪へざるところなり。  
○本誌第五號、三十九年五月中旬原稿締切として編  
輯を終へ、同月末發送したるに、印刷製本出來して  
本會に到着したるは七月初旬なりき。總數五五〇部  
の中、職員二四、生徒三八八、卒業生及び要求者五  
六、もと職員一七、寄贈五九、の各方面に配布して

六部を残したるのみなりき。

○懸賞文、昨年夏期休業中各學年共各數題を課し  
て、懸賞文を募集し、作文受持の諸先生に委嘱して  
之を詮衡し、當選者には賞牌を授與する事とせり。  
而して十一月十三日印刷成りしを以て職員生徒に配  
布す。其選抜文の文題作者は左の如し。

祖先の墳墓	(一等)	第五學年	水間美繼
同	(二等)	同	長谷川秀一
同	(二等)	同	椋木貞一
同	(三等)	同	堀田幾太郎
琵琶を聞く	(三等)	同	吉村頼正
武士道	(一等)	第四學年	彌政竹雄
夏の水	(二等)	同	村田泰
武士道	(二等)	同	山根四朗
同	(三等)	同	大草又七
夏の水	(三等)	同	河内通祐
戦勝國の學生	(一等)	第三學年	福田敬次郎
日露戦記を読む	(二等)	同	宇野四郎
戦勝國の學生	(二等)	同	伊藤義雄
堂	(三等)	同	桑原雅亮
同	(三等)	同	藤井蕭
故郷の名勝	(一等)	第二學年	田中貢
海	(二等)	同	善甫亥三郎

海	(二等)	同	中原吉雄
同	(三等)	同	安達茂作
同	(三等)	同	小林直三郎
水泳術の必要	(一等)	第一學年	森重賢作
同	(二等)	同	飯尾三郎
同	(二等)	同	藤原政一
同	(三等)	同	波佐間久
故郷の名勝	(三等)	同	廣兼來藏

○第十一例會、時は嚴寒に近づく十一月二十四日、  
午後二時より寄宿舎談話室にて開會、藤井部長の開  
會の辭について出演したる者左の如し。  
運動の必要 第一學年 森重賢作  
今後吾人の活動と其理想 第二學年 大橋 伊  
豪傑なる法 第三學年 桑原雅亮  
男らしき失敗 同 香積元清  
青年の理想 同 福田敬二郎  
生徒間の制裁 第四學年 田阪榮助  
今の青年と昔の青年 第五學年 秋本善五郎  
殖民論 同 水間美繼  
或は熱誠に、或は面白く、諸君が思想を遺憾なく演  
出したるが爲か、時間の過ぐるを覺えず。井上教諭  
が滿韓旅行について追加談あるべかりしも、羽石校



長出演の豫定なりしも、時間不足を以て後回に譲られたり。閉會せしは午後五時なりき。

○閱覽室、從來各縣立學校、もと職員、卒業生、書肆等より寄贈し來たる書籍雜誌の類は、會員一般に閱覽を得ざりしが、四十年五月より、閱覽室を設けて、隨時披見し得べく計畫せられ、目下數十部の書籍雜誌を備付けあり。今後益増加すべく、會員の名文玉章も出づべく、室内裝飾も施さるべければ、會員を益すること蓋し尠少にはあらざらむ也。

○寄贈書目録

- 學友會誌 三三號 三四號 山口高等商業學校
- 豐浦校友會雜誌 九號 豐浦中學校
- 徳山校友會雜誌 九號 十號 徳山中學校
- 岩國校友會雜誌 六號 岩國中學校
- 馬關商業校友會雜誌 一九、二〇、二一號 下關商業學校
- 指月會雜誌 二號 東京指月會
- 多々良學報 曹洞宗第四中學校
- 翔鴻 四號 山口師範學校
- 學友會報 二號 山口農學校
- 宇都の音 十二號 徳島中學 宮澤精一郎氏
- 熊本縣熊本中學校校友會雜誌 井上大九郎氏
- 南海 十八號 大坂高商校友會 岡村喜代氏

校友會雜誌 一號

- 第淳海 十八號 同紀念號 大阪府堺中學校
- 球陽 十五號 沖繩縣立中學校
- 鶴城 十三號 岡山縣立津山中學校
- 東京高師校友會雜誌 十二號
- 三田評論 四十一號
- 石川縣立第四中學校校友會誌 二號
- 壯烈美談集 二部二冊 山中祐五郎氏
- 陸軍士官學校一覽 乃美忠次氏外二名
- ◎山岳一ノ一◎中央文壇一ノ一◎あきつ一、二、三◎中等學生指針一ノ一◎數學世界一ノ一◎青年一ノ三◎世界的青年二ノ一◎婦美乃登母二八

○第十二例會は本年六月廿九日午後一時より開會、上原部長まづ立て開會の辭を述べられ▲森重賢作君は「人生の活動」と題して、吾人の行爲は勇往邁進なるべしと説き▲小林直三郎君ついで立ち、徳川家康の傳記によりて、彼が織豊二氏に従ひたるも彼の政略も深遠なる謀に出でたるものにして、眞の勇才大略也といひ▲大橋下君は「日島裏面と學生」と題して流暢なる舌を運び、日進月歩の日本國猶裏面の暗黒あるが故に吾人學生は之が救濟者を以て任ずべしと説き▲古谷實君快辯を揮つて英雄の解剖に収かゝる、曰く英雄とは畸形兒にあらずして、大膽小心忍

耐の三要素を具備したる者ならざるべからずと其舉例亦大に當を得たり▲吉村延介君は悠々登壇咳一咳して曰く、我辯論會の振はざることを夥し、我等が將來は三尺秋水のみにあらず、三寸舌五寸筆を以て社會を動かすべき事多し、然るに之を勉めざるは何ぞやと▲落合健君出でて、學科の勉強は勿論大切なれど、猶各自が趣味を解せる運動を盛にやるべしと勸め▲桑原雅亮君大聲叱呼我は陸軍大將なり戰地に於る實驗談をすべしとて、我力疲れ彈丸つきて身心共に綿の如く弱りし時は、敵亦かくの如く疲れたる時なり、其間一步を進めて忍耐したる者は必勝の榮を得べし、是即勝敗の分岐點なりといひ▲福田敬次郎君は沈着の態度を以て道德修整の策を講ず、曰く上下道德腐敗したるを救ふには、社會宗教々育の三者によらざるべからずと▲安藤秋士先生は、世にはあらゆる方面に誤解多し、されど教育の力によりて之を解決し得らるべしと説かれ▲石光憲式君出でて柔道大にやるべし柔道は武藝のみにあらず精神の鍛練なり、嘉納先生が先生たる所以も亦其精神にあり、我等青年が之によりて心身を養はば宗教の必要をすら

認めざる也と云ひ▲山根四郎君は校風の振興と現時の制裁とについて有益なる談話を試み▲彌政竹雄君出でて曰く、行厨無かりし故エネルギーが不足なりと、是一の愛嬌、さて吾人は事々物々悉く樂天的に觀じて以て進むべしといひ▲濱屋七平君は學生と娛樂と題して、娛樂の種類程度利益等の順序を以て、終に健全なる娛樂を盛にすべしと述べたり▲かくて中村先生は、新購入標品について解説を與へられ、特に持田式竈にて飯を炊き、文明厨爐にて湯を沸して示されたり▲それより來會者一同に茶菓子の饗應ありて、散會せしは午後六時半、近來稀なる盛會なりき。

明治三十九年度校友會會費收支決算報告

- 收入の部
- 一金參百九拾九圓九拾錢 生徒會費
- 一金百〇五圓五拾壹錢七厘 職員會費
- 一金拾八圓 寄附金



- 一金拾八圓九拾壹錢
- 物品賣拂代
- 一金六圓拾參錢四厘
- 銀行預金利子
- 一金百七拾九圓參拾壹錢貳厘
- 前年度より繰越
- 合計金七百貳拾七圓七拾七錢參厘

○支出の部

- 一金七拾壹圓六拾八錢壹厘
- 文藝辯論部
- 一金參拾貳圓六拾九錢
- 端艇水泳部
- 一金七拾壹圓參拾五錢
- 球術部
- 一金四拾七圓六拾四錢
- 擊劍部
- 一金貳拾九圓〇七錢五厘
- 柔道部
- 一金貳圓
- 父兄保證人會費
- 一金四拾八圓貳拾八錢貳厘
- 陸上運動會費
- 一金百六拾九圓拾壹錢(臨時費)
- 埒創設費
- 一金拾六圓四拾錢 (同)
- 小學校優勝旗費
- 一金參拾四圓九拾七錢(同)
- 庭球コート新設費
- 一金六拾八圓拾六錢壹厘
- 雜費
- 合計金五百九拾壹圓參拾五錢九厘
- 差引殘金百參拾六圓四拾壹錢四厘
- 來年度へ繰越

右



附 録

山口縣立萩中學校沿革略

本校はその源を舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に發せり○後改めて公立中學校となし○明治十一年五月又改めて公立山口中學校の分校となし、大に教則を改正す○山口中學校が高等中學校となり、文部省の所管に歸するや、本校萩分校と改稱し、山口高等中學校の豫備校となれり○明治廿年四月改めて萩高等小學校別科と稱し、重見經誠氏主幹となり○同年八月綿貫謙輔氏代りて職を襲ぐ○同年十二月改めて萩學校となし○廿一年一月職制の改正ありて綿貫氏校長に任せられたり○二十三年四月公立を廢して私立とし、私立防長教育會これを管す○然るに、二十九年九月一日教育會はこれを寄附して山口縣尋常中學校分校となし、校則の全部を改正し○同年九

月廿八日綿貫氏は萩分校主事を命ぜられしが○三十一年三月三十一日教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となり○同年四月廿二日渡邊盈作氏主事に任せられたり。

○三十二年九月一日本校は山口縣中學校の分校より獨立して、山口縣萩中學校となり○同日縣令を以て本校規則を發布せられ、且、職制並に事務章程を訓令せらる○同日又元萩分校生徒貳百九拾參名の外、新に百拾名の入學を許し、教諭渡邊盈作氏は校長心得兼務を命ぜられ○同月十八日に至り、雨谷羔太郎氏校長に任せらる○乃ち同年十月十八日を以て開校式を舉行し、此日を以て永く本校の紀念日となす○

これより先、校舎は萩町大字江向村元明倫館跡にありしが、その獨立と共に、大字堀内村なる新築校舎に移る○三十四年四月十五日第一回卒業生三十七名。同年四月補習科を設け毎年これに倣ふ○三十五年二月十一日新築の寄宿舎を開きその式を擧ぐ。同年四月十七日第二回卒業生四十二名○三十六年三月廿九日第三回卒業生五十一名○三十七年三月卅日第四回卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長逝去

せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命ぜられ○同年十二月七日塚本氏校長に任せらる○三十八年三月廿七日第五回卒業生四十三名○此の月縣令を以て共通入學試験の制を定められ、爾後入學生徒の採用はこれによる○同年八月廿四日塚本校長轉任○教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命ぜらる○同年九月二日長崎縣立島原中學校長羽石重雄氏校長に任せらる○三十九年三月廿七日第六回卒業生六十一名○四十年三月廿三日第七回卒業生五十六名○本校生徒の數は、三十六年度を最多數となし○四十年度初の現在は、補習科の七名を合して三百八十名なりとす。





### 職員表

明治四十年七月一日現在

受持學科	職名	就職年月日	氏名	原籍地
修身、英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	校長	明治三十八年九月二日	羽石重雄	福岡縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	教諭兼舍監	同 三十六年八月三日	岩田博藏	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	教諭兼舍監	同 三十二年九月一日	安藤紀一	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	教諭	同 三十三年七月十四日	頓野多介	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	兼舍監	同 三十四年五月三日	中村秀次郎	茨城縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	教諭	同 三十五年四月十六日	藤原甚吉	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 三十八年四月十七日	井上要二	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 三十八年五月十六日	田總百合之助	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 三十九年四月七日	田中市郎	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 三十九年四月十一日	山本光二	熊本縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 三十九年六月廿八日	廣瀨菊次	廣島縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 四十年四月八日	橫田慎治	福岡縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 四十年五月廿五日	金子乙助	山口縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同	同 四十年四月十二日	安藤秋士	廣島縣
英語、國語、漢文、地理、算術、歷史、博物、國語、漢文、理化	同		溝部壯六	山口縣

### 學級數及生徒數表

明治四十年七月一日現在

種別	學年	補習科	第五學年	第四學年	第三學年	第二學年	第一學年	合計
學級數	一	二	二	二	二	二	二	一
生徒數	五	四九	五五	六八	八五	九八	三六〇	

姓名	出身	職名	就職年月日
津田末吉	山口縣	校長	明治四十年五月廿八日
相島直一	福岡縣	助教諭	同 三十九年三月三日
上原勝之進	山口縣	助教諭	同 三十九年十二月二日
伊藤義光	山口縣	書記	同 三十四年十月廿四日
品川清一	山口縣	同	同 三十八年一月十四日
橫田慎治	山口縣	前	同
中島豐之	山口縣	前	同
有田直三郎	山口縣	前	明治三十二年九月一日

### 生徒郷貫別調査表

明治四十年七月一日現在

町村名	補習科	五學年	四學年	三學年	二學年	一學年	合計
町村名	補習科	五學年	四學年	三學年	二學年	一學年	合計







第 三 年 學 習	第 四 年 學 習	第 五 年 學 習	補 習 科	最 長 年 齡	最 少 年 齡	平 均 年 齡
十 九 年 八 月	十 年 九 月	十 一 年 三 月	十 二 年	十 四 年 八 月	十 五 年 八 月	十 七 年 八 月
十 九 年 八 月	十 年 九 月	十 一 年 三 月	十 二 年	十 四 年 八 月	十 五 年 八 月	十 七 年 八 月

生徒年齡調查表

明治四十年七月一日調

合 計	京 都 府	韓 國	福 岡 縣	廣 島 縣	島 根 縣	市 關 下 計	郡 計
五 一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一
四 九	一	〇	〇	一	〇	〇	〇
五 五	一	一	〇	〇	〇	一	〇
六 八	二	〇	〇	一	一	〇	〇
八 五	二	〇	〇	〇	〇	三	三
九 八	四	〇	一	二	〇	一	一
三 六 〇	一	一	四	一	三	五	五

波 佐 郡	浦 郡	豐 郡	狹 郡	厚 郡	敷 郡	吉 郡	熊 毛 郡	玖 珂 郡
右 田 村	小 月 村	長 府 村	生 田 村	須 惠 村	厚 西 村	廣 瀨 村	嘉 川 村	名 田 村
一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	一	〇	〇	一	〇	〇
〇	二	一	一	〇	一	〇	〇	〇
〇	〇	〇	三	一	一	〇	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	一	一
一	二	一	一	一	二	四	一	一



第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
十七年九月	十八年十一月	十九年六月	二十年八月	二十一年十一月	

生徒入學前ノ成業別調査表

明治四十年七月一日現在

學級	成業學年					合計
	高等小學校卒業	高等小學校第三學年修了	高等小學校第二學年修了	合		
補習科	一	四	〇	七	九	五
第五學年	一九	一八	七	五	四	五
第四學年	三〇	一八	七	六	五	五
第三學年	四六	一八	四	八	六	八
第二學年	五五	二八	二	四	八	五
第一學年	四九	四四	五	二	五	九
合計	二〇〇	一三五	二五	二五	三六〇	〇

學武	補習科	第五學年	第四學年
明治三十三年九月採用ノ	三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉	厚東芳介 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉	田坂榮助 三村由彦 三村由彦 三村由彦 三村由彦 三村由彦 三村由彦

貸費生表	
明治三十三年九月採用ノ	三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉 三村五郎吉

卒業生一覽 (本年五月の現況にして誤謬なきを保しがたし)

第一回(明治三十四年)

- 德山中學校教諭
- 在郷酒造業
- 廣島市縣立中學校教諭
- 熊本縣立玉名中學校教諭
- 海軍機關學校在學中死亡
- 厚東太郎
- 山本政人
- 岡村喜與
- 堀野清一
- 河野厚造
- 天野正六
- 山田藤介
- 宮川鐵藏
- 三浦徳一
- 海軍少尉
- 高知市大林區署在勤
- 陸軍歩兵中尉
- 山口高等學校在學中死亡
- 都野正一
- 横田直藏
- 梨羽次郎
- 香原祐江
- 三上基介
- 坂上五一
- 阿武信一
- 田中三造
- 平田由之
- 中村章一
- 增山良四郎
- 平田千秋

附錄



海軍少尉二十一艇隊四十六號乘組  
阿武郡役所在勤  
在米國

陸軍步兵中尉

陸軍工兵少尉(遼陽第十四大隊第二中隊)

陸軍工兵少尉(旅順にて戰死)

東京郵便電信局在勤

陸軍步兵少尉

陸軍砲兵少尉(下關要塞)

以上三十七名

東京帝國大學工科大學  
同

柏村 吉博  
山本 吉德  
藤井 達吉  
兒玉 良三  
宮原 朝吉  
岡本 精一  
桐山 敏輔  
齋藤 良輔  
木川 貞輔  
勝野 貞清  
光藤 健介  
石田 藤八  
伊藤 治郎  
山本 四郎  
井上 四郎  
藤井 清

海軍少尉

京都帝國大學法科大學  
海軍少尉  
陸軍步兵少尉  
德島電信電話建築官駐在所  
死亡

東京帝國大學農科大學  
東京外國語學校 研究生

陸軍輜重兵少尉

三田尻鹽務局  
明倫高等小學校訓導

東京外國語學校 英語科

京都帝國大學法科大學

和田 準介  
阿武 御清  
石津 正一  
野村 正一  
湯原 正一  
山本 松四  
前田 正敏  
土屋 小七郎  
小澤 泰二  
林 章貫  
粟屋 春太郎  
佐伯 益豐  
森 信丸  
中村 喜代藏  
安江 楳生  
品川 鴻介  
河野 安宅  
粟屋 周祐  
山根 省三  
菊屋 孫輔

見習士官(步一八、豊橋)  
陸軍省在勤

陸軍步兵少尉

早稻田大學

陸軍騎兵少尉

海軍兵學校練習中

在郷農業

死亡

第七高等學校造士館

在郷

阿武郡福田小學校教員

陸軍步兵少尉

早稻田大學

東京國學院

山根 孝一  
梯並 誠一  
上原 多一  
三宅 彌太彦  
阿川 義介  
河野 通毅  
佐藤 虎介  
和田 專三  
阿座上 長一  
木村 彌三  
渡邊 五六  
山本 百合熊  
江川 英暢  
青水 英一  
波根 良一  
茶川 良一  
増野 榮三  
杵築 市助  
原川 國介  
山本 慈雲

死亡

東京帝國大學工科大學

陸軍輜重兵少尉

神戸市山本通四丁目九八ノ四

死亡

東京高等商業學校

死亡

農科大學實科

早稻田大學

山口高等商業學校

見習士官(步四一、廣島)

長崎郵便局在勤

以上四十二名

第三回(明治三十六年)  
廣島市縣立中學校教諭

玉木 正行  
兼常 清佐  
中村 文治郎  
佐古 良一  
大田 明治  
木村 磯治  
吉田 光胤  
羽根 義三  
寺田 林市  
阿部 昌介  
會根 昌一  
藤井 昌一  
宇野 英一  
林 壽香  
片山市 太郎  
白上 貫之助  
赤川 省吾  
飯尾 強介



海軍三等筆記  
東京高等商業學校  
明治大學

東京高等商業學校

海軍兵學校

海軍機關少尉候補生(明石艦乘組)

兵庫縣廳在勤

東京慈惠院醫學專門學校

早稻田大學

在鄉

在韓京城(商業)

第五高等學校

見習士官(步四二、山口)  
神戶燐寸會社

三池炭坑在勤

見習士官(步四二、山口)

見習士官(步四二、山口)

海軍兵學校

第七高等學校造士館

第三高等學校

山口高等商業學校

東京高等工業學校

廣島縣鹽原稅務省

陸軍士官學校在學中死亡

島尾平七  
大多和作太  
島田八重丸

三浦國藏  
渡邊儀賢  
弘毅太郎

紀藤庄介  
蓑妻規一  
山田正一

田坂信一  
粟屋勝郎  
坂本治郎

松本淳  
口羽雅介  
高木孫治

大島常完  
中島常介  
末岡周介

松本民介  
寺西啓太郎  
山下盛太郎

宮原藤吉  
木津谷泰夫  
松尾英一

乃美忠次  
杉山俊亮  
安間定次

福田信彥  
久保田庄作  
三浦九一

村田發太  
兒玉武男  
吉見市郎

藤井晴一  
新庄順一  
伊藤傳次

見習士官(步四二、山口)  
在京勉學中  
慶應義塾大學

東京高等工業學校  
農科大學獸醫學實科  
三ヶ濱大阪商船支店

大阪高等醫學學校

神戶稅關

在鄉

第四回(明治三十七年)

札幌農學校

見習士官(野砲七、北海道)

海軍兵學校

神戶高等商業學校

山口高等商業學校

稻田茂太  
見玉省三  
中野清

篠原五郎  
厚東健二郎  
波多野晋平

田中唯一  
內田贊一  
八谷俊一

上田米太郎  
片山熊雄  
永富儀三郎

厚東武雄  
香積見弼  
佐田健一

佐々木義彦  
兒玉馨四郎

室谷貞一  
山本公介  
佐古芳次郎

植木留壽  
能美留壽  
高橋熊太郎

浮里俊道  
青原忠一  
今井武方

吉武傳一  
橫田三介  
井上正作

原田信藏  
山田俊治  
中村敏介

桂木庄市  
村橋孫市  
和田正敏

和村精男  
木村精男  
有吉武彦

東京商船學校  
現役四十二聯隊  
岡山醫學專門學校

見習士官(步四二、山口)

山口高等商業學校

三見高等小學校教員

(毛卜小池)



慶應義塾大學  
東京外國語學校 英語科  
岡山醫學專門學校  
見習士官(工五大、廣島)  
早稻田大學

以上五十二名

第五回(明治三十八年)  
東京高等商業學校  
第六高等學校  
哲學館大學  
東京高等工業學校  
海軍兵學校  
陸軍士官學校  
見習士官(步四二、山口)  
見習士官(步一一、廣島)  
山口高等商業學校  
見習士官(步一、東京)

正木孝介  
根來行藏  
信國武尚  
井田昌一  
西村昌一  
笹原孝一  
山田昌介  
大谷清記  
大賀幾太  
榮正範  
仲義輔  
寺田幸吉  
前原四郎  
大谷卓三  
南方秋亮  
中村芳樹  
大田三郎  
村田仁介

慶應義塾大學  
東京高等商業學校  
岡山醫學專門學校  
山口高等商業學校  
八幡製鐵所  
在鄉  
在鄉  
兵庫鐘紡舍宅  
早稻田大學  
山口高等商業學校  
長崎醫學專門學校  
大阪高等工業學校

中村助順  
橫地素之進  
赤川義助  
林井俊二  
村井勝五郎  
羽崎政三  
下瀨東洋  
厚東英一  
野村健太郎  
大田純亮  
增野武一  
笹原盛二  
百井利長  
河野信壽  
高橋信一  
國弘嘉春  
吉富海乘  
坪井信太郎  
岡田兼文  
落合兼文

京都佛教大學  
明治大學

白水小學校教員  
在鄉

佐々並小學校教員  
在鄉

私立東京高等農林學校  
瀬戸崎小學校教員

第六回(明治三十九年)  
以上四十三名

中央大學  
慶應義塾大學  
山口高等商業學校  
自宅  
第五高等學校  
廣島高等師範學校

神崎一郎  
河名識雄  
田中義雄  
藤津亮然  
中村正治  
堀兼治  
口羽素介  
日比豐  
水津貞輔  
東谷光亮  
國重熙郎  
山田八郎  
和田俊雄  
堀谷太兵衛  
新谷德一  
中子德一  
井上欽一  
田村繁人

山口高等商業學校  
第六高等學校  
第二高等學校  
札幌農學校  
大津郡三隅宗頭尋常小學校在勤  
海軍機關學校  
外國語學校  
海軍機關學校  
中央大學  
第五高等學校  
海軍兵學校  
椿東小學校在勤  
大阪高等工業學校

森重操  
口羽順藏  
繁澤利往  
堀永仲三  
上堀太郎  
石津半治  
田中武雄  
岡中萬藏  
森重忠作  
阿川與一  
大深貞輔  
福本義亮  
佐々木竹四郎  
榎崎豐樹  
高木良輔  
箕妻準二  
山本良輔  
長谷千代一  
石村勘次郎  
長井寬治



慶應義塾大學  
旅順(實業)

山口高等商業學校

本校補習科

山口高等商業學校

廣島高等師範學校

山口高等商業學校

三池炭坑本社

山口高等商業學校

東亞同文書院

山口高等商業學校

山口高等商業學校

山口伊勢小路山田喜八方

本校補習科

三浦惟一 溝部九一 柏村堅吉 白村嘉幸 岡藤甚三 松野研一 平島哲郎 堀澤正政 大中正秀次 山本爲善 渡邊幾輔 山縣四郎 青野直彦 宮原道廣 永井要輔 石原忠亮 金子精一 藤井龜松 加藤保一 杉山判二

明倫小學校在勤  
同  
一年志願在濱田二十二聯隊

東京慈惠院醫學校  
山口高等商業學校

入營中  
死亡

東京高等工業學校  
第七回(明治四十年)

以上六十一名

山本敏造 山科元二 奧田又助 木村六郎 松尾民治 長澄市衛 西野政七 鹿野政一 讚井毅一 三好謙一 井山謙輔 小田太吉 栗柄庸生 波根又介 伊藤八郎 厚東刻夷 田原四郎 堀田幾太郎

本校補習科

白水小學校教員

山口高等商業學校  
本校補習科

本校補習科

東京牛込市ヶ谷町四〇山上萬次郎方

本校補習科

水間美三 善甫正三 佐藤良文 村田歲一 三浦正夫 藤井式寬 松井芳部 厚東芳介 益田淳謙 原田亮一 岡田亮一 小野梧一 神田頼孝 吉村頼正 小林京介 中村樹介 林義助 吉岡恒卿 長岡忠雄 山下寬一

國重孝 河北一三 金子雨一 三村五郎吉 大谷二郎 阿川義人 羽倉市熊 阿川環亮 品川庸平 松本善五郎 三戶良一 伊藤利博 田村壯介 大谷壽福 吉浦緒信得 村崎敏行 德富周一 杉山清一 江原一郎 柳田昇二郎



阿武郡役所

廣島市幟町岸信和內  
本校補習科

長谷川 秀一  
來島 元助  
横見 莞爾  
平川 春助  
村上 欣一  
水井 精一  
黒瀬 白  
福間 四郎  
田中 一豊  
中村 誠一郎  
河野 次郎  
奥野 真一  
兒玉 忠彦

以上五十六名

右卒業生總數三百四十二名



### 會 告

- 一、本號の紙數は前號より多けれど、猶原稿のすべてを掲載する能はず、遺憾ながら没書したるもの有り。乞ふ幸に諒察せられよ。
- 一、本誌第七號に、卒業生諸君の寄せらるゝ原稿は、來四十一年四月末までにせられたし。
- 一、卒業生諸君にして、本誌を要する方は、毎年四月末日までに、實費金拾八錢（貳錢切手九枚にても）送附せられたし。
- 一、本會は、卒業生其他諸君の寄附を受くべし。書籍雜誌にても金員にても其外の物品にても、奮て寄贈あらむ事を望む。

明治四十年八月七日印刷  
明治四十年八月十日發行

（非賣品）

編發行  
者兼

品 川 精 一

山口縣阿武郡萩町第五番屋敷居住士族

印刷者 佐久間 衡 治

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地



東京府立図書館

萩市立萩図書館



111806790